魔道都の修理屋

甘いささやきはキケンです！

MAYOUTO NO SYUURIYA

かりそーこ
illustration 鳴海ゆき

一迅社文庫アイリス

魔道都の修理屋

甘いささやきはキケンです！

かいとーこ

TŌKO KAI

一迅社文庫アイリス

魔道都の修理屋

甘いささやきはキケンです！

かいとーこ

TŌKO KAI

一迅社文庫アイリス

CONTENTS

序章　相変わらず、神に翻弄される日々　8
1章　曰く付きの水の都市　23
2章　甘いささやきの被害者達と、その被害者　95
3章　太陽の因縁　136
4章　太陽神に呪われた街　185
5章　先祖からの課題　228
あとがき　283

魔道都の修理屋

MADOUTO NO SYUURIYA

甘いささやきはキケンです！



太陽神ラーハ

太陽と生命を司る一級神。
短気で嫉妬深く自己中心的。
短絡的な行動で周囲に迷惑を撒き散らす。

イゼア＝ウィーゲム

魔動機修理師の弟子。14歳。
太陽神に魔法が使えない呪いをかけられた一族の少女。
太陽神と死神から祝福を受けたが、やはり魔法は使えない。

アーソルド＝ルフィル

名門魔道貴族。15歳
頭脳明晰、運動神経抜群、魔法の扱いは天才的な美少年。
イゼアを自分の所有物だと思っている。

登場人物紹介





◉具神(ぐしん)ゼイレム

道具を司る二級神。その昔、太陽神に心を封じられたため、力が満足に使えない。

◉マナラ=エルーシア

魔動機修理師。いつも魔動機修理に熱中しすぎて食事・睡眠を忘れてしまう。周囲に心配されるほど不健康だったが、イゼアが弟子になり多少改善された。

イーリス=ウィーゲム ◉ イゼアの兄。女性を無意識に口説く魔性の男。

アラン=トール ◉ アーソルドの学友。死霊をこよなく愛している死霊術師の貴族。

死神ターラ ◉ 太陽神に対をなす、死を司る一級神。常識的で仕事熱心なため気苦労が絶えない。

用語紹介

◆神　一級神から六級神が存在する。一級神は六人だが、二級神、三級神と下がるにつれて数は増えていく。

◆魔道学院エムラド　魔道機関「理力の塔」が運営している、魔道士を目指す人間が入る学舎。

◆魔動機　魔力で動く機械の総称。

イラストレーション◆鳴海ゆき

魔道都の修理屋　甘いささやきはキケンです！

序章　相変わらず、神に翻弄される日々

イゼアは目を伏せていた。アーソルドも、同じようにしているだろう。

ひんやりとして空気はどこか重く、息をするだけで胸の辺りが圧迫されているような、苦しさを覚えた。

しんと静まり返り、風の音すら聞こえない。

目を開けてみたわけでも、周りに手を伸ばしたわけでもないが、とても広い、果てなどない場所のように感じた。

早鐘を打つ鼓動の音と、アーソルドの息遣いが、生きていると実感させてくれる。

二人は互いの緊張が手に取るように分かっていた。二人とも気持ちは同じだ。家同士の都合で幼い頃からずっと一緒にいた、いわゆる幼馴染みの仲だが、これほど二人の心が一つになったのは初めてだろう。

離れないようにしっかりとローブを掴んだつもりだったが、とてもさらさらした高そうな素材で、手が滑り落ちそうになった。イゼアは慌てて、強く掴み直す。普段ならしわになってし

まうのを恐れて、こんな事は出来ないが、今のイゼアの心境は、とても平常とは呼べなかった。

肌寒いほどなのに、手の平は汗でべとべとして、少し気持ちが悪かった。

今、イゼアは後ろ襟を掴まれている。冷たい指先が、首筋に触れて、それが今の彼女を支えている。

先ほどからじっと待っているが、何も変化が起きない。伏せた目を開きたくなるのを、何とか堪えているが、どうしていいのか分からなかった。ただ胸の高鳴りが耳の奥で響くのを聞いて、生を実感した。

二人はそうやって、緊張の時を過ごした。

どれぐらい経っただろうか。

「イゼア!?」

聞こえたのは、驚いたような男の声。いつもは落ち着いた美しい低音が、今日はよほど驚いたのか、ひっくり返っていた。

「ターラ、ようやく来たか」

そう言ったのは、イゼアとアーソルドの後ろ襟を掴んでいる、太陽神ラーハだ。神々の中でも最上級の力を持っているが、それ故に鈍感で、腹を立てるだけ無駄なほど他人の気持ちが理解出来ない、ある意味人間の想像する、神様らしい神だ。

彼はかつて女神に振られた腹いせに、その女神の相手だった月神を、人として転生させ、な

おかつ執拗に追いかけ回した。そして月神がイゼアの先祖に転生した時、うっかり末代まで魔法を封じる呪いをかけて、ウィーゲム家を不幸のどん底に突き落とした、なまじ力が有り余っているから手に負えない、どうしようもない神である。

一度怒り出すと手がつけられないが、普段は神殿でぼーっと過ごしている事が多いらしく、人間からは引きこもりだと言われている。基本的にはおおらかな性格らしく、呪ってすっきりした後は、イゼアの先祖の事など綺麗さっぱり忘れて過ごしていたらしい。

太陽相手に憎しみを持っても意味はないが、憎く思わずにはいられない、イゼアの不幸の元凶の一人だ。

彼とは色々あって、イゼアに勝手に自分の力を与える印をつけて、不完全とはいえ自分の巫女にして、なぜかくだらない相談事にやって来るようになった。

神に印を与えられるというのは、つまりその神に支配され従属させられるという事だ。

ラーハの支配が不完全ですんだのは、ラーハの対である死神ターラが、全て支配される前に死神の印を与えて、ラーハによる支配を防いで、均衡を保ってくれたおかげだ。イゼアがもしも魔法を使ったりすれば、その均衡は崩れ、どちらかの神の印が完全なものとなり、神に直接仕える正巫女になる。

人でありながら人ならざる力を授かり、不老の存在、限りなく精霊に近い存在になるのだ。

イゼアはそれが嫌だった。神に合わせるのは、凡人では受け入れる事さえ困難だと言われて

いる。特に、ラーハの巫女になるのが嫌だった。

「いいか、二人とも。そのまま、そのまま口と目を閉じているんだ」

狼狽を隠し切れない声で、ターラが呼びかけてきた。

「すぐに安全な場所に連れていく。絶対にラーハとの接触をやめてはいけない。絶対にだ。良いと言うまで、じっとそのままにしていなさい。理解しているようだから良いが、今、お前達はとても危険な状態だ」

ラーハにも軽く同じ説明を受けた。本当に軽く言われたが、彼は何事も軽く言うので、自分自身で言葉の意味を咀嚼し、よく分からないなりにとても危ない場所に連れてこられたのだと理解し、二人は必死でラーハのローブにしがみついていたのだ。ターラがこれほどまでに慌てる事態だと知ると、ますます心臓が煩くなった。

生きた心地がしないとは、この事である。

詳しい説明は受けていないし、ここがどこかなど見当もつかないが、彼等の言葉から、ここは生者が存在してはいけない場所だという事だけは確信出来た。

生の象徴であるラーハに守られていなければ、死んでしまっているような、死の神域のどこかだ。

だから顔が引きつる。きっとアーソルドもイゼアと同じだ。手に取るように、互いの様子が分かるなんて、きっとこれが最初で最後だ。

「ラーハ、文句を言いたいところだが、今はとりあえずついてこい」

イゼア達が落ち着いているのを見たためか、平静を取り戻したターラは、普段の穏やかな口調で言った。

イゼア達が戸惑っていると、全身の皮膚の表面を撫でるかのような感覚の後、ラーハが予告もなく後ろ襟から手を離した。

一瞬、心臓が凍り付いた。

「二人とも、もう大丈夫だ、目を開けていいぞ」

優しいターラの声を聞き、二人はほとんど同時に目を開いた。おかしな空間でもなく、比較的普通の場所にいると分かると、腰が抜けてへたり込んでしまった。イゼアは横座りしながら、恐る恐る周囲を見回した。

無機質な白い部屋だった。部屋にあるのは、木製の背の低いテーブルと長椅子、そして大きな砂時計だけ。不思議な砂時計で、丸いガラスの中で浮いている。予想よりはるかに普通だが、それでも不思議な空間だった。

心なしか空気が軽くなり、身体が楽になったような気がした。

いつもふてぶてしいアーソルドも、今日ばかりは恐る恐る自分の身体を見回していた。アーソルドは自分が無事だと理解したのか、次はイゼアに視線を移し、手を伸ばしてきた。

平時なら拒否をするところだが、互いに死にかけたため、不安になっていたのだろう。イゼ



アも彼の顔に手を伸ばして、その温かい頬に触れて安堵した。彼もイゼアに触れると、冷たい色の瞳でイゼアの顔をじっと見つめた。こうして何も言わなければ、冷静そうに見える格好いい男の子なのだが、彼も実はイゼア並みに困惑していて、表情も言葉も出てこないだけだろう。彼は昔から怖がりで、子供の頃はよくイゼアを盾にしたものだ。今は状況が状況なため、怖がるのも仕方がない。

彼はラーハとは今日が初対面で、振り回されるのに慣れていない。だから余計に不安だったのだろうと思い、彼の頭を撫でてやる。顔を赤らめたが、拒否しなかった。

イゼアよりも長い銀髪は、ふわふわしていてさわり心地が良かった

「ラーハ、そういう時は一言声を掛けてから離した方がいい。年端も行かぬ子供達をあんなに怯えさせて、可哀相だとは思わなかったのか？」

闇を纏っているかのような黒髪の男が、日の光を思わせるような金髪の男に指を突きつけて説教をした。二人とも作り物のように整った形貌で、一目見れば人ならざる存在だと察する事が出来るだろう。

説教をしているのが死神ターラで、反省するそぶりさえないのが太陽神ラーハである。

イゼア達は年端も行かぬほど幼くはないが、神の目線だと十四歳でも幼児と大差ないのかもしれない。

「そうか。それは悪い事をしたな」

「そもそも生きた人間を連れてこんな場所にくるのが一番可哀相だ。それに私の巫女でもあるイゼアだけならともかく、赤の他人まで連れてくるとは、一体何を考えているんだ」

ターラはこめかみを押さえて、溢れそうになる諸々の感情を抑え込むようにして問うた。しかしラーハはいつもの調子でそれに答えた。

「この男……アーソルドだったか。私達の母がどんな方だったかと尋ねてきたから、覚えていそうなお前の元に連れてきたんだ」

そう、事の発端はそれだ。アーソルドが尋ねたのだ。たまたまアーソルド達が遊びに来ている時にラーハがやって来て、何でも聞けと言われたから、素直に彼等の母、母神と呼ばれる至高神はどんな方なのか、と。

母神は世界を創造した後、神々に管理を任せて別の場所で眠ってしまったと神話には書かれている。それが本当なのかどうか、知りたかっただけなのだ。しかしラーハはあまりにも前の事だったために、覚えていなかった。

「連れてくるな。せめて私を呼び出せ」

「仕事中毒のお前を呼び出すのは悪いだろう」

「常識を意識したのはいいが、それが他の常識と釣り合うかどうか考えてから行動しろ。連れて来られた方が余計な手間が増えるだろう。神官達は私を休ませたがっているから、誰一人として不幸な者は生まれない」

「なるほど」

ラーハは素直に意見を聞き入れた。彼は我が道を行くが、他人の忠告に耳を貸せない狭量な男ではない。判断能力が人間どころか同種族と比べてもおかしいだけだ。

ターラに足を運んでもらう事には罪悪感を覚えるが、それが誰にとっても最も楽な道だったと、納得出来ただろう。

「人間にとって、生きたままここに来るというのは、お前が思っている以上に負担がかかるものだ。二人の魔力が強かったからいいものの、ここの空気を吸うだけで死んでしまう人間もいるほどだ」

苦しいのは気のせいだと思っていたが、本当に身体は苦しがっていたようだ。

怖くなったのか、アーソルドはイゼアの肩に手を置いた。

「軟弱な」

ラーハは腕を組んで言った。

「生者とはそういうものだ。私達は生きているとは言いがたいから、私にさえ本当の意味ではそれを理解出来ていない。しかし彼らの気持ちを想像して、嫌がりそうな事をしないのは可能だ」

ターラの言葉を言い換えるならこうなる。

『お前の親切は迷惑だから、もう何もするな』

切ないが、何もしない事こそが、ラーハに出来る最上の親切だろう。
「二人とも、すぐに帰してやりたいが、しばらくここの空気に慣れるまで待って欲しい。二人には自分で思っている以上に負担がかかっている。いきなり戻るとその負担が一気にかかるから、慣れるまではここで休んでいるといい」
ターラは振り返り、すまなげに言う。
イゼアとアーソルドはもう一度お互いの姿を確認した。顔色は悪くない。魔力もいつもの通りだ。見た目では分からない負担があるのだろう。
「誰か、温かい飲み物と、子供が好きそうな甘い物を」
ターラが命じると、壁にあったドアのない出入り口から、一般の死神官とは少しだけ意匠の異なる法衣を着た若い男がやって来た。死神官は葬式の時に呼ばれるため、誰もが一度は目にした事のある法衣だから、違いが目につく。闇が広がっているように見える出入り口から入ってくる様は、少し異様だった。
彼は言われる前から準備をしていたようで、既に盆を持っていた。
「さあ、こちらに座ってゆっくりしていなさい。これらは全て人間の物だよ。生者の物を食べれば、戻りやすくなるからね」
彼はイゼアに微笑みかけて、お茶の準備をし始めた。
少し顔色が悪いが、それ以外は普通に見える、優しげな青年だった。元は人間だった、ここ

に来るために死んでしまった神官だろう。死神に直接仕えるには、この死の領域に住まわなければならない。つまり人として死ななければならないのだ。

彼等はその覚悟を持って死神に仕える、真面目な神官だ。彼らのように神の印を受けた者を、普通の神官と区別するために便宜上、正神官と呼んでいる。

「生者の食べ物？　なぜここにそんな物がある？　食べる必要などないだろう」

ラーハが首を傾げ言い、ターラがため息をついた。

「そんな事も理解出来ないのか……」

その言葉を聞いて、ラーハはむっとした。その視線を受けて、ターラは沈痛な面持ちで目を伏せた。

「簡単な事だ。彼等は人間である事は捨てたが、それでも人として育った根底が覆る事はない。嗜好品として食物を求めるのは当然の事だ。彼等はそうやって、普通の人間がする習慣を再現する事で、人としての自我を維持している」

ターラの説明に、ラーハは首を傾げながら、イゼア達に出された菓子を勝手に口にした。

「湿気ってすらいないな」

「週に二日ほど休ませている。禄として貢ぎ物の一部を与え、それを換金して嗜好品を買い込んでいるんだ」

「お前の神官は、そんな簡単に外に出ているのか」

ラーハが驚くのだから、神から見ても異様な事なのだろう。
イゼアも彼等は一生を死正殿で過ごす気概で印を与えられたのだと思い込んでいた。彼等は死者なのだから、死の領域から出てこられるはずがないと。
「私の神官は他の神官よりも孤立するから仕方がない。彼等の精神は人間だから、心の安らぎは必要だ。自分で外に出て、欲しい物を見て買うというのは、とても有意義な事らしい」
道理で主が働きすぎる事に、死神官達が罪悪感を覚えるはずだ。
生き物は死ねばこの死の領域、俗に言う冥界にやってくる。それを適切に誘導するのが死神と死神官の仕事だ。生命は生まれたら死ぬ定めであり、常にどこかで誰かが死んでいる。だから真面目なターラは休む事なく毎日働いている。それなのに自分たちだけ休みをもらっていては、主を休ませようとするのは当然の事だ。イゼアだって同じ立場なら、たまには休んでくださいと言っているはずだ。
「で、話題を戻すが、母はどのような方だっただろうか？」
「お前が覚えていないのに、私が覚えているはずがないだろう。お前が兄なら、私は弟にあたるのだから」
「そうか。では他の連中に」
「待て待て、まだ回る気か。私達が忘れているのだから、誰に聞いても覚えていないだろう。だいたい彼等をよく見ろ。既にそんな質問などどうでもいいといった顔をしている。お前には

空気を読んだり、人の心を察しようという気はないのか」

再び説教が始まったので、イゼアは出されたお茶と菓子をもらった。

「あ、美味しい」

「本当だ……生きてて良かったな」

アーソルドが感慨深く言い、まったくだとイゼアは頷いた。

温かい物をこれほど美味しく感じたのは、アーソルドに真冬の川へと投げ込まれて以来だ。あの時は、一応は彼も追って川に飛び込んだのだが、精霊が勝手に守ってくれる精霊使いと一般人では、川の中での体感温度がまったく違う。精霊とは自然そのものが意志と力を持った存在で、自分が好いた相手が凍えないように、勝手にある程度の温度調節をしてくれるのだ。

「これはね、君達のいる大陸とは別のお茶とお菓子なんだよ。この死正殿は特定の場所にないから、どこにでも出られるのが便利でね」

ターラの正神官に教えてもらい、初めて見る綺麗な甘い菓子を眺めた。淡い色で、上品な甘さだ。上等な砂糖が使われているのだろう。お茶は淡い黄金色で、少し甘味がある。

「へぇ、そうなんですか。大陸外のお菓子なんて初めて食べました。いつもこういう物を買ってくるんですか？」

「これは今ある中では、一番上等な物かな。私達は外に出るとアンデットと同じだから、気軽にってわけでもないんだけど」

「あ……」

彼等は人間としては死んでいて、アーソルドの友人の、死霊術士のアランがいつも遊び相手にしている、死に損ないであるアンデット達と同じような存在なのだ。この世で最も高等なアンデットは始祖の吸血鬼だと思い込んでいたが、実は彼等だったのだ。

「まあ、でも、吸血鬼とかならけっこうそこら辺にいますし」

「そうだね。彼等ほど弱点が多くないからそこまで不便はしていないけど、真夏でも全身を隠さなきゃならないから、不審がられるのはさすがに不便かな。太陽は僕等の弱点だからね」

「正神官でも太陽は苦手なんですか？」

「日光に直接当たると痛いんだ。なのに太陽神官は闇の中でも平気だから、少しずるいね。特に仕事らしい仕事もないし」

生物は放置していても勝手に生まれて死ぬ。太陽神官達の一番の仕事は、ラーハを見張る事かもしれない。

「太陽神官の方々は、どう間違って神官になられたんだろう」

カップから口を離したアーソルドは、そう呟いた。彼はラーハに仕える者は、気が迷ったのだと思っているようだ。

「さぁ。でも太陽の恵みに感動する事は、生きていればいくらでもあるからね。安らかな死に感謝する人よりは、ずっと多いんじゃないかな」

逆に死は恐れられる。それも一種の崇拝方法だ。

「さあ、お茶のお代わりもあるよ。身体が冷えているだろうから、温めた方がいい。あれもしばらく続くだろうからね」

あれとは、イゼアが意図的に無視している説教と質問の応酬の事だ。

「ありがとうございます。もう二度とラーハ様に質問はしません」

今回の質問は、アーソルドか聞かなくとも、いつかイゼアも聞いていただろう。どちらが質問したか、それだけの差だ。

そうして、常識的な説教を続けるターラと、本当の意味で反省していないラーハを横目に、年代物の長椅子に並んで座り、菓子を食べながら時がすぎるのを待った。

昼食中に連れ出されたので、とても空腹だったのだ。

1章　曰く付きの水の都市

イゼアは悩み多き年頃だ。普通であれば将来や恋の事で悩むのだろうが、彼女の悩みは、わがままで身勝手なラーハとアーソルドの二人が原因であるものがほとんどだった。二人がいなければ、イゼアの悩みの九割は解決するはずだ。

呪いが解けても解けなくても、どうせ魔法は使えないのだから。

この前はラーハのせいで胆が冷えたが、今日はアーソルド関係の悩みで呻いている。

「……今度は直接送られてきた」

小包が。

アリセレス＝ルフィル、つまりアーソルドの母から。

今まではアーソルド経由で何かが届けられる事はよくあったが、直接というのは初めての事だった。

配達員は、炎天下の中、衝撃を受けるイゼアを訝しみながら、首にかけた麻布で汗を拭い、サインを求めてきた。彼のいる場所は日光が直接当たり、あまり待たせるのは酷だ。

「あの……住所が間違っていたって送り主に返してもらう事って出来ますか？」
「えっ!?　そんな、困りますっ。受け取り拒否ならともかく、そんな事はさすがにっ」
配達人が困惑し、イゼアはため息をついた。
中身は別に怪しい物ではないし、ただの配達員である彼に罪はない。
「そうですね。分かりました。ありがとうございます」
後々ろくな事にならないと分かっているから、嫌々受け取りのサインをして荷物を受け取り、足でドアを閉めた。
中身が詰まっているのか、ずっしりと重い荷物を、両手でしっかりと抱え直した。機械油の臭いがする、涼しい工房に戻ると、作業台の空いている部分に荷物を置いた。
ここはイゼアの師匠であるマナラの魔動機の修理工房だ。魔動機とは、魔力を原動力として動く機械の総称である。その魔動機の技師を、魔工技師と呼ぶ。
この魔道都市アンセムでも珍しい魔動機の修理屋を営む魔工技師のマナラは、長い髪を三つ編みにした、まだ二十歳前の若い女性だ。いつも寝不足で、こびりついてしまったようなクマを隠すように眼鏡をかけている。出会った頃よりはずいぶんと顔色は良くなったが、早く寝るように促しても、眠れないとこっそり工房に戻って修理をするので、なかなか改善されない。美容に気を使って、ちゃんと着飾れば十分美人なのだが、彼女は容姿にはまったく無頓着なのだ。外に出る時だろうと、いつも作業着とエプロンを身に付けたままである。

生まれはアーソルド並みの魔道貴族のご令嬢なのだが、魔力が低すぎて家の中でも冷遇され、家を出て色々あってこの商売を始めたらしい。魔力だけはあるイゼアとは真逆だが、似たような境遇だったから、弟子として迎え入れてくれた。ラーハとアーソルドのせいで迷惑をかけっぱなしだが、それで追い出そうとはまったく思っていないらしい。とても良い人だ。

「それ、誰から？」

「アリセレスおば様……アーソルド様のお母様からです」

マナラは眼鏡の下の目を見開いた。

イゼアがマナラに弟子入りしたのは、アーソルドの母が一番の原因だった。

どういうわけか、イゼアをアーソルドの愛人として引き取ろうとしたのだ。いまだにどういう事情でそうなったのかは分からない。アーソルドですら戸惑っていたのだから、親たちの独断だ。

魔道貴族はその優れた血統を保つ必要があるから、本妻は魔道士として血筋に優れた、魔力の高い女でなければならず、政略結婚が不可欠なのだが、愛人なら選びたい放題だ。なのに髪を切っただけで男の子と間違われてしまうようなイゼアが、本人達の知らないところで譲渡されそうになっていた。

顔立ちが似ていると言われている金髪碧眼の兄は、常に女性の視線を集めているので、イゼアは決して不細工ではないはずだが、髪が短いだけで男の子のように見えるらしいのだ。アー

ソルドにも男みたいだと言われたから、彼の方もイゼアの事をただの子分だとしか思っていないはずだ。昔からアーソルドはイゼアを連れ回したり苛めていたほどだ。それを親達は仲が良いと勘違いし続けていた。なまじ男女だったため、それがついに暴走したのだ。

イゼアはとにかく愛人になるのは嫌だったので、逃げるために学校をやめて、担任の教師の取り成しで、マナラに弟子入りした。

「アーソルド母が直接？　いつもはアーソルドが持ってくるのに……」

その意味を察して、マナラが考え込んだ。

アリセレスはイゼアが弟子入りしてからも、アーソルド経由でイゼアの好きな物を送ってくれた。そして今日、とうとうアーソルドすら経由せず、直接送り付けてきた。

これが意味する事は、どういった事なのか、イゼアにもまだ分からなかった。

恐る恐る包みを開けると、木箱の中身から出た冷気が拡散した。中には地元の農産物や干物などが詰まっていた。腐らないように精霊魔法で冷やしてくれていたらしい。

一見すると普通の仕送りだ。おそらくは、本当に普通の仕送りのつもりなのだろう。

「なぁ、こういうのは普通、実の親が送ってこないか？」

「おば様は……実の親よりも実の親っぽい事をしてくれるんです。話を聞いてくれないけど、いい人なんです。どうしても話を聞いてくれないけど、娘のように可愛がってくれるんです」

アーソルドは容姿も性格も母親似だった。顔には口元などに父親の面影もあるが、話を聞か

ない、気にしないところは母親そっくりだった。
「本当に、お前がエムラドを出てまでアーソルドから逃げたのを気にしてないのな」
エムラドとは、イゼアのいた魔道学院だ。この大陸では最も権威ある魔道学院で、イゼアは筆記と魔力でなんとかアーソルドと同じ特別クラスに在籍していた。そんな一流の学院を、落第したわけでもないのにやめるなど、逃げるためと考えるのが普通だ。なのに彼女は少しも気にしていないようだ。
しかも普通に、イゼアの身体を心配する手紙も添えられていた。暑くなってきたが、夏バテしてないか、喉を通りやすい果物を入れたからと、まるで母親からの手紙だった。
「これ干物？」
「実家のあるサマリドは二本の川に挟まれた水の都市なんです。ルフィル家の敷地にも小川が流れてて、アーソルド様が契約している中で一番強いのは、そこに住んでいる水の精霊です」
「ふぅん。そういう土地だから魔道士が支配してるのか」
川に挟まれているという事は、攻められにくいし守りやすいが、水害の危険があるという事だ。安定した土地なので滅多に川は暴れないが、それでもたまに川が氾濫しそうになる。その時に魔道士、その中でも精霊使いがいれば、被害は格段と少なくなる。ルフィル家の精霊使いはまんべんなく、どんな精霊にも好かれているので、大概の自然災害には対応出来る。
「夏になると毎年川でアーソルド様に弄ばれてました」

何度思い返しても、アーソルドと遊んで、食べ物以外でいい思い出など一つもない。

「……ああ、川に突き落とされたってあれか」

女の子が男の子と川遊びをするなどはしたないと思って川に入らないのに、命令を無視されたと思ってむきになっていたのだろう。

「おかげで素手で魚を捕まえられるようになりました」

「素手で？　なんで？」

「素手で捕まえろって言われて。突き落とした手前、何か命令したかったんでしょう」

「あいつは……だからこんな変な関係が築き上げられたのか」

「そうなんですよ」

アーソルドとイゼアの関係はとても複雑だ。

先祖は方向性は違うが、同等の実力を持つ良き友人、良き仲間だった。

ウィーゲム家の先祖が、実にくだらない理由でラーハに呪われて魔法が使えなくなってから、呪いが解けるまでという約束で、ルフィル家に保護される対象となった。

しかしアーソルドは保護すると称して、女の子のイゼアを男の子達の乱暴この上ない遊びに付き合わせたり、理不尽な命令をしたのだ。理由もなく川に突き落とされたり、蛇を追い払うように命じられたり、保護ではなく、ほとんど従属させられているようなものだった。

「何にしても、受け取った以上はお礼の手紙を書いておくんだよ」

「それは……もちろん」
出来れば関わりたくないので、事務的な手紙を書く事にした。感激しているように見えない、慇懃な手紙だ。
「そういえば、実の親とは何か連絡取ってんの？」
「いえ、ぜんぜん。どうせ理不尽に叱るだけだから、必要もないかなって。兄とは手紙のやり取りをしてるので」
「……お前がいいんならいいけど」
マナラはそれだけ言うと、作業を再開した。
イゼアには手も足も出ない、用途不明の高度な魔動機だ。彼女は人に依頼されて修理したり、ジャンク品を修理して売ったりして生活しているのだが、生活出来れば十分と思っているから、気に入った魔動機は売らずに収拾して楽しんでいる。今修理している魔動機も、その一つになるだろう。彼女は魔動機とその修理が好きでこの仕事をしているのだから。
「今の内に手紙を書いて、出しに行くついでに買い物してきます」
「今日は暑いから帽子を忘れるんじゃないよ」
「はい」
イゼアはひんやりとした工房を出て、暑い二階へと上がった。

◆◇◆◇◆

瓶詰めにされていた、桃のシロップ漬けを口にする。

仕事の合間の休憩は、甘い物に限る。よく冷やしてあるので、夏も盛りでバテ気味のこの季節に食べるには最適だ。本当は加工していない桃が一番なのだが、それは故郷のサマリドに帰らない事には味わえない。

この桃が好きなのを知っていて、幼い頃のアーソルドは、自分だけイゼアの前で食べて『欲しければ相応の頼み方があるだろう』と、よく意地悪な事を言ったものだ。

小包は不気味だったが、中にはイゼアが好きな物しか入っておらず、ここ数日で既に半分消費されていた。

アリセレスはイゼアやアーソルドの好きな物はよく知っているのに、どうしてイゼアがアーソルドを嫌っていると察してくれないのか、なぜイゼアとアーソルドを愛人関係にしてまで一緒にさせたいのか、さっぱり分からなかった。

娘が欲しかったにしても、アーソルドの嫁を娘のように可愛がればいいのだ。イゼアのような男と間違えられる子を、当人達が望んでいないのに無理やり愛人にする必要はない。

「マナラさん、どんなしっぺ返しが来るか怖いんですけど……」

しかし美味しいから食べてしまうのだ。

「そうだな。そろそろエムラドも夏季休暇だろ。毎日押し掛けてこないか心配だ」
マナラの指摘を受けて、イゼアは戦慄した。
弟子入りしてテストも休暇の準備もなくなったから、夏休みの事をすっかり忘れていた。
「ま……まぁ、来たとしても、最初だけですよ。アーソルド様は実家大好きですから、きっと帰りますよっ！」
「ならいいけどな」
そうマナラが呟いた時だった。工房のドアが突然外から開き、外の暑い空気が流れ込んだ。
「涼しいなここは」
そう言いながら、銀髪の少年と、黒髪の少年が工房に入ってきた。既に馴染みとなっているアーソルドと、彼の数少ない友人のアランは、当たり前のように空いていた椅子に座った。
涼しいと言いながら、二人はあまり汗もかいていない。アーソルドの精霊が風でも吹かせていたのだろう。彼はどんな精霊にも好かれる、万能魔道士だ。
そんな些細な様子から彼の魔道士としての実力を推し量る事が出来て、魔法を使う事の出来なかった以前のイゼアはいつも嫉妬していた。
そんな暗い感情も、以前に比べれば幾分かはましになっていた。エムラドを出て、手に職をつけるために修業する事によって、一人の人間として自立し、余裕が出来たのだ。それに今は魔法が使えないわけではない。使うと死ぬだけだ。正確に言えばラーハかターラ、どちらかの

印を受け入れて巫女になるのだが、ラーハの巫女になるのは嫌なので、ターラの巫女になるために死ぬ事になる。その覚悟をすれば、魔法は使えるはずだ。

だから以前よりは、自分達の関係も冷静になって見る事が出来た。

アーソルドは優秀な魔道士である事を求められ、それに応えている貴族で、イゼアは魔動機の修理屋見習い。二人の人生の岐路は完全に分かれたはずだ。

なのに、なぜかアーソルドは未だにイゼアを自分の所有物であるかのように振る舞い、自分から離れる事を良しとしていないので、自分の方からやって来るようになった。

その執着が、母親をおかしな行動に走らせた原因だというのに、まったく反省していない。

「だから、なんで来るんですか。友達はいなくても知り合いならいるでしょうに」

ラーハに生きたまま冥界に連れて行かれ、殺されかけたのはそれほど前の事ではないというのに、まったく懲りていない。

「友達ぐらいたくさんいる！」

「……えっと」

彼の断言にイゼアは戸惑いを覚えた。

彼はある意味、愛されてはいる。利用している人間や、取り巻きに、奇妙な愛され方はされているが、彼等にアーソルドは友人かと聞いたら、おそらく躊躇うだろう。

しかし彼の背後には、その数少ない例外がいた。

「僕はアーソルドの友達だぞ」
アランの有り難くない宣言を聞いて、アーソルドは肩を落とした。死霊達は友人だと胸を張って言う彼に、友達宣言されてもあまり嬉しくないのだ。
それでも実力が拮抗する数少ない同年代の魔道士で、アーソルドにとっては貴重な友人のはずだ。
「今日は、友達は関係ない！　し、仕事の依頼だ」
彼は焦りを隠しきれずに、ややどもりながら言った。
アランが何か壊したのだろうかと彼を見たが、首を横に振った。アランでないなら、アーソルドの依頼という事になる。
「イゼアは母さんに手紙を送ったそうだな」
「まあ」
自分は弟子入りして忙しいけどとても楽しいと、遠回しにアーソルドとはもう無関係だとほのめかしたお礼の手紙を送った。
「母さんが感動して、うちの壊れた魔動機を直しに来ないかと言っている」
さすがは息子のただの幼馴染みを、息子の愛人にしようとした人間の発想だ。けっして悪い人ではないが、その思考回路がどうなっているのか、解明出来る日は一生来ないだろう。
「嫌ですよ。素直に製造元に頼んでくださいよ」

それを聞いてアーソルドは鼻で笑った。

「製造元が現存する場合でも、時代遅れでパーツがないと言い訳したらしい。実際のところは古すぎて今の職人じゃ手を出せない独特の技術の物なんだろう。うちにあるのは、古い魔動機ばかりだからな」

昔の魔動機と聞いて、イゼアはアーソルドの屋敷を思い出す。歴史ある古い屋敷だ。置いてある家具も、代々普通に使っていただけなのに、アンティークと呼ばれるようになってしまった高級品ばかりの、とても物を大切に使っている一族である。

それでも壊れてしまうらしく、がらくた部屋があると聞いていた。

子供の頃はがらくただと思って玩具にしていた物も、思い返すと歴史的価値の高い、個人の魔工技師が最も優れていた年代の魔動機も多いはずだ。

「マナラなら古い物も直せるだろう。数百年前の有名な魔工技士が作った物も多いから、きっと面白いぞ」

マナラの手が止まった。マナラは魔動機が好きでこの仕事をしている。そんな彼女にとって、ルフィル家秘蔵の魔動機は少しだけ心動かされるようだった。

「どんな？」

「僕はあまり知らないが、初期のクロリスの作品はたくさんあるぞ」

「マジで？」

有名な魔動機のブランドを聞いて、マナラは腰を浮かせた。
「ああ。あの時代の物は価値の高い物が多いらしいな。だから捨てるに捨てられないらしい」
マナラは悩むように棚を見た。今はあまり魔動機が溜まっていない。暑いためか、物が集まらないのだ。だから今日はゆっくり寝て、いつもよりはクマも薄い。
「でも、イゼアがなぁ……」
マナラは彼女の正面に座るイゼアに視線を向けた。
「もちろん行きたくないです。親と顔合わせたくないですし」
イゼアが拒絶すると、アーソルドは眉根を寄せた。
「お前な、一度ぐらい親に報告して、文句も言っておけ。娘を売るような真似をするなって。あれは、さすがにないと思うぞ。うちの母さんの発案だとしても、冗談で流すべきだった」
確かに、平穏に暮らしていたイゼアが動かなければならなくなったのは、娘をアーソルドの愛人として売った母のせいだ。
イゼアはもう一人では生きていけないような子供ではない。今なら、独立してもなんとかやっていく自信が少しはある。それぐらいには成長していた。
文句ぐらいは言える立場になっているはずだ。
「でも……」
面と向かって文句は言いたいが、会いたくもないのだ。

その心境を知ってか知らずか、アーソルドはイゼアに指を突きつけた。
「でもじゃない！　お前が来ないと、アランと二人きりになるだろう！」
「本当に意味の分からない一族ですね」
あまりにも理不尽な理由に、イゼアは呆れ果てた。
「なんでアランが来るの？　実家に帰らないの？」
イゼアが問うと、アランはわずかに顔を強張らせ、視線を逸らした。
「こいつ、実家に帰りたくないらしい」
「どうして？　アーソルド様以上に実家が好きそうなのに」
アランのトール家は、有名な死霊術士を輩出している魔道貴族の分家だ。人気がない魔法の割に、使い勝手が良いため、需要の高い専門家達だ。
彼の実家になら、彼が苦手な人間よりも、死者の方が多いはずだ。それなのに人間ばかりがいるルフィル家に訪問してまで帰りたくないなど、今までの彼を見ていると信じられなかった。
彼はいつも人には見えない幽霊を目で追って、独特の世界を作り上げ、ヤバイ系魔道士とまで言われている。顔立ちは悪くないのに、彼の周りには幽霊がいそうだからと恐れられ、友人と言えるのもアーソルドぐらいだ。アーソルドとの友情も、死霊達との友情に比べれば、薄っぺらい物に違いないと思わせる生活態度である。
イゼアが凝視していると、彼は渋々口を開いた。

「本家に、挨拶に行きたくない」
「えっ!?」
イゼアは驚いて声を上げた。アーソルドの実家よりは、同じ死霊術士の本家の方がよほど居心地が良さそうなので、意外な発言であった。
「なんで帰りたくないの？　同類ばかりなのに」
「イゼアはルフィル家が安泰だから、魔道貴族の複雑さを実感した事がないんだ」
イゼアはルフィル家の分家ではないが、どちらにしても理解出来なかった。しかし彼の本家についてはほとんど知らないが、問題があるとは聞いた事もない。古い家であればあるほど、何か問題があると噂になって聞こえてくるものだ。
「例えば本家が経済的に傾いたら、分家の財産が全て本家の物になるという事もある」
血を守るために、そのような制度になっているのはイゼアも知っている。しかしそのような事は滅多にない。保護指定を受けるような一族は、能力があるのだ。能力があればいくらでも稼ぐ事が出来る。そして能力がなくなれば保護指定は解除される。そのため感情に流されて良くない結婚をしないように、跡継ぎになるのにも厳しい条件が課される。血筋を保てないなら家はお取り潰しだ。
ウィーゲム家は、かなり特殊な例なので、分家ではないルフィル家が保護してくれているのだが、アランの本家は分家のトール家がこれほど優秀なのだから、そのような事になるはずが

ないと思っていた。

しかし、これほど苦渋に満ちたアランは初めて見る。

「うちのような分家は、本家を維持するために存在する」

「うん」

「どうしてもついやってしまうが、自分達が世間とずれた感覚をしているのは、自覚がある」

「えっ!?」

イゼアは彼が行ってきた奇行の数々を思い出した。彼は常に人に見えないモノを目で追い、時には地面を掘り起こし、夜な夜な徘徊して、怖いと評判だ。当たり前のようにそのような事をしていたから、ずれている自覚があった事に衝撃を受けた。

「本家のアーラインは、分家のうちよりもずれているんだ」

アランよりもおかしな一家を想像して、ぞっとした。

帰りたくないというのは、理屈ではないのだ。

「だから尻ぬぐいをいつもさせられるのが分家だ。同じ術者でも、死霊術では本家には敵わない。見下されているわけではないが、自分と同じ存在だと見てもらえない。なのに世話をしなければならない。だから帰りたくない」

イゼアは自分の子供の頃を思い出した。

決して楽しい日々ではなかった。ささやかな幸せを願っては、いつもアーソルドに壊された。

同性の友人が出来ても、一緒に遊ぶ機会が少なかった。アーソルドが何か悪さをすると、何もしていないイゼアも一緒に叱られた。むしろ盾にされた。

「帰ってこいと言われていたが、ルフィル家の長男と友達になったから、遊びに行きたいと手紙に書いたら、そういう事なら帰らなくてもいいと返事が来た」

そう語るアランは、今まで見た事がないほど嬉しそうだった。

「どうして帰らなくていいなんて？」

生きている人間と友人になったら勘当されるという意味ではないだろう。友人を作ってはいけないのなら、最初から学校になど通わせないはずだ。

しかし生きた人間との交流を、本家への挨拶より優先する許可が出るなど意外だった。

「生きた友人はとても使えるそうだ。しかもルフィル家ならアーラインと同等の家柄だから、一族にとってはとても稀少な縁らしい。絶対に逃がすなと書いてあった」

「……」

アランの家族に使える道具扱いされたアーソルドは、呆れて顔を引きつらせた。それでも何も言わなかった。アランは家族の反応を素直にそのまま伝えてしまっただけで、彼自身はそのように思っていないからだ。むしろ友人だからこそ、包み隠さず語っていた。

「だから、イゼアも一緒に来て欲しい」

「その理屈でどうして私が巻き込まれるんですか？」

「イゼアが帰らないと、アーソルドも帰らないって」
イゼアは呆れてアーソルドを見た。
「アーソルド様、どうぞ私の事は気にせずに帰ってください」
「ば、馬鹿かっ！　お前を一人で置いていけるか！　みんなもお前の事を心配しているんだ。僕一人で帰ったら、どんな嫌味を言われるか。お前が帰らないと僕が帰れないから帰れっ！」
イゼアは目を伏せて考えた。
アリセレスがイゼアに小包まで送り付け、仕事の依頼までしたのは、『愛人扱いを嫌がって家出した』イゼアが帰りやすいようにという気遣いだったのだ。
愛人だからではなく、アーソルドが嫌いだという事に気付いていないから、彼女なりの優しさ、思い遣りなのだ。
「うう……」
アーソルドと違って、本当に悪意は何一つないのだ。本当に、娘のように可愛がってもらっていた。
アーソルドは視線を下ろして、イゼアの食べかけの桃を見つめた。
「食ってるな」
「くっ」
「もらう物だけもらって、挨拶もなしか。薄情な女め。強欲な女め」

「ぐぬぅ」
アーソルドがいなければいいのだ。アーソルドさえいなければ、帰りたくないなどとは思わなかった。
「……まあ、一度挨拶した方がいいとは思っていたんだ」
マナラがフォークで桃をつつきながら呟いた。
「普通は、弟子入り前にする事なんだが」
「普通は親の方が挨拶に来るんじゃないですか？」
「それは親に頼まれた場合だ。親が反対するような場合は、まあ普通は一度ぐらいは挨拶に行くな」
と言って、一口サイズにカットした桃を口にする。
「魔動機も見たいし。壊れた珍しい魔動機なら手に入るけど、壊れない頑丈な物は手に入らないんだよ」
昔の本当に良い魔動機は、無骨だがかなり丈夫な物が多い。マナラはそういった物も目にしたいのだろう。
イゼアが追い詰められたのを見て、アーソルドは腰に手を当てて、ニヤリと笑った。
「よし、決まりだな。用意しておけ。迎えに来てやる。逃げるなよ」
「……はいはい」

また毎日アーソルドと顔を合わせるのは嫌だったが、起きたらラーハが待っていたという頭の痛くなる朝に怯えずにすむというのも、たまには悪くないかもしれない。

せっかく来たのにいなかったと、後で叱られるかもしれないが、事前予告なしに早朝からやってくるという意味を、身を以て知ってもらうチャンスでもある。

物事は良い方向に考えないと、悪い方向に転がるものだ。だからなるべく悪く考えず、にこにこ笑っていようと、心に誓った。

◆◇◆◇◆

実家のあるここサマリドは、二本の川が流れる、それなりの規模の商業都市だ。

利便性の高い大きな街道があり、その規模に見合う広い橋の周りに栄えた都市だ。

元々は魔物や敵対勢力も多く、住みにくい土地だったらしい。川に挟まれた攻めにくい場所に都市を造り、二家の魔道貴族が治める事で外敵を阻み、自然災害を抑えて、治安を向上させていたら、気付けばかなりの規模の商業都市になっていたという。

最初は川の間にだけ人が住んでいたのだが、国が安寧し敵対勢力がいなくなり、気付けば川の外にも家が建ち、どんどん規模が広がっていって困ったという、先祖の嘆きが綴られた日記も残っている。ルフィル家が担当している川西は農地の方が多いのだが、ウィーゲム家が担当

していた川東は、呪われて影響力をなくしたのが原因で、現在川中よりも人が多く住むようになっていた。現在はルフィル家に任せているので、秩序は保たれているが、計画的に都市設計されたアンセムとは大違いの、無計画でごちゃごちゃした都市である。

石造りの建物が並ぶ川中の中心街は、イゼアの記憶とほとんど変わりない。歴史的だと言われる古い町並みを楽しむならこの川中、若者達が買い物を楽しむなら新しい店も多い川東と決まっている。

「お、イーリス坊ちゃん、今日も新しい彼女かい」

突然、声がかかってイゼアは足を止めた。イーリスはイゼアの兄の名だ。

「え、兄さん？」

兄がいるのかと周囲を見回したが、どこにもいない。

「ん、お前さんまさか、イゼアか!?」

「……」

声のした方に目を向けた。

昔からよく通っている八百屋（やおや）の店主だった。いつもは糸のように細い目を見開いて、イゼアを穴が開きそうなほど見つめた。

今日のイゼアはアーソルドのお古で、女の子らしい服でも、いつもの汚らしい作業着でもない。肩まで届く中途半端な長さの金髪で、こういう格好をしている若者はあまりいない。足が

長く見えていいからと、知り合いの女性に格安で譲ってもらったヒールのあるブーツを履いているので、ぱっと見、兄と間違えても仕方がないかもしれない。

「おまっ、髪どうした!?」

「……切ったの」

「なんでっ!? まさかアーソルド坊ちゃんが嫌で、とうとう女に目覚めたかっ!?」

「失礼な事言わないでよっ！ まとまったお金が欲しくて売ったのっ！」

同性に走るなど失礼にもほどがある。

しかしそう言われても仕方のない面もある。一緒に歩いている今日のマナラは、今まで見た中で一番着飾っているのだ。少し古いが、しっかりした仕立てのシルクのドレス。白い華やかなレース使いの日傘。いつも掛けている眼鏡を外し、長い髪も三つ編みをほどいて背中に流し、うっすらと化粧までしている。

どこからどう見ても、育ちのいいお嬢さんだ。アーソルドよりはよほど魅力的である。

「売ったって、一応底辺でもお前貴族だろ……」

そう言ってから、いかつい八百屋の店主は、少し遅れてやって来たアーソルドを見た。ふらふらするアランを引っ張って少し遅れていたのだ。

アーソルドは久しぶりに帰るためか、この暑いのにベストまできっちりと身に付けている。アランなどは端から見ているだけで暑苦しい、正装としても通じるような黒いローブを着ていた。

二人は大きな荷物を両手に持ち、いかにも旅行か里帰りといった様子であった。彼等の手にある荷物の大半は、マナラとイゼアの物なのだが。

「まあ、頼りにくい気持ちも分かるけど、頼ってやれよ」

「私、もうエムラドをやめたから、アーソルド様は無関係だよ。今回はお仕事で来ただけ。この人は私の師匠の魔工技士だよ」

「魔工技士？　ずいぶん若いねーちゃんが師匠になったな」

「若いけどすごいよ」

と、イゼアはそこで言葉を切って考えた。

「ところでおじさん。うちの兄って相変わらずなの？」

「相変わらずだな。相変わらず恐ろしいほど上手くやってるよ」

その言葉を聞いて、イゼアはため息をついた。

「そっか。ありがとう。あ、手土産に何か果物を買ってくよ。おば様は果物好きだからね」

アンセムにはあまり名物と呼べるような食べ物がなく、土産になるような魔具などは必要のない一族だから、手土産にはこれが一番だった。

◆◇◆◇◆

ルフィル家の屋敷に到着するとイゼア達は応接室に通された。
しばらくすると執事を伴い、顔の造作や雰囲気がアーソルドに似た女性がやって来た。ひらひらとした袖が可愛らしい、クリーム色の若々しいデザインのドレスを着た、銀髪と青い瞳のせいか涼しげに見える美女だ。アーソルドの母親であり、サマリドを守護する精霊使い、アリセレスだ。
彼女が当主で、夫は婿養子だ。現在は都勤めで、年の半分は領土にいない。ちなみにイゼアの父親は、その補佐をさせてもらっている。
アリセレスは国内でも五本の指に入る優れた魔道士だが、この街で生まれ育ち、身分を笠に着て威張り散らすような事もなく、民にはとても愛されている。
そんな彼女はイゼアを見つめて言った。
「あら、イーリス。今日はどうしたの？　ずいぶんと大人しい格好ねぇ」
「イゼアですけど」
名乗った瞬間、彼女の目が見開かれた。美女はどんな表情でも美女であると思いながら、彼女の次の反応を待った。
「か……髪は、髪はどうしたの!?」
「切りました」
もう慣れた反応だった。

イゼアは以前、髪を腰まで伸ばしていた。ちゃんと櫛でといて、アーソルドにもらった精油で手入れしていたので、綺麗なものだった。

しかし今は肩辺りまでになっている。これでもまだ伸びた方だった。

「き、切ったって、あの綺麗な金髪をっ……」

そこまで口にすると、アリセレスは額を押さえてふらりと倒れかけ、近くにいた執事とアーソルドが、慌てて彼女を支えた。しばらくするとアリセレスは自力で立って深呼吸し、イゼアに詰め寄った。

「ど、どうしてっ!?」

「いや、えっと、その、学用品が欲しくて」

隠しても仕方がないので、素直に事実を話した。

「アーソルドっ！　あなた、どうして事前に察してあげられなかったの!?　イゼアが奥ゆかしくて、自分から言い出せない子だって知っているでしょう！」

「僕が知ってる範囲内だったら察したよ。でも、違う科目を取ってたから仕方がないだろ。僕だって、イゼアがイーリスみたいになったのはショックなんだ」

アーソルドは不本意そうに、そう反論した。

イーリスを知らないマナラとアランが顔を見合わせている。

「と、とにかく、今はまた伸ばしてるところなんだ。落ち着いて座ろう」

アーソルドに言われて、アリセレスは腰掛けた。そして使用人が用意したハーブティを飲み、一息つく。視線を上げると、彼女はマナラへと笑みを向けた。

「お客様の前でお騒がせしてごめんなさい。アリセレス＝ルフィルよ」

「初めまして、マナラ＝エルーシアです。お招きいただき有り難うございます」

マナラはにっこりと笑みを返し、愛想よく自己紹介した。声はいつもよりも若干高めで、クマも化粧で隠して猫を被り、工房ではだらしのない格好で修理しているマナラと同一人物には見えなかった。こんなに笑顔の彼女は初めて見た。

「息子から聞いていた印象とずいぶん違いますわ。素敵なお嬢さんね。とても具神様が足繁く通う技士には見えませんわ。いえ、悪い意味ではなくて、ねぇ。エルーシアのお嬢さんが、魔工技師になったのも意外でしたもの」

アリセレスは楚々とした雰囲気のマナラを見て、嬉しそうに話しかけた。マナラが生まれたエルーシア家は、ルフィル家やウィーゲム家ほどではないが、歴史のある魔道貴族だ。その長女が魔工技師になるなど、前代未聞のはずだ。もう少し北にある魔石の産出国なら優れた魔道士が技師になる事も珍しくないが、南にあるこの周辺国では珍しい。

しかもマナラの元には、本当に優れた技師の元にしかやってこない、具神ゼイレムが頻繁にやってくる。ゼイレムは道具の神で、それに認められるという事は、最高の技師の一人である証だ。

「普段は汚れてもいい格好をしていますから。アーソルドが遊びに来るのはいつも工房で仕事をしている時なので、その服装の印象が強いのだと思います」

マナラは仕事以外では外に出ないから、それ以外の印象を持ちようがない。弟子のイゼアですら、初めて本気のよそ行きの格好を見たのだ。

「それに、イゼアの呪いも解いていただいたとか」

マナラは笑顔のままアーソルドに視線を向けた。彼が母親にどう話しているのか、イゼア達はまったく聞いていなかった。

アーソルドはその視線に気付くと、慌ててアリセレスに釘を刺した。

「マナラが解いたんじゃないし、完全に解けたわけじゃない。魔法は使えるけど、絶対に使わないように言われているから」

アーソルドもさすがに全てを母親に知らせていないようだ。彼の言い方だと、ゼイレムが解いてくれたような印象を受けてしまう。

「もちろん分かっているわ。ええ」

分かっていないはずだが、勝手に理解したつもりになってくれるのは有り難かった。

イゼアはため息をついて、猫を被っているマナラを横目で見た。

何も言わなくても、この親子が勝手に話を進めてくれるから、内心は呆れているか驚いているだろう。

「それにアーソルドが、学校のお友達を連れて帰るなんて」

今まで置物のように静かにしていたアランは、突然話題に上ってびくりと震えた。彼は初対面の生きたよくしゃべる人間相手には人見知りする。

アリセレスはアーソルドに友達が出来ないと思っているのではない。この地元でなら、普通の友人ぐらいアーソルドにだっている。魔道士として同格の友人という意味だ。だから教師達は浮いてしまいがちなアランの面倒を、アーソルドに押し付けたのだ。格下だとアランは御せないし、下手をすれば主従関係のようになってしまう。

「こいつはアラン＝トールだ」

「聞いた事がないわ。一般家庭の方？」

「アーラインの分家だ」

その言葉を聞いて、全身真っ黒の彼を、頭のてっぺんから机で隠れる胸まで、何度も視線を往復させる。

彼はいつもと同じ黒いローブに身を包み、端からはそれがとても暑苦しく見えた。中ではどうせ魔法で冷やしているのだろう。

「アーラインの子とよく会話が成立するわね」

アリセレスですら会話が成立しない一族と聞き、イゼアはアランがなぜ帰りたがらないのか、本当の意味で理解出来た気がした。

「分家だ。本家の尻ぬぐいをしたくなくて、うちに遊びに来たんだ」
「あの人達の尻ぬぐい……」
アリセレスは少し考え込んで、首を横に振った。
「まだ若いのに、大変なのね。アラン君だったかしら。自分の家のようにくつろいでいいのよ。ただし死霊術は使わないでね」
アランは静かに頷いた。
彼もむやみやたらと死霊術は使わない。そんな物を使わなくても、彼は死霊を目で追うため、視線が泳ぐだけで皆の恐怖をかき立てるのだ。
「アランは僕ほどではないけど、けっこう万能型の魔道士なんだ」
万能型とはどんな魔法でも幅広く使える魔道士だ。魔道士の半分以上は得意な魔法以外は使えないという。エムラドの生徒ともなれば、初歩なら色々使える場合が多いのだが、アーソルド達のように何でも人並み以上に出来る魔道士というのはかなり特殊だ。
「この前、召喚術を教えてもらって、契約するため、一緒に天馬と竜を捕まえてきたんだ」
「天馬、素敵じゃない！」
「今度母さんも乗せてあげるよ」
アーソルドは普段、アランと友人である事を否定している。しかしこの様子を見る限り、アランとはまるで親友のように見えた。

微笑ましく見えるこの報告こそ、全ての勘違いのもとである。

この報告のせいで、イゼアとアーソルドは仲が良いと勘違いされてきたのだ。

「ところで、魔動機の方を拝見したいのですが……」

延々と続きそうな親子の会話に耐えきれなくなったのか、マナラは控え目に申し出た。

「あら、ごめんなさい。お客様を放って息子と話し込むなんて、お恥ずかしいわ」

アリセレスは恥じらいながら、立ち上がった。

「久々の再会をお邪魔して申し訳ありません。魔動機には目がなくて」

「でしたら、当家の魔動機はきっと気に入っていただけますわ」

「ええ、期待に胸が膨らみっぱなしです」

作業着の時は分かりにくいが、マナラの胸は痩せている割には、人並みにしっかりと存在感を主張している。イゼアは自分の男の子と間違えられる体型と比べて、ため息をつきそうになった。

「先に壊れた魔動機をお見せいたします。動く物は屋敷内に散らばっていますので」

アリセレスが先頭に立ち、屋敷を案内しがてら目的の部屋に向かった。

「ああそうだわ。壊れているわけではないのだけど、用途が分からない物もあるんです」

歩きながら、アリセレスは頬に手を当てて言った。

「古い物だとそういうのは仕方がないんですよ。私の工房にも何に使うか分からない魔動機が

たくさんあります」
「専門家が見ても分からない物が、そんなにもあるの？」
驚くアリセレスを見て、マナラは苦笑しながら頷いた。
「古い魔動機の一割はそんなものですよ。長生きをされている方に見てもらうと、その半分は分かるのですが、やはり分からない物が出てきます。とはいっても、そういった訳の分からない物は、価値がない物が多いんですが」
「あら、そういう特殊な物は価値が高いと思っていたわ」
アリセレスの驚いた顔を見て、マナラは苦笑した。
「価値が高い道具というのは、歴史的、美術的な価値を除く場合は、特別効果が高いという事です。何に使うかさっぱり分からないような物は、つまり効果がはっきり出ない物ですから、価値がある物は滅多にないんですよ。普通の魔動機は効果があるからこそ価値がありますから」
「あら、言われてみればそれもそうねぇ」
「歴史のある貴族が持っている物なら、滅多にない魔動機として以外の価値がある物も交じっているでしょうが」
「それは楽しみねぇ」
アリセレスが足を止めると、執事が胸ポケットから鍵を取り出しドアを開け、明かりをつける。
後から増築されたらしい日の当たらない北の部屋は、他の部屋よりもひんやりしていた。

「こちらは使われていない魔具や魔動機置き場ですの」
建物の中からこちらの方に来た事がなく、初めて見る部屋だった。鍵が掛けてあるので悪戯で入る事も出来ないから、アーソルドがイゼアを引っ張ってこなかったのだろう。
「これはなかなか……」
マナラは呟いて、魔動機を手に取った。
「素晴らしい。宝の山ですね」
「へぇ、がらくたじゃないのか」
目を輝かせているマナラを見て、将来これを受け継ぐ予定のアーソルドが呟いた。そんな彼を見て、マナラは指を突きつけた。
「言っておくけど、邪魔だからって捨てるんじゃないよ。部品だけでもけっこう高値が付くからね。部品取り用のジャンク品でも、物によっては高いよ」
「そうなのか？　奥が深いな……」
アーソルドは、魔動機に触れるマナラを眺めながら頷いた。
薄暗い部屋には、棚に並べられていたり、床に置かれている、大小様々な魔動機がある。イゼアにも見れば分かる物、見ただけでは何が何だか分からない物など、様々だ。
「母さん、これ全部壊れてるのか？」
「さっきも言った訳の分からない魔動機もあるわ。何が何だかもう分からなくなっているの。

ついでに分類と整理もしたいのだけど、お願い出来ないかしら？」
マナラは部屋の中を見回した。数は百に近い。
「確か多少の分類はされているのよね？」
「はい、お嬢様」
そう言って、執事は前に出た。長年仕えているせいか、古い使用人達はアリセレスを未だにお嬢様と呼ぶ。それが似合っているので、アーソルドに家督を譲るまでは皆そう呼び続けるだろう。
「こちらが故障している棚、こちらが壊れているのか使い方が悪いからなのか分からない棚、こちらが用途不明の棚です。私も素人なので、ひょっとしたら交じっている可能性もあります」
解説を受けて、マナラは用途不明の棚を見た。
一番手前には、樽のような形の魔動機がある。イゼアも知っている魔動機だ。
「またその調理器ですか。ざっと見た感じだと半分ぐらいなら分かりそうですね」
「そうだね」
マナラは頷いた。
「これで調理って、どうするのかしら」
アリセレスが調理器の表面を撫でながら言った。
「昔の魔動機は斬新で面白いけど、説明書がないと、意図が分かりにくいのが欠点ですね」

何であるかが分かるのと、使い方が分かるのはまた別だ。

「ある意味、歴史的な価値はあるけど、売った場合はそんなに高くなりません。眠らせておくなら、博物館にでも飾っておいた方がいいかもって感じの物です。昔はこういう訳の分からない物が作られて、今につながってますから」

マナラはだんだんと猫を被るのが面倒になってきたのか、高かった声が少しずつ低くなっていた。

「分かる物については、名前を貼り付けて、リストを作りましょうか」

「ええ、お願い出来るかしら」

話はトントン拍子に進んでいった。

マナラはさらに魔動機を眺めてから、振り返る。

「作業はどちらで行いましょう。ここでは少し狭いので」

「部屋を用意しておりますわ」

アリセレスは部屋を出て廊下をさらに進むと、イゼアも見た事のある場所に出た。

パーティーの時に使っている大広間と、客室のある場所だ。いつもは別の入り口から入るので、こちら側から入るのは初めてだった。

「ここで修理するんですか？」

「だってここが一番近くて、広くて、汚れにくい部屋なんですもの。狭い部屋だと、うっかり

壁が汚れてしまうけど、ここまで広ければ汚れないわ」

「なるほど……」

イゼアは素直に納得した。

「こちらのドアが客室です。奥がマナラ様、手前がイゼアお嬢様のお部屋です。アラン様は男性ですので、別の場所に部屋をご用意しております」

イゼアは執事に教えてもらった客室のドアを開けた。広いベッドは綺麗にベッドメイキングされ、窓辺には花まで飾られた居心地の良さそうな部屋だった。持ってきた荷物はベッド脇に置いてある。

小さな頃からこの屋敷を知っているが、全てを知っているわけではない。なによりも歩いて帰れる場所に自分の家があるため、こんな部屋には用がなかった。

マナラも自分の部屋を確認し、顔だけ外に出して言う。

「じゃあ、広間に魔動機を運んでもらえますか。私はその間に荷物の整理をしますから」

そう言って、マナラは部屋に入った。イゼアも自分の荷をほどくために、ドアを閉めて、部屋を見回した。ベッドと引き出し付きの机とクローゼットがある。

荷物の中から作業着と道具と素材を取り出した。修理を始めるなら着替えなければならないが、まずは搬入と仕分けが先なので、エプロンだけ身に付ける。工具などを確認したら、エプロンに括り付けていたターラの鈴が目に入り、イゼアはどうするか悩んだ。

これは死神ターラを呼び出すための鈴だ。ラーハに魔法を使うと取り返しのつかない体質にされてしまったので、身の危険がある時はこれを鳴らせばすぐに駆けつけると、イゼアとマナラが一つずつもらったものだ。魔道都と呼ばれるアンセムなら多少珍しい魔具を持っていても、怪しむ者はいない。しかしイゼアがこのような珍しい魔具を身に付けていたら、アリセレスに指摘を受ける可能性がある。イゼアは悩んだ末に、鈴を机の引き出しに隠した。

廊下に出ると、アーソルドとアランが魔動機を抱えて廊下に出てきたところだった。アーソルドはお坊ちゃまだが、力仕事を全て使用人に押し付けるような事はしない。イゼアに対してよりも、使用人に対しての方がずっと親切なのだ。

イゼアはアーソルド達が広間に入るのを待ってから、彼の後に続いて中に入った。中には作業用の机と椅子があるだけで、まるで知らない場所のようだった。

イゼアはパーティーの時にしかここに入った事がなかったので、料理の載ったテーブルも、着飾った人々もいないと、これほどまで雰囲気が違うのだと、感心しながら見回した。

いつもの華やかな会場は、使用人達が作り出していたのを実感した。

アーソルドはテーブルに魔動機を載せると、振り返ってイゼアを手招きした。

「見ろ！」

イゼアはアーソルドが持ってきたそれを覗き込んだ。

綺麗な箱だった。

「宝石箱？」

魔動機のようには見えない、場違いな宝石箱だった。とても綺麗な宝石箱で、魔石がふんだんに使われているため、強い魔力を感じる。この宝石箱そのものの見栄えがいいため、これだけで素晴らしいインテリアになりそうだった。

「下手すると宝石よりも高く付くんじゃないですか、この宝石箱」

「ああ、それ。昔はウィーゲム家の物だったらしいわ。ちゃんと魔動機よ」

イゼアの様子に気付いたアリセレスが、宝石箱を覗き込みながら言う。彼女は魔動機の搬入を指揮しているらしいが、だいたい置き場所を決めてしまえばする事もなく、手持ち無沙汰だったようだ。

「壊れているというか、鍵を回しても開かなくて困っているの。鍵がかかったり開いたりする感触とかはあるのに、蓋が開かないのよ。正当な方法で開けないと痺れるらしいから、無茶な事も出来ないし。中にはとても貴重な物が入っているらしいから、開けられるのなら有り難いのだけど……」

イゼアは触っただけで痺れる魔動機でひどい目にあったのを思い出した。それも確か宝石箱だった。

アーソルドは宝石箱を持ち上げ、括り付けてあった鍵を、鍵穴に挿して回す。しかし力任せに蓋を開けようとしても、びくともしなかった。次に耳元で上下に振ったが、何かが入ってい

るような音はしなかった。

「貸してください」

あれだけ無理やり開こうとしても平気なら、イゼアが多少触っても平気なはずだ。

イゼアはアーソルドから宝石箱を受け取った。外観は軽そうに見えた宝石箱が、手にした時予想よりも重くて少し驚いた。魔動機だから中に金属が使われているのだろう。

試しにイゼアも振ってみようとしたその瞬間、突然箱の上に小さな人が現れた。

本当に小さな人だった。

片手で持てる宝石箱の蓋に座れる、妖精のような男の子だ。それがイゼアを見上げている。

イゼアは驚きのあまり、あやうく宝石箱を取り落としてしまうところだった。

「……だれ？」

妖精のような何かが、イゼアに問うた。

はっきりとした声だった。見間違いとか、幽霊とか、そういう類の物ではないらしい。

「おば様、なんですか、これ」

「知らないわ。ひょっとして、ウィーゲムの血筋でないと開かないように設定されているのかしら？」

アリセレスですら驚いているから、このようなモノが現れたのは初めてなのだろう。イゼアはそれと見つめ合った。



ジャケットとひらひらしたシャツとリボンタイ。膝小僧の出る長さのズボン。それはまるで貴族の子供のような姿だった。年の頃は人間で言えば七、八歳だろう、銀髪と宝石のように美しいアイスグレーの瞳の、とても可愛らしい顔立ちの男の子だ。

銀髪だが、アーソルドよりも癖のない、さらさらしていそうな髪質で、思わず触りたくなった。

「ああ、珍しい。物の精霊だね」

部屋に響いたマナラの声を聞き、イゼアははっと顔を上げた。

マナラはドレスのまま、荷物とエプロンを抱えて広間にやって来た。

「これが精霊だって？」

アーソルドは宝石箱を指さして言った。

「ああ、それは間違いなく精霊だよ。しかもこの細部まで凝った服。かなり力のある精霊だね」

精霊使いのアーソルドが、目を丸くした。

精霊とは人に近い姿であればあるほど、つまり細部まで凝った外見であればあるほど、力があると言われている。この精霊は大きさこそ小さいが、力はかなりものだと予想出来た。

「こんな精霊見た事がないぞ。だいたい、どうして誰もこんな力のある精霊に気付かなかったんだ？」

「精霊使いが使役するような精霊じゃないから、知らなくても仕方がないけど。相性が合わないと出てきてすらくれないし。魔石がついているから、精霊の魔力が目立たなかったんだろうよ」

マナラは工具をテーブルに置き、イゼアの手から宝石箱を取り上げて、精霊を観察する。まだアリセレスの目があるためか、なんとかお上品にしている。いつもなら、だらしなく椅子に座って足を組むような場面だった。

「精霊っていうのは、最初はただの意志すらない魔力の塊なの。それが集まって、少しずつ成長し、意志のある存在になる。そしていつか性質を帯びるの。火山で生まれれば火の性質が強くなって火の精霊になるし、水辺だったら水の精霊。そんな感じに精霊が育つのは基本だから知っているわね」

アーソルドは小さく頷いた。

イゼアでも知っている、精霊の育ち方の基本だ。

「珍しいところで、闇の精霊、光の精霊っていうのがあるけど、それよりも珍しいのがこれよ。物の精霊」

マナラに見つめられ、精霊は可愛らしく微笑んだ。

「この場合はこの宝石箱の精霊。これが出来るには、かなり厳しい条件があるの」

「条件？」

「道具そのものの質が良い事。そして大切に使われて、魔力が集まる場所に長期置かれる事。判明しているのはその程度で、実際にはもっと複雑な条件が必要みたいよ。そういった偶然が重なって、偶発的に生まれた精霊なの。特殊だから、精霊使いでも学者になるような人じゃな

いと習わないみたい」

マナラは迷わず宝石箱をひっくり返した。逆さになっても精霊は落ちる事なく、重力など関係ないように、先ほどと変わらない体勢で、宝石箱に座っている。

「やっぱりね」

「何がやっぱりなんだ？」

「この宝石箱、リゼット＝クロリスの作品だよ。彼女はクロリスを有名にした芸術系の魔工技士だけど、同時に優れた精霊使いで、初めて養殖型の人工精霊を作った天才なの。魔動機メーカーとしてのクロリスブランドを確立した、精霊学の権威だから知ってるでしょ」

アーソルドは小さく頷いた。クロリスは最高級の魔動機と磁器のメーカーだ。

「その天才が作った物を、イゼアの先祖が精霊の多いこの土地で大切に使っていたなら、精霊が宿ってもおかしくないでしょ。物の精霊は、普通の精霊よりも人工精霊に近い存在だから、クロリスの魔動機とも相性がいいだろうし」

マナラは精霊の座っている方、つまり蓋のある方を上に向ける。

「お前がこの箱を開けられないようにしているの？」

「開けちゃダメなのっ」

箱を開けると口にしたとたん、精霊が小さな身体で吠えた。威嚇するように髪を逆立てている。

今まで借りてきた猫のように大人しくしていたアランが、興味深そうに精霊に手を伸ばし、

膝小僧をつついた。相手が人間ではないため、遠慮がない。
宝石箱の精霊は、威嚇していた事も忘れたかのように、自分をつついたアランをきょとんと見上げた。アランは視線を避けるように、手を引っ込めてアーソルドの背に隠れる。
「可愛いですねぇ」
思わずイゼアは精霊を覗き込む。すると精霊はイゼアの顔を見て首を傾げ、へらりと笑った。その様子を見て、マナラが宝石箱をイゼアに返した。
「イゼアの方がまともに話し合えそうね。少しずつ手懐けてみたら、ひょっとしたら開けてくれるかもしれないよ」
マナラよりは、イゼアに懐いているようだ。ルフィル家の誰にも姿を見せた事がなかったのなら、ウィーゲムだからこそ姿を見せたのかもしれない。
「でも私、精霊の扱い方なんて知りませんよ」
「大丈夫。精霊使いに扱えるなら、とっくに開いてたよ。精霊なら私の専門じゃないから開けられない。でも精霊使いにも開けられない。だったら開けられなくても文句は誰も言わないでしょ。だから試しにちょっと構ってやりなって事。可愛いし苦にならないだろ？」
マナラの言葉に、イゼアは納得した。
「そうですね。中身気になりますし」
「リゼットの宝石箱は有名だよ。絶対に盗ませないんだ。中身がどうなってるのか、是非とも

見てみたいねぇ」

マナラがにやにやと笑いながら、宝石箱の背を撫でた。宝石箱の精霊は、撫でられているのに気付くと、不思議そうにマナラを見上げた。イゼアは師匠が幼い少年にセクハラをしているようで複雑な気持ちになった。

「だめで元々って事ですね」

「そそ」

この宝石箱の精霊は、とても可愛らしいので、作業の合間に構って癒されたりと、楽しめばいいのだ。

「おば様、それでいいですか？」

開かなくとも高価な物には違いないので、イゼアは持ち主に確認した。

「もちろん良いわよ。今まで開かなかった物だから、開いても開かなくても大丈夫だけど、開いてくれたら嬉しいもの」

アリセレスは可愛らしい精霊を見て楽しげに答えた。

マナラは唇の端を持ち上げ、次々と運ばれてくる魔動機を見て、腰に手を当てた。

イゼアも宝石箱をテーブルに置くと、運び込まれた魔動機を見回す。運び込まれたのはまだ三割ほどだ。

「さて、とりあえず人がたくさんいる今のうちに、今運び込んだ分を簡単に仕分けして、今後

の方針を決めようか」
「はい」
思っていたよりは、楽しい仕事になりそうだ。

◆◇◆◇◆

ざっと魔動機を起動させ、いくつかの山に分けた。
簡単に直りそうな物、起動だけはするけど調子が悪い物、まったく無反応な物、直すのが難しそうな物。この四つの山だ。
ドレス姿のマナラは指示をしただけで、動かしたのは使用人達だった。もちろんイゼアもぼーっと立っているわけではなく、マナラとは別の所で指示を出していた。
この魔動機達は定期的に埃を落とされていたらしく、それを抱える使用人達の服も、ほとんど汚れる事はなかった。大切にされていたから、壊れていてもゼイレムがやって来る事はなかっただろう。彼はなくなって気付くような、それなりの扱いをしている道具の元にはやって来ない。誰からも忘れられ、道具として使ってもらう事も、最期を迎える事もないような、そんな道具達の叫びに反応しているらしい。
その魔動機の中のいくつかを、アランが楽しげに眺めている。どうやら実家にも似たような

物があるらしい。魔道士が購入する魔動機は、汎用的に使える物が多いから、死霊術士の屋敷にあってもおかしな事ではない。

「イゼアもすっかり職人さんっぽくなったわねぇ」

そう言ったのは、物珍しげに魔動機に触れていたアリセレスだった。彼女も先祖代々受け継いできた、壊れた魔動機の事はよく知らなかったらしく、この仕事を楽しげに見学していた。

「母さん……まさかずっと見学しているつもりか？」

出ていく様子のないアリセレスに、アーソルドが問うた。

「だって楽しそうじゃない」

「気が散るだろ」

「ずっといるわけじゃないわ。ちょっとだけよ。こんなにあるんだもの。どう直すか、ちょっと見るぐらい、別にいいじゃない。ねぇ、イゼア」

話を振られ、イゼアは戸惑った。本音を言えば、気が散って仕方がない。しかし「ちょっとだけ」と言っている人に、面と向かって気が散るとは言えない。

「す、少しなら」

イゼアがそう言うと、そうでしょうとアリセレスが満足げに頷いた。

「まあいいけど」

マナラはそう言って、すぐに直せる山の中にある魔動機の蓋を開けた。それを選んだのは、

一番簡単に開けられるからだ。

「なんだそれ」

アーソルドの問いに、マナラは膝ほどの高さの魔動機を叩いた。

「古い製水機だよ。浄水器としても使えるけど、何もないところでも水を発生させられる魔動機だよ。普通、そういうのは質より量を求められるけど、これは美味しい水を作る事を目的としてるんだ。何度か直した事があるけど、直せば今でもちゃんと使える。ただメンテナンスが必要だから、説明書がないと維持は難しかったのかも」

今の魔動機が優れているのは、量産出来て、簡単に扱えるという点だ。そういった物は高品質とはいかないが、メンテナンスが簡単だ。

「そういえば、昔はもっと美味しい水を作る道具があったって、精霊が言っていたわ。これかしら」

興味を持ったらしく、アリセレスも魔動機の中を覗き込んだ。中には埃が溜まっていて、とても水をどうにかする道具には思えなかった。

「おそらくはそうでしょう。でも部品が悪くなってますね。どうしよう、ワイヤーで何とかなると思うけど、防水ワイヤーが足りるかな。古い物に合う部品を優先して持ってきたんだよね」

壊れかけているパーツを、ワイヤーで補強するつもりのようだ。イゼアは頭の中でその手順

を想像する。

イゼアの家に帰れば、そのための素材と工具がある。しかし、ここまで来ても家に帰る踏ん切りがつかなかった。

「イゼア、お前の家にそういうのたくさんあるんじゃないか？　お前の家は何でも自力で直して使ってるからな」

アーソルドはイゼアの反応を見て、そう指摘した。家に帰りたくないと思い、提案するのを躊躇した事を、見透かされていたのだ。

彼は気づいて欲しいところは気付いてくれないのに、気付かなくていいようなところは気付く。

「確かに、うちにありますよ。あると便利なんで」

もちろん普通のワイヤーではない。魔動機用の特殊な加工がしてあるワイヤーだ。ウィーゲム家では当たり前のように常備してある。イゼアの父も、専門と言うほどではないが魔動機を多少なら直す事が出来る。

「じゃあ、挨拶がてら取りに行こうか」

マナラは蓋を閉めてから、そう言った。やはりそうなるかと、イゼアは肩を落とした。覚悟は出来ていないが、覚悟など何年経っても出来はしないだろう。

強引に背を押してくれる人がいなければ、とても前には進めそうにもない。

「そうだな。僕もついていこうか」

「いいです。アーソルド様はアランと遊んでいてください」
アーソルドがついてくると言った瞬間、イゼアは気付けば断っていた。彼が来たら来たで、とてつもなく面倒臭い事になる。
アーソルドではなく、母が面倒臭くなるのだ。やれ茶がない、茶菓子がない、なぜ事前に言わないなど、とても厄介だ。
あんな思いをするなら、一人で行った方がいい。それに今日はマナラもついてきてくれるから、煩い事は言わないはずだ。
「あら、帰るのなら何か持っていって。イゼアがいないと、あまり手の込んだ物が出ないから、イーリスが可哀相だわ。リリアはあまりお料理が得意ではないから」
ふと、イゼアはこの屋敷の料理人に仕込まれてから、いつも自分が料理をしていたのを思い出した。母親の味など、ほとんど覚えていない。だから当然、イゼアがいない時の食事内容も知らなかった。
「あいつなら、どうせ女に食わせてもらってるだろ」
アーソルドが腰に手を当て、心配しすぎるアリセレスに向かって言う。
「なぁ、イーリスっていう男は、イゼアの兄の事じゃなかったのか？」
魔動機に触れるために、物陰に蹲っていたアランは、突然立ち上がってアーソルドに尋ねた。彼はそんな当たり前の質問に戸惑いながら頷いた。

「そうだが」
「本当にイゼアの兄なのか？」
「そうだって」
「イゼアの兄が、女に食わせてもらうのか？」
「だからそうだって」
アランはちらりとイゼアを見た。その顔は、珍しく苦悩に満ちていた。
「今の言い方は、特定の相手ではないように聞こえたんだが」
「そうだ。毎回違う女を連れてるからな」
アランは再度イゼアを穴が開きそうなほど見つめた。
「……やはり顔か」
アランの呟きを聞いて、今度はイゼアとアーソルドが顔を見合わせた。
生きた人間の容姿など——生きた女などに興味がなさそうな彼が、このような事を言うのに驚いた。
「あ、アラン、お前、も、もてたいのかっ？」
そう尋ねたアーソルドは、すっかり動揺しているようだった。
そんな動揺するアーソルドの問いに、アランは沈痛な面持ちで頷いた。
「うちみたいな特殊な一族は、顔が良くないと、結婚するのに困る。金で買うにしても、顔ま

で悪いと、下手をしたら売られた人が首を括る事もあるらしい」

それは切実な問題だった。魔道貴族だから、彼等は力を維持しなければならない。だから伴侶は厳選しなければならないのだ。

もしもイゼアが、アランよりももっととんでもない変人の、見た目も化け物じみた男に売られたら、間違いなく家出をする。

家出すら出来ない板挟みになった人が、思い詰めて首を括ったとしても不思議ではない。

「特にそれが本家の跡取りだと、その被害を受けるのは分家だ。年の近い異性がいると、分家の皆は戦々恐々として暮らすんだ」

「お前は本家の婿になるのが嫌なのか……」

今の言い方は、アランにもその危害が及ぶ可能性があるという事だ。

「当たり前だ。それに、あまり血が近いのはよくないから最終手段なんだ。だからみんなは本家に不細工が生まれませんようにって、美に関する神々に祈るんだ」

イゼアには、死霊術師が美しくなるように祈る姿が想像出来なかった。想像しようと思っても、もっと別の怪しい儀式にすり替えられてしまう。

しかしその熱心な願いが届いているのか、アランの顔は悪くない。普通にしていれば、普通にもてていただろう。

しかし顔や才能に騙される女の子が一人もいないから、もっと変人だという本家の結婚は、

本当に大変そうだった。

◆◇◆◇◆

街中を歩いて家の前までやって来たイゼアは、今日で何度目になるかも分からないため息をついた。

「イーリス坊ちゃん、実家に彼女を連れてきたのかい！　とうとう身を固める覚悟が出来たんだね、おめでとう！　あたしらも、あんたの親父さんの時みたいに、泥沼になったらどうしようかとひやひやしてたんだよぉ」

イゼアの家の前でニコニコと笑って祝福してくれる酒屋の女将の姿を見て、イゼアは首を横に振る。

「私、イゼアです」

「……え……えええっ!?　……あぁ、あらやだよ。どうしたのその格好！」

言えば皆気付いてくれる。しかし、言わないと気付いてもらえない。今日何度間違えられたか、もう覚えていなかった。

「でもまあ、さすがに似合うねぇ。お兄ちゃんの真似かい。それとも、アンセムではそういうのが流行ってるのかい？」

「髪を切ったら……スカートはくと兄さんが女装してるみたいで……」
イゼアが髪を切ったのではなく、イーリスが女装していると思われるのは、自分が兄に似ていると言われるよりも、もっと嫌だった。
「……お嬢、どうして髪を切っちゃったのさ。あんなに綺麗に伸ばしてたのに」
「ほっといてください」
「まさか、とうとうアーソルド坊ちゃんがなにか……」
「アーソルド様とは一切関係ありません」
「ならいいんだけどね」
酒屋の女将は胸を撫で下ろした。
しかしこれで、アーソルドが住民達にどんな目で見られているのか、とてもよく分かった。
髪を切ったのはアーソルドが原因だと思われるほど、彼は苛めっ子に見えていたのだ。
「まあ、何にしても、元気をお出し。お友達も……ああ、そのお友達は、絶対にイーリス坊ちゃんに見せちゃいけないよ。あんたんところの男共は、代々魔性の男だからねぇ。厄介極まりなくて困るんだ」
マナラの頬が引きつった。イゼアの兄が『魔性の男』である事が意外なようだ。
「分かってますよ。今なら兄さんは仕事でしょうから」
「ああ、じゃあ早く挨拶してきなさいな」

「はぁい」

酒屋の女将は小さな荷車を押して去って行き、イゼアは自分のボロ屋敷を見上げた。そろそろちゃんとしたプロに修繕してもらうべきなのだが、その余裕がない。

「なぁイゼア。向こうに、塔みたいなのが見えるんだが、何あれ。あっちの方にもあるけど」

二本の川の脇に背の高い石造りの建造物があり、マナラはそれを指さしていた。

「ああ、川が氾濫しそうな時に、精霊使いがあそこで儀式を行うんですよ。こっちの近い方は元々はうちで受け持っていたんですけど、術者がいないと意味がないので、ルフィル家の分家にお願いしています」

イゼアは塔から目を逸らした。

「あれの維持費がなかなか馬鹿にならなくて困るんですよね」

イゼアがぼやくと、マナラが驚いたような顔をした。

「全部アーソルドんとこに任せてるんじゃないの？」

「塔の管理、維持が今の地位を維持する最低条件らしいんです。魔力さえ戻れば、元に戻れるようにって、当時のルフィル家の口添えで」

アーソルドの先祖らしい、無謀な親切さだ。

「でもうちの収入、ほとんどあれに取られてちっとも生活が楽にならないんですよ。歴史的建造物だから、ツアーに組み込んだりして見物料を取ったりしてるんですけど」

それも塔の維持費で綺麗さっぱりなくなってしまう。しかしなんとかやっていけているので、ルフィル家から支援してもらう必要もない。そんなぎりぎりの生活が続いている。

先祖の努力と覚悟を想像すると、イゼアは涙が出そうになった。

「呪いが解けるのが五代先だっけ？　大変だな」

「まあでも、五代先ぐらいって分かっただけ、先が見えなかった今までよりはずっとマシですよ」

怖いのは先がまったく見えない事だ。そして先祖の教えに従い、ウィーゲム家の世話を続けるルフィル家の親切も怖い。

「でも、ルフィル家にお前んちを疎ましく思う奴はいなかったのかね。まさかみんなあんな奴等ばっかりだったわけじゃないでしょ」

「それを心配して、アーソルド様のご先祖が色々と条件をつけてるみたいです。ウィーゲムが呪われる前は、両家は婚姻関係を結んだり、血も近かったみたいですし。そんなの関係なく、かまい倒してくる人の多い一族みたいですけど」

迷惑な話だと、イゼアはため息をついた。有り難い事だから、迷惑だと言い切れない、弱い立場だからこそ、悩みは尽きない。

「さて……」

イゼアは錆びて傾いた門を押し開き、ハーブ園が無事なのを確認しながら玄関に向かう。イゼアの母は裕福な家の娘だったので、あまり家事が得意ではない。花壇が荒れていないか心配

していたが、イーリスが真面目に世話をしてくれていたようだった。
イゼアは玄関でノッカーを鳴らしてから、返事を待たずにドアを開けた。
ここもあまり広くない屋敷だが、歴史だけは古い。古いので、維持が大変だった。
イゼアは物置部屋を目指して歩き出すと、居間から出てきた母のリリアと顔を合わせる事となった。
栗色の髪をきっちりと結い上げて、少しきつそうに見える。疲れた顔をしているのは、父がなかなか帰ってこないからだろう。
覚悟していたのに、いざとなるとやはり気まずくて、顔を顰めてしまった。
「あら、イーリス？　こんな時間にどうしたの？」
その問いに、イゼアは答える事なく固まった。
「って、イゼアじゃないっ！」
沈黙したイゼアを見て、リリアは即座に言い直した。他人と違い、自己申告する前に訂正してくれて、イゼアは安堵のあまり泣きそうになった。
娘を売り飛ばそうとしたが、何だかんだと実の親なのだと、胸が熱くなった。
売り飛ばそうとしたと言っても、相手が幼馴染みのアーソルドで、アリセレスには娘のように可愛がってもらっていた。普通に嫁のもらい手を探すのも難しいから、きっと母親として考えた末の結論だったのだ。

そう思い至ると、少し心が軽くなった。
「どうしたのその髪!?」
「え、いや……その、なんとなく」
特に金欠な時期だからまとまった仕送りを頼みにくかったと言ったら、親を信用していないと言ってしまうようなものなので、とても真実は言い出せなかった。
「アーソルド様は、アーソルド様はなんてっ!?」
「アーソルド様は関係ないよ」
何でもアーソルドに結びつけようとする母を見て、イゼアは腹が立った。
「まさか、髪を切ったからふられたの!?」
「いや、ふられるもなにも、最初からそういうのじゃないし」
愛人の件を断ったのはアーソルド自身だから、彼女の中ではイゼアがふられた事になっているようだった。
彼女はイゼアが子供の頃に、アーソルドに連れて行かれた先でどんな仕打ちを受けていたかをよく知らないから、本気で嫌がっているのを理解してくれない。
「まったく、どうして女の子なのにこんなに父親に似たのかしら。髪を切るとますます似てるわ」
リリアはイゼアの頬に触れて、大きくため息をついた。それからようやくマナラに気付いた。
「どなた？」

「私の師匠で魔工技士のマナラさんだよ」
「……聞いていた印象と、ずいぶん違うわね」
イゼアは兄に対して手紙で報告をしたが、それも必要最低限だった。呪いの事も報告していない。だから詳しい事はアーソルドからアリセレスに、アリセレスからリリアに情報が流れたのだと予想した。
今のマナラが普段の姿と違いすぎるうえ、ルフィル家からの伝言でどこまで姿が歪んでいるか、想像もつかなかった。
マナラはその噂を払拭するように、涼しげな笑みを浮かべた。
「初めまして、娘さんをお預かりしている、マナラ＝エルーシアです」
マナラは猫を被り、穏やかなふりをしながら、探るような目で挨拶する。
「初めまして、リリア＝ウィーゲムですわ」
リリアがマナラに対して、猜疑心を見せる事はなかった。アーソルドが好意的だから、そこまで悪く伝わっていないようだ。
「ところでイゼア、呪いが解けたって本当？」
「え……」
アリセレスに伝わったという事は、リリアが知っていてもおかしくない。おかしくはないのに、問われて驚いた。

イーリスからの手紙でも、その事は聞かれなかったからだ。
「半分本当。魔法を使うと死ぬけど」
正確には死正神官になってしまうのだが。死んでしまうのには変わりない。
「……それは、解けたっていうの？」
「あんまり、言わないと思う。私以外には無理だし。でも、五代先ぐらいには解けるらしいよ」
「五……」
その頃に、兄のイーリスでさえ生きているかどうかも分からないから、リリアが一族の呪いが解けて返り咲く姿を見るのは難しいだろう。
「イゼアの子孫はどうなるの？」
「……分からない」
おそらく子供には移らないだろうと言われているが、推測の域を出ないのだ。魔力を持って生まれたのに、魔法を使えないと判明した時の、失望の目を思い出すと、この場から逃げ出したくなるほど不愉快になった。
「でも、魔力の強い血を受け継げば、イゼアと同じ方法が取れるって事でしょう」
「いや、無理」
「どうして？」
「……」

イゼアの方法は、ある意味とても贅沢な呪いの封じ方だ。太陽神と死神に、生と死の祝福を受けたのだから。この方法は、並の魔力では身体が耐えられないらしい。イゼアでさえ、どうなるか分からなかったのだ。

しかし、太陽神に許されたというのは、伝えた方が家のためになる。

「イゼアの血を継いでも呪われないなら、アーソルド様の正妻になれるのよ。こんなチャンスは他にないわ。本当なら、囲ってもらえるだけ有り難いぐらいなのよ」

許された事を伝えようと、言葉を探していたイゼアは、顔を顰めた。

両親は恋愛結婚だ。リリアは今でも夫に夢中だが、たまにそれを後悔する時があるから、イゼアには愛以外を重視させようとするのだ。

その結果が、子供の頃から過剰に構ってくるアーソルドだった。

「お前はどうも男の子っぽいところがあるから。お前をもらってくれる見た目も良くて魔力も強い方なんて、アーソルド様ぐらいなのよ。世の中には、ハゲデブスケベジジイに嫌々嫁ぐ女の子もいるんだからね」

「そうならないように、仕事をしてるんだもん」

イゼアは母を睨み付けた。イゼアよりも小柄なリリアは、腰に手を当てて睨み上げてくる。

「もう、どうしてそんなにわがままな子になったのかしら。アーソルド様が、あんなに良くしてくださっているのに！」

「良くされた事なんて、一度もないよ」
イゼアは諦めの境地で、しかし一応反論した。
分かっていた。彼女はこういう人なのだ。だから顔を合わすと、つい喧嘩をしてしまう。
「私、物置に来ただけだもん。マナラさん、ちょっと待っててください。すぐに取ってきます」
イゼアはアリセレスに持たされたバスケットを抱えながら、必要な道具が揃っている物置部屋へと走った。

◆◇◆◇◆

残されたマナラは、去って行く弟子の後ろ姿を眺めた。
「まったく……」
リリアが小さく呟いた。
母娘のやり取りを見ていたら、イゼアが実家に帰るのを嫌がる気持ちも理解出来た。
リリアはイゼアとはまったく似ていないが、隙なく長い髪を結い上げ、背筋のぴんとした、意志の強そうな美人だった。
彼女は乱暴に押し付けるような事はしていないが、娘のためにも条件のいいアーソルドと結婚させる事しか考えていないように見えた。

確かに彼は、端から見ればイゼアに夢中だ。イゼアが彼の好意に気付いてその気になれば、あの男は簡単に手玉に取られ、意のままに操られる事になる。それが分かるから、娘のためにも二人を引っ付けたいのだろう。

ただその娘は、アーソルドをハゲデブスケベジジイよりは少しマシぐらいにしか思っていないという不幸があり、二人の溝は深まるばかりだった。

「イゼアのお母様」

「なんでしょう」

マナラは帽子をはずし、顔を煽りながら微笑んだ。

「しばらく無理だと思いますよ。イゼアもそうですけど、アーソルドもまだまだ子供ですから」

「大人になって、情熱が冷めてしまってからでは遅いんです！　アーソルド様との間に何人か子供が産まれれば、その内の一人を当主として引き取る事だって出来るかもしれないのに……」

イゼアは目を逸らしているようだが、二人の子供に呪いが出ないなら、その子を使うのが一番手っ取り早くウィーゲム家を再興する方法だ。

だから彼女の焦りも理解出来た。初恋は実らないとよく言う。恋心もいつかは消えてしまうものだから。

しかし母親としてはそこまで直接的には言えないようだ。

マナラは自分の母親と違う、娘を思う母親を見て苦笑した。
「大丈夫です。例えそうなったとしても、嫁のもらい手なら困りませんよ」
なにせ太陽神と死神の祝福を受けている。欲しいと思う者はいくらでもいるだろう。だから彼女の心配するような事態にはならない。
「数年すれば、男の子と間違えられない美人になりそうですし」
ようは、アーソルドでなくても同等の男なら誰でもいいのだ。
「本当に、どうして髪を……」
リリアは腕を組んで、唇を噛んだ。
「髪は売ったそうですよ。どうしてもアーソルドに頼るのが嫌だったみたいです」
男の子扱いされるようになり、本人はかなり後悔しているようだから、もう二度としないだろう。
しかしこれは伝えておくべきだと思った。イゼアは絶対に自分の口からは言わないはずだ。ラーハの事はさすがに他人のマナラは口を挟むつもりはないが、これは挟んでもいい些細な問題だ。
「あの子は……。イーリスがちゃんと誤解を解いてあげないから」
どうやら娘が自分の言葉を受け入れないため、少しは信用されているらしい兄が、アーソルドがイゼアの事を好いているという事実を、頑なに否定するイゼアに、受け入れさせるのを期

待していたようだ。

マナラが汗が引いたので煽る手を止めた時だ。玄関のドアが開いた。

「ただいまぁ。母さん、イゼアが帰ってきたっ……」

屋敷に入ってきたのは、暑いのかシャツの胸元をはだけさせたイゼアとよく似た顔の男だった。

これなら間違えられるのも仕方がないとマナラですら思うような、金髪の優男だ。イゼアに似ていると言っても、男性にしてはかなり華奢でずいぶんと女顔だった。

イゼアが少年的で、彼がやや女性的だ。イゼアは今、かかとが少し上がっているブーツをはいているため、身長差もあまりなく、イゼアがこの街にはいないと思っている住人達が、間違えるのも無理はない。

彼は少し驚いたように目を見張った。

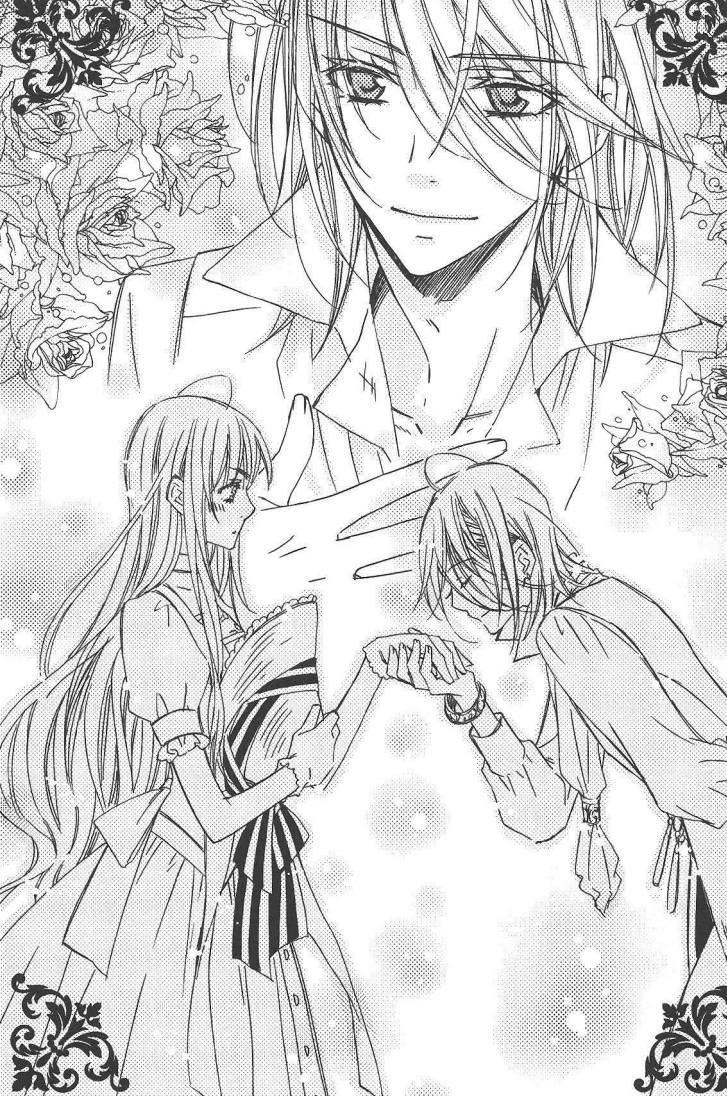
「お客様？」

彼は声質もどこかイゼアと似ていた。もちろん男女の差はあるので彼の方が低いが、男性にしては高めである。

「初めまして、イーリスです。あなたのような可愛らしいお客様が来ているとは思ってもみなかったので、失礼しました」

彼は身をかがめてマナラの指先を手に取り、指の付け根に口付けた。

薄い唇の両端がわずかに持ち上がり、見上げる濡れたような青い瞳は、星が煌めいていた。



唇が離れると、熱い吐息が指先にかかり、マナラは身を強張らせた。
マナラはこういった男性にこのようにされるのは初めてだった。
もちろん手に口付けられた事はある。しかしそれらは全て形式的なもので、彼ほど熱のこもった口付けは初めてだった。
思わずのぼせ上がりそうな、そんな微笑みと口付けだった。
彼の唇の感触と、指先に吐息がかかったくすぐったさが消えず、彼を意識せざるを得ない。
今まで聞いてきたイゼアの印象とは遠い兄に納得した。誰にでもこのような態度で接するなら、彼は危険人物だと言っていい。
「あなたの名を教えてくださいませんか？」
たったそれだけの言葉が、彼の唇から出るとまったく別の意味のように聞こえた。甘くささやくような声は、甘くもない言葉すら甘く感じさせた。
「マナラです」
「あなたがマナラさんですか。お目にかかれて嬉しいです。イゼアの言っていた通り、素敵な方だ」
彼はそれを手を握りしめながら言った。
マナラの目には、イーリスが本当に輝いて見えた。
もしも彼が、目の前でお金がなくて困っていたら、きっとつい何か買ってあげたくなる。し

かも彼は、呪いという不幸を持っているから、際限なく貢いでしまいたくなる女もいるはずだ。神の呪いも、美青年なら魅力になってしまう事もあるのだ。

そう考えていても、食事を奢るぐらいならいいかなと思ってしまい、マナラは苦笑した。

「ちょ、ちょっと兄さんっ!?」

イゼアの悲鳴のような声を聞いて、マナラは我に返った。

「人の師匠を口説くのやめてよ！　もう、金持ちそうな人には見境ないんだから！」

口説く基準は、金の有るなし、つまり奢ってくれる人達という基準があるらしい。

「久しぶりに会ったのに失礼だな。挨拶をしていただけだよ」

そう、ただ挨拶されただけだ。ごく普通の挨拶にすぎない。それでもこの顔で、この態度で挨拶されれば、一瞬で恋に落ちてしまっても不思議ではない。

女のイゼアが、女に騒がれるほどの顔なのだから。

「兄さんは挨拶だけでもだめ！　それでどれだけの女の人を落としてきたと思ってるの!?　目が合うだけで妊娠するとか言われてるんだから、もっと自覚を持ってよ！」

「そんなわけないだろう。だいたいイゼア、お前は兄に女性には挨拶もするなっていうのかい？」

イーリスはイゼアの髪に驚きもせず、詰め寄った彼女の頬を撫でた。

キャンキャン吠える犬のような妹を、愛情一杯可愛がる兄の姿に見えた。

「その方が世界のためな気がする」
「ははは、お前は相変わらず大袈裟だな。しかし、本当に短くなったね。アーソルド様から相談を受けて、どうしようかと思った」
「アーソルド様、相談する相手がそんなにいないんだ……」
「彼はどうしてか僕の事を遊び人みたいに思ってるみたいなんだ」
「うん、私も思ってる」
「というか、イゼアがそんな失礼な事ばかり言うから、アーソルド様が信じてしまっているんじゃないか。アーソルド様の女の子に対する態度が悪すぎるだけだよ」
イーリスはイゼアの頬をつついた。イゼアはむっとしながらイーリスから離れて、荷物を背負い直してマナラに向き合った。
「マナラさん……顔赤い」
その言葉を聞いて、マナラは素直に頷いた。のぼせ上がってしまったのだ。
「お前の兄、すごいな。いい男ってのは、顔の良し悪しや、実力や結果を出せるかどうかだけじゃないと初めて知ったよ。お前にとって、口説くってのはこういうのを言うんだな。うん、よく分かった」
アーソルドが遠回しに口説いても、気付かないはずだ。
アーソルドは顔はいいのだが、イーリスのようににじみ出る何かが足りないのだ。イーリス

からは頭がのぼせそうになる甘い香りがするような気がした。
「もう、だめですよマナラさん。うちの兄さんは金持ち探知機でも付いてるのかってぐらい、的確に金持ってる女の人を見定めて色気を振りまくんですから」
「本当にそういう基準なのか」
とてもイゼアの兄とは思えない男だ。
「そうです。どうしようもないヒモ男なんだから」
「イゼア、僕は普段役人として普通に働いてるんだが……」
イーリスが困ったように妹の言葉を否定した。
「身に付けてる高い物はみんな女の人にもらってるんですよ」
「くれる物はもらうに決まっているだろう。お返しの品が手作りになってしまうのは心苦しいが」
イゼアの兄だから、器用に何でもこなしそうだ。それがまた似合いそうなので、唸るしかない。
「うちの花、季節になると兄さんのプレゼント用にされちゃうんですから！」
イゼアはマナラの家でも花壇を整えてハーブを植えたりしている。この家では、植物は庭を華やかにするためではなく、使うためにあるようだった。
「ほんっと、アーソルドとは正反対だな」
「まあ、兄さんは女の人に乱暴したりなんて、絶対にしませんけど……」

マナラがもう一度イーリスに視線を向けると、彼は甘ったるいほどの笑みを浮かべた。こういう甘さが好きではないマナラでさえ、思わず目を奪われるのだから、こういうのが好物の女性では、この微笑みだけで陥落してしまうだろう。

「イゼア……まさかとは思うけど、クラスメイトの女の子達にあんな風に微笑んだりした事ないだろうね？」

「え？　してないですよ」

マナラが不安を覚えて言うと、イゼアは顔を顰めて首を横に振った。

よく考えれば、アーソルドがいる場所で、彼女がこのように笑う事はない。彼女はアーソルドがいるだけで、眉間にしわが寄るのだ。

思わず胸を撫で下ろした。

「とにかく、必要な物は用意出来たから、帰りましょうよ。ここにはお仕事で来てるんですし」

彼女は色んな意味で、一刻も早くここを離れたいようだ。

リリアがその反応を見て、ため息をついた。親子の溝が埋まる日はまだまだ遠そうだ。

「イゼアが帰ってきたと聞いたから、抜けさせてもらったのに、もう行ってしまうのかい？夜はどうする？」

イーリスは襟元を摘んで煽りながら尋ねた。

「客室を用意してもらったから、泊まってくるよ。兄さんはお仕事に戻って」
「仕事に戻っても、ご婦人方の話し相手をしているだけだよ」
イゼアが額を押さえてため息をついた。
女と話をしているだけの役人など聞いた事もないが、彼がいたら用もないのに女性が集まってくる光景が容易に想像出来た。
「それより、ルフィルのお屋敷に泊まって、アーソルド様に苛められたりはしない？　最近君に逃げられて少し反省したようだけど、やっぱりあのアーソルド様だから心配だよ」
「大丈夫だよ。仕事してるだけだし、いっしょにアーソルド様の友達も来てるから」
「そのお友達は大丈夫かい？　アーソルド様は手加減知らずで乱暴だから心配だよ」
「それも大丈夫。アーソルド様が振り回される方だから」
「そんなお友達が近くにいて、イゼアは大丈夫なのかい？」
「仕事してれば、二人でじゃれ合ってくれると思う」
そこまで聞いて、イーリスは安心したようだ。イゼアに忠告の手紙を送ったのも兄だったのを思い出して、マナラは納得した。
イゼアが心の底からアーソルドを嫌がっていると認識しているのは、彼だけのようだ。
「さすがのアーソルド様もかなり反省してるみたいだから、イゼアに対して悪戯はもうしないだろうけど、巻き込まれないように気をつけるんだよ。あのアーソルド様だからね」

「平気だって。最近アーソルド様は、少しだけ大人しくなったよ」
「確かに、手紙を読む限りはそんな感じがするけど……」
彼はイゼア並みにアーソルドに対して警戒心を抱いているようだ。アーソルドはこの美しい青年にも、ここまで嫌がられるような事をしたのだろう。
「帰ろう、マナラさん。あ、兄さんこれ、おば様から」
イゼアは母とは顔を合わせず、アリセレスに持たされたバスケットをイーリスに押しつけると、マナラの背を押した。
リリアの方はイゼアの事はイーリスに任せるつもりなのか、何も言わずに、イゼアに見えないように頭を下げた。
イゼアは家族の事は決して嫌っているわけではないが、やはり苦手なようだ。
世間ではこれを、反抗期と言うのだが、イゼアにその自覚はないだろう。

2章　甘いささやきの被害者達と、その被害者

屋敷に戻ると、イゼアは作業着に着替えた。

この屋敷内でいつまでもアーソルドにもらった服を着ているのも恥ずかしいし、本格的に作業を始めたら汚してしまう。

特殊な素材のシャツとズボン、そして多機能なエプロン、これがイゼアの作業着だ。格安で譲ってもらったブーツを脱いで、履き慣れた安全靴を履く。着ていた服はしわを伸ばしてから、備え付けのクローゼットにしまった。

マナラの方もいつものように長い髪を三つ編みにして、作業着に着替えていた。その作業着は、真新しいものだった。作業をしていればいつかは汚れるが、最初から汚れているのとでは見ている方の印象が違う。

広間は長袖を着ていても暑くない程度に冷やされていた。ここは、人々が快適に過ごせるように、冷暖房が完備されているのだ。工房ほどは落ち着かないが、流れ落ちる汗で薄着をしたくなるような環境ではないのは有り難かった。

「さぁて、今日もまずは数を減らそう……んん？」

部屋の片隅に並ぶ魔動機へと足を向けたマナラは、顔を顰めて窓の外を見た。ガラス窓の向こうでは、アーソルドとアランが向かい合い遊んでいた。

皆の前で竜を呼び出し、まるで昆虫を闘わせる子供のように、竜を闘わせているのだ。その竜というのが、アーソルドの方は優美な白竜、アランの方は骸骨竜と、とんでもない組み合わせだった。

見物していた彼の身内や使用人達は、手を叩いて喜んでいる。

「はは、真っ昼間に骸骨竜とか」

マナラが空笑いした。

なんでも休日に、二人の担任教師のセファインの引率で、竜を捕まえに行って召喚出来るように契約したらしい。アランはその時に、あれを手に入れたそうだ。

生きた竜というのは、簡単に捕まえられるものではない。ただでさえ人間が入り込むには命がけになるような、険しい自然と、魔物も多い場所に住んでいるのだ。その中で最も強大な力を持っているのが竜である。そして骨に欠損のない死骸を見つけるのは、それ以上に難しいらしい。

「なんか……楽しそうにしてますね」

イゼアは遊んでいる二人を眺めて呟いた。

「闘竜ってのはあるらしいけど、この組み合わせは誰も見た事ないだろうなぁ」
マナラは呆れ半分に言う。
骸骨竜というのは、滅多にお目にかかれるものではない。自然発生するには条件が厳しく、作れる術者は少ない。そして何よりも大きいので、気軽に出せるものではない。
「しっかし、昆虫を闘わせる感覚で、竜をぶつけ合うって……しかもみんな楽しそうに見学してるし」
家族も使用人達も、跡取りが立派に成長し、優秀な友人を手に入れた事を喜んでいるのだ。
「これも一種の家族サービスなんですよ。おば様の隣にいるのは、分家の方です」
「なるほど。目の前であれをやられたら、分家としてもほっとするだろうな」
アランが不安がるのを見ていたから、余計に気合いが入っているのだろう。
「アーソルド様は昔から、身内を喜ばせるのが好きで、大技を見世物にしてるんですよ。家族を失望させてばかりの私とは大違いですね……」
魔法の事でも、アーソルドとの事でも、イゼアは家族を失望させてきた。
家族を喜ばせる手段が、ゼイレムにもらった魔動機をプレゼントする以外に思いつかない。
「まあいいじゃないの。うちの家族に比べればさ。見捨てられないだけマシでしょ」
「……そうですけど」
マナラはアーソルドのような歴史ある魔道貴族の名家に生まれた。しかし成長しても魔力が

低かったため、家族ではないように扱われていたらしい。魔力の低い魔道貴族には、何の価値もないからだ。

イゼアは家族からそのような扱いを受けた事がないので、反論も出来ない。イゼアは大嫌いなアーソルドの愛人にされかけたが、マナラは親が勝手に婚約者を決めて、勝手に解消したりと、まるで物のように、感情を無視したひどい事をされている。

兄のイーリスは要領と外面ばかり良くていい加減だが、妹として可愛がってくれている。父も兄そっくりだが、娘として可愛がってくれる。母も娘の将来を心配してくれている。なんだかんだと、家族の仲は良い。母はたまに父をなじるが、父はそんな母一筋で、最後には母が折れる。本当に和を乱しているのはイゼアだけだ。

分かっているが、とても素直に従う事は出来ない。

「難しいものですね」

「イゼアぐらいの歳ならそんなもんだって。ああいう親なら、今がちぐはぐでも、十年もしたら丸く収まるさ」

魔力が少なくて、家族から疎外されていたマナラの場合とは違うのだ。

マナラはもう一度窓の外を見て、苦笑する。

「また人が増えてるよ」

イゼアも窓の外を見た。使用人達とは違う、普通の人々が集まっていた。

「ああ、近所の人達です。庭までなら、入ってきても怒られないんですよ。特にこの付近は、先祖代々住んでる人ばかりですから、領民との距離が近いんです。ルフィル家は代々あんな感じで、よく言えば世話焼き揃いだったそうですし」

大きな街道と川と橋がある流通の要地のため、人の出入りの激しい都市だが、歴史も古いので昔ながらの街並みがある川中は、昔ながらの人々と、ルフィル家が中心になっている。

歴史があるのは、魔道貴族の支配する都市の特徴でもある。血筋を維持出来ているという事は、安定の証でもあるからだ。

「さて、仕事するか」

「はい」

イゼアは頷いて、何の物語のクライマックスだと言いたくなる光景を繰り広げる遊びを横目に、修理に専念する事にした。

ちゃんと仕事しているのだと、遊びではないのだと、理解してもらうにはこれが一番手っ取り早い。

◆　◇　◆　◇　◆

朝、目が覚めると、イゼアはベッドの中で深いため息をついた。

昨日は作業をしていたら、ディナーに呼ばれて最低限見られる服装に着替えるはめになった。次からの食事は作業場に運んでもらえるように頼んで、夕食後はまた作業着に着替え、夜中になったので汗を流してから客室のベッドに潜り込み、ぐっすり眠って、今起きたところだった。

この季節にしては涼やかな朝で、とても心地良い目覚めだった。目覚めまでは、本当に心地良かった。

部屋に一つだけある椅子に、太陽神ラーハが座っているのを見るまでは。

相変わらず、姿だけなら神々しい美しさで、全身が朝日のように輝いている。

「なんで……こんな所にまでいるんです!?」

当たり前のように座って窓の外を眺めていた彼は、イゼアの目覚めを知って立ち上がった。

「私はお前のいる場所に来ているのだから、ここがどこなのかは関係ない。いつもの場所ではないから、どこにいるべきか悩み、仕方なくここに座って待つ事にした。人目につく場所で騒がれるのは好かないからな」

胸を張って堂々と、女の子の寝室に乗り込んだ事を悪いとさえ思っていない様子で言い切った。

彼はこういう神なのだ。

「ううっ」

当分来ないと思い込んでいたイゼアは、唸りながらベッドから這い出た。裸で寝るような習慣も、だらしのない格好で寝る習慣もないから良かった。しかし、裸で寝ていたとしても、彼

は一向に気にしないに違いない。
「で、今日はなんですか？」
髪を手櫛でときながら、ベッドの縁に腰掛けて尋ねると、彼は再び腰を下ろして小さく頷いた。
「私の神殿の一つから、宝物が盗まれた」
イゼアは目を伏せた。
夢だった事にしてベッドの中に戻りたくなった。しかしそんな事をしてどうなると自分に言い聞かせ、気合いを入れた。
ラーハと会話をする時は、腹の底に力を入れて、気合いを絞り出さなければ到底続かない。
「一つって事は、ラーハ様がお住まいの正殿は無関係で、どこかにある人間が管理している一般の神殿から盗まれたって事ですよね」
「そうだ」
イゼアは少しだけ安堵した。宝物と言うから、ラーハに直接捧げられるような無二の宝を思い浮かべてしまった。一般の神殿なら、価値の高い物といっても、神器と呼ばれるような物はないはずだ。
「盗まれたって、どんな物なんですか？」
「私が住んでいる正殿から美術館に貸し出していた物らしい。回収するために一時的に保管し

ていた地方の神殿で、根こそぎ盗まれたそうだ」

イゼアの頬が引きつった。

「ね、根こそぎって……」

「慌てていたから、おそらく古い物なのだろう。人間にとって古い物の方が価値があるらしいからな」

彼はこのようにほいほいとイゼアの目の前に現れるが、その実体は世界に六人しかいない一級神の一人である。そのラーハが住んでいる太陽正殿に、古くからある『宝物』が盗まれた。

「それって……ひょっとして、人間が神器と呼ぶような物ですか？」

「そのように呼んでいるらしいな。長年神の近くに物があると、力が染みつくから間違ってはいない。その中でも小さめの装飾品のような物ばかり選んでいたから、盗みやすかっただろうな」

「責任者が自害してたりしてませんか？」

「なぜだ？　悪いのは盗人だろう」

どうやら盗まれてしまった事に関しては、怒り狂うような出来事ではないようだ。自害を周りが止めているのを祈って、話を進めた。

「そ、それでどうして私の所に？」

いつもの相談事とは少し違うが、彼としてはいつもと同じ感覚で相談事に来ているのだと判断した。

「逃げ込んだ先は分かっていたのに、犯人が分からなかったらしい」
「ラーハ様にもですか？」
「そうだ」
人里に入られたら、特定の誰かを見つけるのは難しい。イゼアのようにラーハが直接つけた目印があれば別だろうが、そうでないなら彼にとっては王も物乞いもただの人間でしかないのだろう。
人間が彼の目を引くとしたら、具神ぜイレムにおかしな行動を取らせるような人間か、優秀すぎる魔道士ぐらいに違いない。
「よほど大切な物が盗まれたのか、私が印を与えた神官達が焦っていたから、手を貸そうとしたら止められたんだ」
彼は不可解だと言わんばかりに顔を顰めた。
手を貸そうと思ったのは、死神ターラとその神官達を見たからだろう。あれを見て、自分も神官達に何かすべきかと考えていたところに、事件が起こってしまったにちがいない。
「焦っているのに、なぜ断るのだろう」
せっかく親切に助けようとしたのにと思っているのだろう。
「別に世界に影響を与えそうな物は交じっていないんですよね？」
「もちろんだ。そんな危険な物は外に出さない」

イゼアはほっとした。それだけ分かれば十分だった。

「じゃあ、太陽神が動くほどの事じゃないって事ですよね。それなのにいきなりラーハ様が手を貸してくださるなんて提案してきたら、みんなビックリしますよ。大切な物が盗まれたといっても、せいぜい売り飛ばされるだけで、壊されるわけじゃないから何とでもなるでしょうし」

神官達に同情した。下手にラーハが動くと、未曽有の災いが降りかかりそうだ。イゼアには神官達の恐怖が手に取るように分かった。

「それでは時間がかかるだろう？　せっかく手っ取り早くすませようとしたのに」

彼は久々にやる気になったのに、頼られなかった事に不満を覚えたようだ。人間の世界にもよくある話だ。以前、大きな問題が起こった時に、隠居していたアーソルドの曽祖父が出てきたが、ぎっくり腰になって何の役にも立たなかったのを思い出した。

問題はラーハが隠居の魔道士どころではない力を持っている事だ。

「あの……ラーハ様はさっき自分にも誰が盗んだか分からないとおっしゃっていましたけど、具体的にどう手を貸そうとしたんですか？」

恐る恐る尋ねると、彼は普通に言った。

「最初は小さな村に逃げ込んだ。当日まではどこにあるかおおよそは探査出来たらしい」

「はぁ」

「盗賊と知って匿っているようだったから、同罪として生きる者全てを焼き滅ぼそうとしたんだ。そうすれば、じっくりと探す事が出来る。私の宝物は、少しの事では壊れないからな」

名案だと言わんばかりの彼を見て、イゼアは目眩を感じてベッドに手をついた。

神官達が哀れでならなかった。

神にとって人間の生き死にが些末な事だとは知っていたが、ラーハはその感覚が突き抜けていた。死神であるターラの方が、生についてよく知っていた。

イゼアはラーハの正神官にならなくて、本当に良かったと思った。ターラがいなければ、イゼアは今回の件で他の神官達と一緒に絶望していたのだ。

イゼアはせめて彼等が楽になれるように、言葉を選んだ。

絶対に余計な事をしないような、そんな言葉を。

「……神官の皆さんが正しいと思います。全て任せてあげてください。手を出さないでください。絶対に出さないでください。そっとしておいてあげてください」

他人事ながら、そう進言する事しか出来ない自分が不甲斐なかった。だがどう考えても、イゼアに出来るのは、ラーハに動かないようお願いする事だけだった。

「しかし、そうしている間にまた逃げられたんだ。印を与えた神官達は、私の属性と同じになるから、夜になるとよく見えなくなる。日が昇った時には、その気配が消えていた」

夜になると正神官としての恩恵である、ラーハに与えられた力が使えないようだ。イゼアが

そう感じないのは、ターラの印のおかげかもしれない。

「ラーハ様、たかが泥棒です。別に世界をどうこう出来るような恐ろしい道具でないならいいじゃないですか」

「世界に影響は与えないが、人間社会には多少の影響を与える強い魔具も交じっていたが、いいのか？」

イゼアは大変だと口にしかけたが、人里が一つ焼き払われるのに比べれば大した事はないと、我慢した。

「つまり、ほとんどはただの道具なんですね？」

「ああ。美術的価値の高い装飾品ばかりだと聞いている。太陽神殿の権威向上のために一般公開したのだそうだ」

「そうだって、ラーハ様は確認していないんですか？」

「外に出す前に私の元に持ってきて許可を求めたのだが、その中には確かそれなりに危険な武器も交じっていた気がした」

ひょっとしたら神官達はそれに気付いていないかもしれない。

しかし正神官達が気付かないのだから、泥棒もその性能には気付いていないだろう。危険な武器だと気付いていたら、外に持ち出したりはしないはずだ。

道具とは、使い方を知らなければ意味がない。

そして強すぎる魔具の類は、厳重に封印でもしない限りは、一流の魔道士が探査魔法を使えば簡単に見つけられる。
厳重に封印されているうちは、魔具としては使えないから危険はない。
つまり見つけられない今の状態なら、試しに使ってみる事すら出来ず、危険はないという事になる。
「やっぱり、専門家に任せるべきですね。ラーハ様は失せ物探しなんて専門外ですよね？」
「もちろんだ」
恥じる事なく言い切った。
神々は自分が何に属するか知っているため、出来ない事を恥じる事がないようだ。
「じゃあ、自分の神官達を信じてあげましょうよ。人間は信じてもらえると嬉しいものですから」
きっと彼等も泣いて喜ぶだろう。
「そうか。見守るというやつだな」
「そうそう、それです」
ラーハは満足げに頷いた。これなら余計な事をしないはずだ。人間社会も平和で、神官達も安心して捜索に打ち込める。
「じゃあラーハ様、私はお仕事があるので」

起きるにはまだ早いが、早く帰って欲しいのでそう言った。
「仕事？　そういえばここはどこだ？」
「私の実家がある街で、アーソルド様の邸宅です。頼まれて、壊れた物を直しているんです」
「……ああ、この前のターラの所に連れて行った男の家か。道理で出来のいい精霊が多いはずだ。なかなかいい土地だな」
「褒めていただけて光栄ですが、ラーハ様、一度この土地に来てるはずですけど、呪いに」
「記憶にない」
「ああ、そうですか」
本当にウィーゲム家の事など忘れていたようだ。分かっていた事だったが、イゼアはいじけそうになった。
「しかし、何かが引っかかるような気がする。なんだろうか。あまり良くないような……」
「えっ、どういう意味……」
イゼアが問いただそうとした時には、既にラーハは姿を消していた。
何が引っかかると言いたかったのか聞き出したかった。しかしターラを呼び出す鈴はあっても、ラーハを呼び出す方法はない。
「考えても仕方ないか」
例えラーハが良くないと言うような道具が交じっていたとしても、封じられているので危険

はない。
イゼアは後ろに倒れてベッドの上を転がる。いつもとは違う場所でラーハと遭遇したのは予想外だったが、まだ受け入れられる範囲内だ。
イゼアは肺の中身を出し切るように息を吐き、思い切り息を吸うと飛び起きた。
神官達には同情するが、イゼアには無関係な出来事だ。早く犯人が捕まる事を祈りながら、パジャマを脱ぎ捨て、作業着に着替えた。エプロンの腰ヒモをぎゅっと結んで、気合いを入れ直し、部屋のドアを開けた。
「わっ」
ドアのすぐ外にアーソルドがいて、イゼアは驚きのあまり飛び退いた。
「イゼア、無事みたいだな」
ホッとした様子の彼のすぐ後ろには、マナラとアラン、そしてアリセレスと執事の姿があった。
以前、ラーハが降臨した時に、離れたところにいたはずのアランが気付いて、アーソルドと一緒にマナラの工房まで駆け付けてくれた事がある。
近距離であれば、何かが現れた事に気付かないはずがない。
イゼアは悟った。
（とうとう、おば様にバレたか……）
マナラが肩をすくめ、逃げ出すように広間に向かった。

そしてイゼアはアリセレスに抱きしめられ、尋問を受ける事になった。

◆◇◆◇◆

「ラーハ様に許されたのだったら、もっと早く言ってくれればいいのに！　精霊達が騒ぐから何事かと思ったのよ」

アリセレスはハンカチで目元を押さえながら言った。

濃いめに淹れた紅茶を飲みながら、イゼアは目を逸らす。

あれから全員が食堂に誘われて、朝食をとりながら説明させられた。食事はとても美味しいのに、心から楽しむ事が出来ない。

「でも、呪いはけっして解けてないんです」

「なぜ？」

「怒りにまかせて呪ったら、自分でも解けなくなっていたらしいです。変則的に呪いを封じてもらったんですけど、そうしたら今度は魔法を使うと死んでしまうように……」

食卓に沈黙が落ちた。

「……噂に聞く以上にいい加減ね」

「ほっといてもあと五代ぐらいで解けるんじゃないかと言われました。ちょっと色々と複雑な

事情があるので、出来ればラーハ様の事は内緒にしてください。もしも私の所にラーハ様が降臨するなんて噂が流れたら、馬鹿な事を考える人も出てくるかもしれません」

そう言ったとたんに、アリセレスがはっとして、執事に目を向けた。

「知った者には箝口令をしきなさい。知られたら面倒な事になるわ。特に中途半端な太陽神信者が厄介よ。どんな手段を使ってでもイゼアを手に入れようとするかもしれないもの」

「畏まりました、お嬢様」

執事は一礼し、早歩きで退室した。

「で、今日は何の相談事だったんだ？　またくだらない事か？」

アーソルドに問われて、イゼアは厄介な事態を思い出した。

「今日はくだらないというか、皆さん大変というか」

イゼアはため息をついた。

「なんでも、ラーハ様の神殿から美術館に貸し出した宝物が、保管していた神殿から根こそぎ盗まれたそうです」

「そりゃあ大変だな。神官達が」

アーソルドも迷わず神官達に同情を向けた。

「しかも、盗まれた中には使い方によっては危ない物が交じっていたような気がしたとかで、ラーハ様が自ら動こうとして、皆に止められたっていじけたみたいです」

「いじけたのか」
「ターラ様のところの神官達と比べたんだと思います」
悪い事ではないのだ。普通に考えれば、いい意味で反省し、自己改革をしているように見えるのだから。問題は、彼の力が強大すぎて、方向性がおかしく、失敗が時に天災のような規模になるだけだから。
「無茶苦茶だな。で、お前も止めたのか？」
「もちろんです。逃げ込んだ先の住民を全て焼き払おうとしてたんですよ」
アーソルドの顔が強張った。自分の首根っこを掴んで振り回した存在が、よもやそこまでひどいとは思っていなかったに違いない。
ゆで卵を食べていたアランは、次のゆで卵に手を伸ばしながら呟いた。
「やはり、ターラ様の方がいいな。ターラ様はお優しい。死者を理解するという事は、人の本質を理解するという事だ」
その言葉を聞いて、マナラは小さく笑った。
「まぁ、ない物ねだりしても仕方がないよ。ラーハ様には、出来るだけじっとしていただけるよう、誠心誠意お願いするしかないね。下手な親切心なんて起こされたら、ろくでもない事になる」
態度から声音まで、マナラはすっかり猫を被るのをやめてしまっている。普段着だと、猫被

りもやる気が出ないようだった。
「ラーハ様は、ただ追い払っているうちは安全だよ。うっかり何か頼まなければいいんだ」
「……何か頼むと危険ってのが、複雑だな」
アーソルドはマナラの考えを聞いて、複雑そうに言った。
「ラーハ様に敵意を持たれる次に、好意を持たれるのが厄介だね。幸い、その好意は今のところ人間が猫を可愛がるぐらいのものだからいいけど、これ以上気に入られないように、気をつけるんだよ」
カットされたスイカをフォークで差しながらマナラは忠告した。
イゼアは思い悩んでため息をついた。どうすれば嫌われない程度に好感度を下げられるのか、その答えが分かる人間はこの世界のどこにもいないだろう。

◆◇◆◇◆

食事を終えると、イゼア達は解放されて、修理の仕事に戻る事が出来た。
歯車がずれて動かなくなっている魔動機を直してやると、生き生きと動き出して、まるで感謝の言葉を述べているように聞こえた。この姿を見ていると、荒んだ心が癒されていく。
「魔動機を弄っている時が一番落ち着く」

「だろう？」

イゼアの呟きに、マナラは顔を上げてにやりと笑って言った。

職人らしくなるのはいいが、マナラのようにはまり込まないように気をつけなければならない。

外からは、今日もアーソルド達の楽しげな声が聞こえてきた。

水遊びをしているようだが、遊びとは思えない激しい水音がする。屋敷の敷地には美しい精霊の住み着いている小川が流れており、その精霊と魔法で水の掛け合いをしているのだ。

精霊は自然そのものが形と力を持った存在だと言われているが、成長して上級精霊にもなると、あのように人間と遊んで楽しいと思うようになる。さらに成長すれば、人間のふりをしたり、人間と友人や恋人になる者も現れる。代々のルフィル家当主と契約を結ぶのは、それが出来るほどの精霊達だ。水辺に腰を下ろす、緑かかった透明な長い髪の美女達は、一見人のようにも見えた。もちろん人ならざる色彩や、雰囲気で精霊だと分かるのだが、もしも髪の色まで変えて魔力を隠されたら、ただの絶世の美女と見分けがつかなくなる。

そんな完璧な美女達と戯れるアーソルドとアランは、とても楽しげだった。美女と遊んで、楽しくない男はいないという事だろう。

イゼアが外の騒音を気にしていると、再びマナラが口を開いた。

「人間はああやって裏切るが、道具は手入れしてやれば裏切らない。可愛がってやれば、こんなに可愛い精霊が宿る事だってある」

今日も姿を見せてくれた宝石箱の精霊は、マナラに笑みを向けられ、つられて笑みを浮かべた。

ルフィル家に譲渡されてからずっと隠れていたのに、イゼアが部屋に入るとすぐさまその可愛らしい姿を見せてくれる。まるで主を待つ犬のようで、見ていると心が和んだ。

「そういえば君、名前はなんて言うの？」

イゼアが問うと、宝石箱の精霊は首を傾げた。

「……あ、忘れた！」

彼は名前を忘れたというのに、嬉しそうに言った。

「自分の名前を忘れたの？」

「うん。最初のご主人様がつけてくれたけど、ずっと呼んでもらえなかったから、忘れちゃった」

逆を言えば、名前を忘れてしまうほど長い間、ルフィル家の誰一人として主と認められなかったようだ。

「んじゃあ、中には何が入ってるかとかも、まったく覚えてないの？」

「うん、忘れた！」

悪びれる事もなく、むしろ目を輝かせて教えてくれた。

小人のように小さく、宝石箱に相応しい綺麗な外見の少年は、突然箱の上に立ち上がり、ぴょんぴょんと跳ねた。

どうしたと尋ねようとしたところ、宝石箱の精霊は、手を前に差し出して声を上げた。
「具神様、具神様だぁ！」
嬉しそうな宝石箱の精霊の声を聞いて、イゼア達はぎょっとして振り返る。そこには確かに具神ゼイレムが立っていた。相変わらずぼさぼさの灰を被ったようなくすんだ銀髪で、薄汚れた衣を身に付けている。身なりを整えればラーハ達のように神々しさも出るはずだが、彼はそんなものには無頓着で、驚く人間達の様子を気にもせず、魔動機をマナラに手渡した。
ラーハといい、自分の信者がどこにいるかは本当に関係ないようだ。
そんなゼイレムの姿を見て、宝石箱の精霊が目を輝かせていた。
「わぁ、具神様だぁ。初めて見た！」
「初めて見たのに具神様だって分かったの？」
「そりゃあ分かるよ」
逆になぜ分からないのだとばかりに、尋ねたイゼアを見つめた。
彼は道具の精霊だから、ゼイレムに属する精霊だ。本能で自分の上に立つ存在だと理解出来るのかもしれない。
「精霊……？」
ゼイレムが珍しく、マナラ以外に興味を示した。
「珍しい」

そう言って彼は宝石箱の精霊に歩み寄り、その頭を撫でた。宝石箱の精霊は、畏怖する事もなく、逆にそれはもう嬉しそうに目を伏せた。
「そうだ、ゼイレム様。その宝石箱に何が入っているか分かりませんか？」
マナラに問われ、ゼイレムは宝石箱を持ち上げ、しばらく観察して、そっとテーブルに戻した。
「分からない」
「ですよねぇ」
いつもの事だ。こうして何かに反応するのが稀なのである。多くを求めてはいけない。
ウィーゲムが魔法を使えないように、彼は力を思うように振るえない。
「思い出したよ。ご主人様にね、開けちゃいけないって言われたんだ」
「ご主人様って誰？」
イゼアが問うと彼はイゼアを指さした。
「ご主人様に似てる」
イゼアはうんざりして額を押さえた。それだけである程度の予想が立つ。
「きっと、呪われる少し前のご先祖様です」
「なんで少し前だなんて分かるんだ？」
問われてイゼアは少し困った。
「呪われてから、うちの家系、みんな似たような顔に生まれているというか……」

父は祖父の若い頃にそっくりで、その祖父も曽祖父にそっくりだったらしい。イゼアやイーリスも、本当にリリアから生まれたのかと思うほど、父親にそっくりだ。

「何だその呪い。美男子になる呪いとか、赤の他人が聞いたら祝福だって言われかねないよ。お前の先祖がルフィル家に保護され続けてるのって、まさかその顔でたぶらかし続けたからじゃないだろうな」

「んなわけないじゃないですか。男性当主同士の方が多かったんですよ。まあ、おば様の初恋の相手はうちの父だったそうですけど」

どうしても結婚出来ない相手だったから、涙を呑んで諦めたらしい。だからこそ、イーリスやイゼアを我が子のように可愛がっているのだ。

「呪いを受けてからは不思議と他所から取り入れた血が出にくいんです。魔力を引き継がないようにそうなったんじゃないかって言われてます」

「月神様と相性のいい一族を潰そうと呪ったとかなら理解出来るけど、逆に残してどうするんだ？」

「ラーハ様ですし、本当にただむかついて何も考えず適当に呪ったから、本人の意図しない効果が出てるだけですしね」

本人はあまり覚えていないようだから。

「その顔が量産って……すごいな。他にもたくさんいるの？」

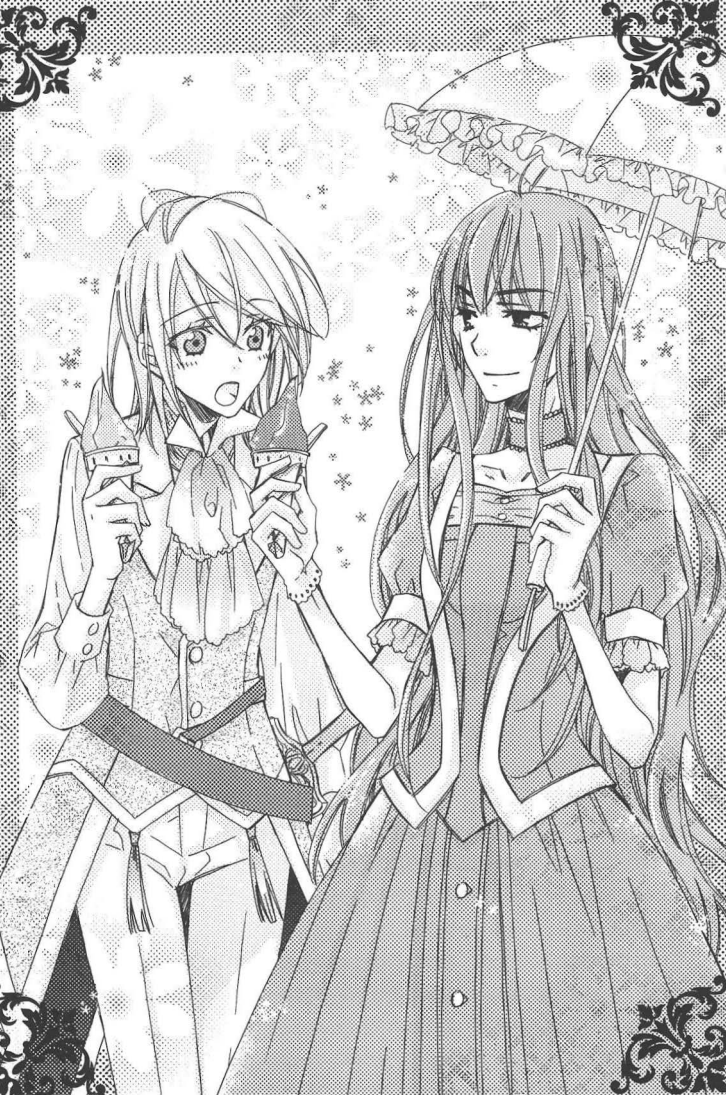
「いえ、量産はされませんよ。直系ばかりに出る特徴です。魔法が使えないのと違って、絶対ってわけじゃないですし。不思議と似てるぐらいで」
マナラがため息をついた。
「……ややこしい一族だね」
「ややこしい？」
ゼイレムが首を傾げてしばらくの後、ふらりと姿を消した。

◆　◇　◆　◇　◆

よく晴れた昼下がり、イゼアとマナラは久しぶりに屋敷の外に出た。
魔動機修理を始めて数日が経ったのだが、規格外サイズの魔石が必要になったため、そろそろ乏しくなってきた、その他必要な素材を買い込むついでに注文しに行く事になったのだ。
たまには外に出て歩かなければ身体に良くないし、気晴らしとマナラの観光にもなってちょうど良かった。
イゼアは自分の家にある服はもう小さくなっていたので、今日もやはりアーソルドのお古を着ている。しかもアリセレスが喜んでコーディネイトしてくれたので、隣に並ぶドレス姿のマナラに恥をかかせる事はなかったが、イーリスが着ているような少し華美な服だったため、飾

り気のない服になれたイゼアは落ち着かなかった。
ただ、マナラにもらった護身用の剣は、いつもの格好よりは、この格好の方が様になっている。
たまにイーリスと間違えられつつ、マナラに古い街並みを案内しながら、川東に広がる新しい街に来た。
まずは目抜き通りにある魔道具店に直行して魔石を注文し、不足していた素材を買い足した。全部を女の力で持ち帰るのは大変そうだったため、屋敷に届けてもらえるように手配をして店を出た。
店の外に出ると、マナラは日傘をさして、額の汗をハンカチで拭う。日差しは強いが、爽やかな風が吹いているので、日よけさえしていれば、汗だくになるほど暑くはない。
「しっかし、話には聞いていたけど、川を越えると本当に雰囲気が違うねぇ」
マナラは休日でもないのに、若者の多い商店街を見て呟いた。
「一流レストランとかホテルならうちの近所の方になるんですけど、庶民的な食べ物とかはこっちですね」
マナラは周囲を見回し、列が出来ているジェラートの店を指さした。
「じゃあ、暑いしのどが渇いたからあれを買うか」
「はいっ」
イゼアは、その提案を聞いて一も二もなく付き従った。

「この店、すごく美味しいんですよ。違う味買って、半分こずつしましょうよ」
「そうだね。こういう時、女同士だといいね」
季節の果物がふんだんに使われた様々なジェラートを見て、イゼアは何にするか悩んだ。
「アンセムよりも色々とあるねぇ」
「土地が豊かで、新鮮な果物が手に入りますから。アンセムは荒野にあるせいで、食べ物は他所から仕入れるのに頼ってますし」
「それもそうか、あ、これください」
「私はこれ」
マナラは数種類のベリーの入ったジェラート、イゼアは桃のジェラートを選んだ。
ひんやりとしたそれを口に含むと、懐かしい味が広がる。さっぱりとしたジェラートの中に、交じっている果肉が好きだった。
「普段あんまりこういう物は食べないけど、暑い日に食べるのは格別だねぇ」
「これ好きなんですよね。たまにアーソルド様が買ってくれたんですよ。アーソルド様関係で、唯一の良い思い出です」
イゼアは桃のジェラートを差し出し、マナラはそれにかじりつきながら果肉が見え隠れする赤紫のジェラートを差し出した。イゼアは目を輝かせ、少し腰を曲げてジェラートに顔を寄せた時だった。



「イーリス様っ、その女性はどなたですっ!?」
突然かかった声に驚いて、イゼアは鼻先をジェラートに突っ込んで、思わず手に持っていたジェラートを取り落としかけた。
マナラは苦笑しながら、持っていたハンカチで、汚れたイゼアの鼻を拭ってくれた。
「……今度は女か」
マナラは呟いた。
イゼアはジェラートを落とさないように気をつけて、声の主を探す。先ほどの声がイゼアへ向けられている言葉なのは確実だ。
声の主はすぐに見つかった。
いかにもイーリスが好みそうな、育ちの良さが窺える、大人しそうな美少女だった。イゼアよりもいくつか年上だろう。彼女は蒼白な顔をして、イゼアだけを見ていた。
夏だが肌が見えない清楚なドレスをきっちりと着こなし、栗色の髪には花の飾りが付いている。
「今日は、お仕事のはずではっ」
「え、いや、私はイーリスじゃなくて」
美少女は今にも泣き出しそうな顔で、日傘の柄をぎゅっと握りしめた。何を言っても泣かせてしまいそうな雰囲気に、イゼアはどうしていいのか分からなくなった。

しかし彼女はイゼアの予想に反して、意を決したように前に進み出た。
「わ、わたくし、イーリス様のお誕生日が近いので、プレゼントを用意しておりますの」
言われて初めて、イーリスの誕生日が近い事に気付いた。
イゼアは何も用意していないから、適当な魔動機でも贈ろうと決めた。
「きっと、きっとお気に召していただけますっ！」
現実逃避しかけていたイゼアは、はっと我に返った。
彼女は浮気現場だと思い込んでいるのに、このように物で釣ろうとしている。彼女から見て実の兄がどんな男であるか、それだけで理解出来た。
イーリスは、いつも物に釣られているのだ。
「いや、お嬢さん、落ち着いて。違うから」
マナラが空いた手を前に出して言う。反対の手に持っている溶けかけたジェラートを舐めているので全てが台なしだ。
美少女はマナラを睨み付けた後、潤んだ瞳でイゼアを見つめ、大胆に飛びついてきた。
「イーリス様っ、お逃げにならないでっ」
慌てて身をひねって逃げようとしたイゼアの肩に、彼女は逃がすまいと必死にしがみつく。
「違うって、私はイーリスじゃないって！」
「どうしてそんな事をおっしゃるんですか!?　わ、わたくしの事が、もうお嫌いになりました

か!?」

「落ち着いて、話を聞いてっ！　私はっ」

イゼアが妹だと名乗ろうとした時、背中に何かがぶつかってきた。

「ぐっ、な、何!?」

「イーリスっ、何してるのっ」

別の女性が背中に突撃してきたようだ。腕にしがみついている女性と違い、明るい無邪気な声だった。しかし無邪気さとは裏腹に、背中に押し当てられている胸は豊かだった。同性でもドキドキしてしまうほど、しっかりと押し付けられている。

彼女達は自らの持てる武器を活用し、全力で『イーリス』を誘惑しているのだ。盗られてなるものかと、イゼアの周りで火花が散った。

「ちょっと、あなた何!?　イーリス様から離れてっ！」

「あぁら、そちらこそ、イーリスに嫌がられているじゃないの」

「だから、私はイーリスじゃありませんって！」

「まあ、そんなに胸元を出して、なんて下品ではしたないドレスなの」

「あぁら、なんて時代遅れのダサいドレス。ママの若い頃だって、そんな古くさいドレスは廃れていたんじゃないかしら」

イゼアは叫ぶが、二人は聞いていない。

部外者と化したマナラは、イゼアの手の中で溶けていくジェラートをそっと取り上げ、日傘を首で支えながら、交互にぺろぺろと舐めた。よほど気に入ったようだ。

その間にも、二人の言い争いは苛烈になっていく。

イゼアは開いた手を師匠に伸ばした。

「ま、マナラさんっ」

「うん、がんばって残さず食べるから安心して。早くしないと溶けてもったいないもんな。うん」

「ち、違うっ、助けっ」

そう叫んで手を伸ばした時だった。

一瞬、頭の上を何かが通りすぎ、三人を覆うような大きな影を作った。

「おい、何をやってるんだっ!?」

その声は、頭上から響いた。

見上げると、逆光の中に、大きな翼を広げる馬がいた。それは優美に地上に降り立ち、その背に乗っていたアーソルドとアランがイゼアを見下ろした。

「また修羅場か！」

「失礼なっ！」

アーソルドの失礼な言葉に、イゼアは声を上げた。

「しかし、なぜそこまでされて気付かれないのか、さっぱり分からんな」
アーソルドは少女二人の顔を見比べながら言う。
イゼアもここまでしがみつかれているのに、どうして彼女達は気付かないのか、理解出来なかった。
「で、アーソルドはどうしてそんな物に乗ってやって来たんだ？」
マナラは両手にジェラートを持ったまま尋ねた。既に半分以上なくなっている。
「もちろん、お前達が出かけたって聞いたから、追ってきたんだ」
彼等はよほど暇だったようだ。
「それに、ふと気付いたんだが、お前はこいつがちゃんと飛んでいる姿を見た事がなかっただろう。だからお前にこいつの優雅な飛行姿を見せてやろうと思ったんだ」
アーソルドは天馬の上で、どうだと言わんばかりに胸を張った。
以前彼は、イゼアの目の前でこの天馬を召喚してこれ見よがしに自慢した。それでイゼアが感心しなかったため、今度は飛んで見せてくれたらしい。
しかし見せられても反応に困るというのが本音だった。珍しいし、すごいにはすごいが、男二人がまたがっている姿を見たら、感動も薄れるというものだ。
「ふん。言葉も出ないほど美しいか。ひょっとして今さら欲しくなったのか？　くれてやってもいいが、馬屋がないだろう」

イゼアはこの場に話を聞かない人間が増えただけだと悟り、ぎりぎりと歯を噛みしめた。
みんな自分勝手な理屈で絡んできて、イゼアの話など聞くつもりもないらしい。苛立ちが募っていく。
「まさか贈り物が天馬だなんてっ……」
「しかも男の子!?」
「ああ、イーリス様の美しさはなんて罪なのかしら」
「違うっ！」
勘違いする二人の少女に、アーソルドは指を突きつけた。
「僕は領主の息子のアーソルド＝ルフィル！　そいつの保護者だ！」
川東は商人や旅行客向けの宿や商業施設が多いため、よそ者が多い。領主の息子であるアーソルドの顔を知らない者も多い。
「イーリス様はルフィルの男まで虜にしてしまうなんて」
「だから、人の話を聞け！　だいたいそれは妹のイゼアだ！　女だ、女！」
男色家疑惑が広がる前に、アーソルドは慌ててイゼアを指さして訂正した。その間にも、巻き込まれるのを恐れたのか、アランが無言で天馬から降りていた。
二人の少女は、イゼアの顔を見てあっと声を上げた。
「よく見ればイーリス様のとろけてしまいそうな目と違うわ」

「そうね。イーリスはもっと儚げで繊細だね」
イゼアはぶち切れそうになるのをなんとか堪えた。
そもそも年齢と性別の違う人間を、しかも自分の好きな相手を、抱きついてきても間違え続ける方がどうにかしているのだ。
「なんて手のひら返しが早いんだ。ひどいな」
勝手な事を言いながら身を離す二人を見て、アーソルドが呟いた。
「では、なぜ間違えたんだ？　イゼアはちっとも繊細で儚げじゃないのに」
天馬の鬣を撫でていたアランは、戸惑ったように女達を見た。アーソルドは天馬から降りながら、その疑問に答えた。
「雰囲気が似てるからじゃないか？　さすがに一緒に育ったから、立ち居振る舞いは似たようなもんだしな。ほら、宝石でも本物だと思ってると、色や形が似てれば案外偽物だと気付かないもんだ」
「そうか。やはりイゼアの兄を観察すればいいんだな。呪われているのにモテるなんて、すごいな」
二人に模造品扱いされたイゼアは、何もかもが嫌になりそうだった。
「マナラさん、行きましょう」
帰ろうとマナラを呼んだ時、最初にイゼアをイーリスと間違えた、楚々としたお嬢様の方が

イゼアの手を握ってきた。頬を赤く染め、潤んだ瞳で見上げられると、本当に申し訳なさそうに思っているように見えた。

思わず守ってあげたくなるような、触れるだけで壊れてしまいそうなほど華奢な女の子だ。

「ごめんなさいね。イーリス様に妹さんがいたのは知っていたけど、まさか双子だったなんて！」

「三つも歳が違いますけど」

「まあ、イーリス様と違って健康的だから、大人っぽく見えたのかしら」

「兄さんは細くて色白なだけで、風邪一つひいた事がないんですけど」

「えっ!?」

声を上げたのは、女達ではなくアーソルドだった。

「アーソルド様の乱暴な遊びに付き合うのが嫌で病弱なふりはしてましたが」

「そういえば私もそんな事を聞いたわ。妹は女の子だから無茶はされないだろうと思ってたら、無茶をされていて悪い事をしたって」

胸元を露出した夏らしいドレスを身に付けた少女が言う。いかにも今風の華やかな女の子で、彼女が恋人なら楽しい毎日が送れるだろう。

どちらを選んでも、親が裕福で、連れ歩くだけで羨望の的になるとびきりの美少女達だ。

アーソルドも「また」と言っていたように、前にも似たような事があった。

前回は二股がばれて泥沼になった。二股というか、イーリスが言うには二人とも大切な友人だったらしい。友人と言い切るぐらいなので、挨拶以上の口付けはした事がなく、節度ある距離を保っていた。

結局その二人は親にばれて、イーリスから引き離された。親からすれば、イーリスはただの呪い持ちの貧乏人だ。大切な娘を渡すわけにはいかなかったのだろう。

問題なのは、二股がばれてもその時の二人は引き下がろうとしなかった事だ。

先ほどの様子を見る限り、この二人もそうに違いない。

先手を打って出ようとしている大人しく見える方の美少女は、イゼアに優しげな笑みを向けた。

「イゼアさんだったかしら。せっかく楽しんでいたところを邪魔してしまってごめんなさいね。ジェラートはお友達が食べてしまったみたいだから、ぜひ新しいのを奢らせて欲しいの」

もう完食したのかと驚いて目を向けると、マナラが残したのか、アランがコーンごと完食しつつあった。

彼は実に幸せそうな笑みを浮かべており、何も言えなくなった。

「冷たくて美味しいな。初めて食べた」

「夏の名物だ。こっちの店は若者に、うちの近所の店は観光客に人気だ。しかし、お前の実家は夏場も暑くならないのか？」

「うちは冷たい物は死者の食べ物だって、食べさせてもらえない」
アーソルドは最後の一欠片を口に入れたアランの言葉を聞いて、目を見張った。
「それなのに、食べてもいいのか？」
「死者の領域でも温かい物を飲み食いするのだから、これほど無意味な習わしはないだろ。先祖の教えは大切だが、無意味なら従う必要はない」
死正殿で死正神官に温かいお茶を出してもらったイゼアは、その言葉に納得した。印を与えられた時に死んでいる彼らも飲んでいるのだから、無意味な思い込みである。それをアーソルドから聞いて、アランは冷たい物を食べてみる気になったのだろう。少しだけ、彼が普通というものに近づこうと努力しているように見えた。
「キミ、いい食べっぷりだねぇ。もっといる？　騒がせちゃったから、みんなまとめてお姉さんが奢ってあげましょう」
明るい方の少女が、アランに提案した。さらりと全員に奢ると主張している。
「あら、わたくしが出しますわ。どこのどなたかも分からない方に、ルフィルの若様と関わらせるなんて出来ませんもの」
しかし、イゼアにとっては二人ともどこのどなたともしれない相手だ。奢ってもらういわれはない。
「このサイズだと二種類盛ってもらえるのか。ならこれとこれ。あと、桃のを単品で」

言い争う二人の背後で、アランは自分の財布を取り出していた。そして二人の間を通り、イゼアの前に立った。
「ほらイゼア。食いたいんだろう。面白い物が見られたから、やる」
「……ありがとう」
彼の純粋な好意に甘える事にした。少なくとも、兄を巡って対立している二人のうちどちらかに奢ってもらうよりはずっとマシだった。
いつもなら他人がイゼアに施そうとすると、アーソルドは怒り出して自分が払うと言うのだが、多少むっとしつつも、さすがに何も言わなかった。
「アラン、あんたってほんっとにマイペースだね」
日傘を片手に、片手を腰に当てたマナラが、呆れたように言った。
「ん、マナラもまだ欲しいのか？」
アランは大きなジェラートを手に、首を傾げた。
「で、でしたら、座っていただきましょう。イゼアさんとは、ぜひゆっくりとお話をしたいと思っていましたの」
イゼアは手を引かれて、二人の美少女を見た。
「えっ、いや、そのっ」
「まあまあ」

助けを求めようと振り向くと、マナラは天馬に腰掛けて遊んでいた。その微妙な笑顔は、見捨てる気満々だった。

仕方なく今度はアーソルドに目を向けた。すると彼は一瞬身を強張らせ、イゼアを凝視した。だめかと思った瞬間、彼は勝ち誇ったように笑った。

「お前達、イゼアには仕事がある。今日も仕事の買い出しで来たんだ。邪魔をするな」

そう声を掛けた瞬間、二人はアーソルドに冷たい目線を送った。仲が悪かったのに、同時にだ。

アーソルドは一瞬たじろぎ、しかしすぐに気合いを入れて前に出た。

「お前達、イーリスの女なのか？」

その問いに、二人は一瞬固まった。

「女だなんて、そんな……」

「とっても深い関係よ」

二人は目を合わせないが、しかし互いに互いを激しく意識し、牽制しているのが端から見ても分かった。

この様子では、自分が本命である自信がないのだろう。そうでなければ、あれほど必死にはならない。

イーリスのタチの悪さに、イゼアはまたかと天を仰いだ。

そんな二人を見て、アーソルドも過去の修羅場を思い出したのか、ため息をついた。
「面倒臭いからまたあの手を使うか」
心底面倒臭そうに言って、一同を見回した。
「あの手とは何だ？」
ジェラート片手にアランが問うと、アーソルドは大仰に頷いた。
「もちろん、話し合いだ」
「話し合い？　普通だな」
アランのもっともな言葉を聞いて、アーソルドは分かっていないとばかりに笑う。
「ただの話し合いじゃない。関係者全員集めて、イーリスの逃げ場をなくし、どちらがいいか選ばせるんだ。貢がせるにしても、せめて一人に絞らせないと醜聞が立つからな」
「もう十分立っていないか？」
「それは言うな」
二人のやりとりを聞いて、少女達は向き合い、笑みを交わした。
「そう。それは分かりやすいですね」
「そうねぇ。まぁ、イーリスが私を選ぶのは確実だけど」
今この瞬間から、どちらがイーリスに相応しいかという、激しい女の戦いが始まった。

3章　太陽の因縁

そして話し合い当日。

イゼア達は理解出来ない事態に、頭を抱えた。

「なんか一人増えてるし！」

昨日出会った二人の他、どこから聞きつけてきたのか、もう一人知らない少女が参戦していた。

本当はイゼア達はこの話し合いに参加する予定はなかったのだが、昨日の当事者という事で、アーソルドに無理やり連れてこられたのだ。おかげで着替える間がなく、作業着のままだった。イゼアだけならともかく、マナラとアランまで連れてきているから、アーソルドも堂々としているように見えて、実は相当心細いのだろう。

「ああ、君達だったのか」

最後にやってきたのは、リリアをエスコートするイーリスだった。リリアはいつもよりも念入りに化粧をして、身に付けているドレスも新しいものだった。イーリスは普段から洒落てい

るので、別段変わらないように見えた。
　そのイーリスは、少女達を見て朗らかに微笑んでいる。彼の態度からは、修羅場である自覚がないようにすら見えて、この場を用意したアリセレスとアーソルドは、顔を見合わせてため息をついた。
「どうしてこんなところまで父親に似たのかしらねぇ。イゼアはこんなに奥手なのに」
「申し訳ありません。こればかりはもう呪いとしか……」
　アリセレスの嘆きに、リリアが申し訳なさそうに答えた。
　そんな親たちの反応を見てから、イーリスは少女達に尋ねた。
「ところで、イゼアを取り合っていたらしいけど、一体どうしたんだい？」
「えっと、その……」
　昨日の二人は目を逸らした。
　まさかイーリスと間違えました、とは言えないのだろう。
「ほほほほ、本当にどうやって妹さんとイーリスさんを間違えたのかしら。髪の長さは似ていらっしゃるけど、同一人物には見えないじゃない。失礼な方達ねぇ」
　昨日は踵の高いブーツを履いていたとはいえ、言い訳出来るのは遠目から見た時までだ。
　まったくもってその通りだとイゼアは頷きそうになったが、それを言ったのは昨日いなかったはずの少女だったので、何とかとどまった。新顔の彼女は、金の巻き毛と、それがよく似合

う少女趣味の、可愛らしい女の子だ。いかにもお金持ちのお嬢様といった、フリルとレースだらけの派手な白いドレスを身に付けている。

「ハリエット、今日も素敵なドレスだね」

「まあ、有り難う」

ハリエットと呼ばれた少女は頬に手を当てる。彼女が少し動くと、ドレスに縫い付けられたビーズがきらきらと光った。

「セリーナとメリルも、今日は一段と可愛らしいね。やっぱり有名な魔道貴族の邸宅に招かれると、気合いが入るのかな」

視線の動きから、セリーナが大人しい服装の正統派お嬢様、メリルが派手な今風のお嬢様のようだ。

「イーリス様、あの、そのっ、斜め後ろから見たらそっくりでしたの。ごめんなさい」

セリーナは恥ずかしそうに申し出た。

「斜め後ろ……」

イーリスはえらの部分に触れた。自分ではなかなか確認出来ない角度だ。

「それに、ジェラートをいえ……そうしたらこちらのメリルさんが」

「ふふん。イゼアちゃんがあのお姉さんとジェラートを分け合っているのを見て勘違いしたんでしょう？」

セリーナが口にするのをやめた部分を、メリルが暴露する。
それを聞いて、ハリエットが口元に手の甲を当てて、ころころと笑った。
「まぁあ、女の子の友人同士がお菓子を分け合うなんてよくある事を勘違いしたのぉ？　イゼアさんもいい迷惑でしたわねぇ。怖かったでしょう、お可哀相に」
話に巻き込まれたイゼアは、なぜ自分まで同席しているのかと、疑問に思った。これだけ人がいれば埋もれてしまうのではないかと期待していたのだが、やはり話の中心に巻き込まれてしまうのだ。
イゼアはもう既に退席したくなっていた。
しかしそれはイゼアだけではなく、提案した当のアーソルドも同様だったらしく、早く終わらせようとして口を挟んだ。
「なぁ、はっきりさせるために集まったのに、変な遠回りをしないでくれないか？」
アーソルドは当事者達の弁明を待つように腕を組んだが、沈黙が落ちた。
しばらくそれが続き、その苛立ちを悟ってようやくイーリスが口を開いた。
「はっきり？」
彼は当惑して首を傾げた。それを見てアーソルドも当惑し、イゼアに視線を送った。そんな目で見られても、イゼアだって困る。
「あの……何をはっきりさせるんですか？」

一番の当事者が、再びふざけているような事を口にした。アーソルドは自分を静めるように、目を伏せて訪ねた。

「……お前、何をどう聞いてここにいるんだ？」

「それがよく分からなくて。イゼアを取り合って争っていたっていうのは、窓口に来た近所の奥さんから聞いたんですが……」

イーリスは申し訳なさそうに言って、後ろ頭を掻いた。

「お前が、三股もかけてるのが悪いんだろう！」

イーリスはきょとんとしてアーソルドを見た。

「三股？」

「……付き合ってるんだろう？」

アーソルドが尋ねると、イーリスは眉間にしわを寄せた。

「アーソルド様、そんな言いがかりは彼女達に失礼じゃないですか。彼女達は僕の大切な友人達です」

「え、言いがかり？」

アーソルドは女達を見回した。彼女達は、微笑みながらも互いに互いを牽制し合うように睨み合っていた。穏やかなふりをして、目に見えない紫電を散らしている。

「……お前等、また誰一人として付き合ってもいないのか」

三人とも目を逸らし、誰も主張しなかった。彼女達の方にも付き合っていないという自覚があるようだった。

誰が本命という以前の問題だった。前回はまだ十代前半だったから、友人という主張もおかしくはなかった。しかし彼はもう大人と言っていい年齢だ。

「何か誤解があったのだと思いますが、彼女達はしっかりした家のお嬢さんだから、僕なんかと付き合っているなんて世間に思われたら、迷惑をかけてしまいます。もしもご両親の耳に入ったら、またきっとひどく叱られてしまいます」

前の修羅場の事を思い出したのか、イーリスは心苦しげに胸を押さえた。その姿を見て、睨み合っていた女達ははっとし、切なげに言った。

「そんな事ありませんわ、イーリス様。イーリス様のご先祖様は運が悪かっただけだと、わたくしは存じていますから。父もそのように頭の固い人ではありませんわ」

「そうよ。たまたま呪われただけじゃない」

「悪いのは嫉妬深い太陽神でしてよ」

最後のハリエットの言葉を聞いて、イゼア達は目を逸らした。

この前この屋敷には太陽神が降臨したのだ。まさか本人に聞かれていないだろうなと怯えながら、日の光で明るい窓の外を見た。

「ありがとう。そんなふうに言ってもらえるなんて、僕はなんて良い友達を持ったんだろう」

イーリスは友達と言い切って、嬉しそうに笑った。
「地元の人でも理解してくれない事があるから、本当に嬉しいよ」
三人はその笑顔を見て、頬を赤らめた。
見事に三人と関係を維持したまま、丸め込みつつある。
「なぜだ。なぜこれが通る!? なぜこの顔だけの男がこんなにもてる!?」
顔の良さではさほど差がないのに、あまりもてないアーソルドは、わなわなとふるえた。
そんなアーソルドに、マナラがささやき声で答えた。
「笑顔だろ。あと態度、口調、物腰、煌めく瞳。イーリスは何もかもが、女の心をくすぐる要素で出来ているね」
「お、お前だけはイーリスなんかに興味を持たないと思ってたのにっ！」
アーソルドは裏切られたような目をマナラに向けた。
「何言ってるの。見た目が綺麗で常識の範囲内なら、見てる分には害がなくていいじゃないか。私は見た目の良い男は好きだよ」
それはそうだとイゼアも頷いた。イーリスのような他人がいたら、騒ぎたくなる気持ちは理解出来る。彼は実の妹から見ても、誰彼構わず色気を振りまいているのだ。
「あの、イーリス様。わたくし、プレゼントをお持ちいたしました」
突然、セリーナがそんな事を言い出した。

昨日もプレゼントがどうこう言っていたので、それを持ってきたのだろう。
「わたくしの気持ちです」
差し出したのは男性用のブローチだった。その様子は楚々としながらも、まるで覚悟を決めて死地に立つ戦士のようでもあった。
「えっと、早めの誕生日プレゼントかな。ありがとう」
「いいえ、これは、わたくしの気持ちです」
高そうなブローチだった。胸元を飾るブローチは、常に彼女がイーリスの胸にいるようにという意味もこもっているのだろう。
「イーリス、私もプレゼントを用意したのよ。天馬に負けないプレゼントを用意しなきゃって、とっても張り切ったの」
「わたくしも用意いたしましたわ」
メリルとハリエットもプレゼントを差し出すと、さすがに物をもらいなれているイーリスでも戸惑いの表情を見せた。
イゼア達は彼等の関係に、ただ唖然とした。
普通、プレゼントを用意して求愛するのは男の方だが、彼女達は揃ってこのようにプレゼントを用意していた。
イゼアは普段兄が、どのようにして恋人にもならずに女性達に貢がせているのかが気になっ

てきた。

しかしそれを考える前に、イゼアはメリルの用意した指輪に目を引きつけられた。

その指輪からは、何とも言えない嫌な気配がしたのだ。何の気配であるか、気付くのさえ拒絶する、嫌な何かだ。

「イゼア、この指輪……心なしか、太陽神様の気配がしないか？」

アランがわずかに震えながら指輪を指さした。

「くっ、それかっ！」

現実を見たくなくて心が否定したのだが、これはまさしく太陽神の気配だ。

「太陽神様の気配？　でもこれは、ただの商人から買ったものよ」

メリルは目を丸くして指輪を見つめた。

「でも間違いなくラーハ様の気配が……なんで……まさかっ」

イゼアは自分の呟きで嫌な想像をし、マナラに視線を向けた。彼女の頬は引きつり、その目はひたすら指輪に注がれていた。マナラだけではない。ラーハがここに降臨した事を知っている全ての人間が、同じ反応をしていた。

「その指輪……見せてもらえるかしら」

アリセレスはそう言うなり、立ち上がってメリルの手の中から、指輪をさっと取り上げた。箱から取り出し、真剣なまなざしで指輪を調べた。

「見た目は普通。呪われているわけでもないわね。魔具でもないわ。けど確かに強い魔力は染みついている……それだけね。イゼア、見てくれる？」

何の魔力かまでは、アリセレスにも分からなかったようで、イゼアに託された。

触れるとよく分かった。ラーハに押し付けられた胸の印が疼いている。

「たぶん、太陽神に関係するもので間違いないかと思います。メリルさん、これをどこで手に入れたんですか？」

メリルは戸惑った様子で、不安げにイーリスを見た。

「イゼア、一体どうしたんだい？　その指輪に何かあるのかい？」

「先日、太陽神殿に泥棒が入り、宝物が盗まれたの」

女達の顔色も変わった。メリルは慌てて首を横に振る。

「これは昨日、プレゼントを探していたら、売りに来たのよ！　宝石も本物だし、素晴らしい物だったから買ったけど、まさか、神殿からの、選りに選って太陽神殿からの盗品だったなんてっ！」

メリルは狼狽して両手で口を覆った。大きな翠玉のような瞳が潤んでいく。

「泣かないで、メリル。君が悪いわけじゃないのは、みんな分かってくれているから」

イーリスはメリルの背後に回り、肩に手を置いて、片手で彼女の頭を抱きかかえた。

「大丈夫、どんな相手だったかよく思い出して、話してくれればいいんだ。対応したのが使用

人だとしたら、その人にも話を聞かないとね」

イーリスは優しくメリルに言い聞かせた。

彼は役所で他の女性の仕事の手が止まるという理由から、外部との接触の方が多い相談窓口に置かれているため、興奮した女性を相手にするのは慣れている。彼が窓口になって以来、クレームは激減し、女性が絶え間なくやって来るようになり、ある意味役所は平和になったという。

「あの、まだ盗品だと確定した訳じゃありません。ただ気配がするだけなので、ひょっとしたらただの移り香かもしれませんよ」

イゼアは自らの願望を語った。世の中、どんな偶然があるかも分からないのだ。調べてみなければ分からない。

「そうだね。ここで話し合っても埒が明かないから、まず先に神殿に問い合わせてみない？印持ちの太陽正神官が動いているようだから、情報ぐらい回ってきてるでしょ」

マナラが提案して、イゼアは力強く頷いた。胸に希望がわいてきた。

「そ、そうですよね！　万が一の時も、専門家に任せれば良いんですね！」

彼らは太陽神に選ばれたほどの神官達だ。きっと何とかしてくれるだろうと、胸に希望がわいた。

そうと決まると、アリセレスはすぐさま使いを出した。

出来れば違うと言ってくれる事を期待して、イゼアは待つ事にした。

◆◇◆◇◆

途絶える事なく吹き上げる噴水。その周りで遊ぶ子供達。歴史のある街並みに、水の気配の濃い、精霊に愛された美しい街。

「いい街ですねぇ」

そんな街を眼下に眺めながら呟いた。

彼がいるのは公園の見える、三階建ての神殿の最上階にある貴賓室だ。歴史ある街に相応しい、古めかしいがよく磨かれた調度品が、人の手を感じさせて心地良い。

「ええ、観光地でもありますからね」

案内の神官は、穏やかな口調で答えた。

彼は神殿の窓から見下ろす街並みを眺めながら、久しぶりの心穏やかな一時を過ごしていた。平和で、人々は善良で、観光客相手でも良い商売をしている。とても呪われた街などというあだ名が付いているようには見えない、美しく豊かな水の街だった。

「美しい川の流れを見ているだけで、俗世の些末な事は、全て洗い流されてしまいそうです」

清い水の流れの中、水精霊達が楽しげに遊んでいる。水精霊は女性型が多いので眼福だった。

「ははは……俗世から最も離れた太陽正殿にお住まいのあなた様が何をおっしゃるのです」
「それもそうなのですが」
この立派な神殿は、太陽神の神殿ではない。土地の少ない場所ではよくある事だが、様々な神を合祀しているのだ。このサマリドの場合は、水神と地神が人気で、他の神々はおまけだ。つまり水神と地神のついでに祀ってもらっているのだ。合祀されている場合、全ての神に専門の神官を置くのは難しいため、神官も兼業だ。太陽神に仕えていれば、その配下である月や星々の神、出産など生に関する神を、一人で担当する事もある。
この街では、合祀されている神々の中でも、太陽神は一番不人気である。
しかし、二度と関わらないでくれという意味では、人々にしっかりと祈りを捧げられているようだ。
そんな街に太陽正殿から印持ちの正神官が来るなど、不吉な事だろう。
「しかし盗人とは……逃げ込んだのがこの地方でない事を祈りますよ」
神官は額に手を当てて嘆いた。もしも、また太陽神が何かしでかしたら。そんな恐怖を抱いているようだ。他の神官達も、中の様子が気になるらしく、ドアの外に何人も人がいる。彼等は気付かれていないと思っているらしいが、太陽正神官が生者の気配に気付かないはずがない。
「まぁ、盗人もラーハ様の怒りを買ったという事になっているここには来ませんよ。ラーハ様ご本人はすっかり忘れてますけどねぇ」

彼は軽く笑って、冷たいジェラートを口にした。
このように気軽に外に出たのは、どれほど前の事だったかと、過去に思いを馳せた。
彼がこの街の調査をする事になったのは、偶然ではない。
こんな曰くのある場所に、太陽神の宝を持って来るはずがないと神官全員の意見が一致し、公平に決められた。
「ファルシス様」
名を呼ばれ、ファルシスは顔を上げた。
「どうしました」
誰かが挨拶に来たのだろうかと思い、手にしている桃のジェラートを心配した。手早く済ませて帰るか、これを食べきるまで待ってくれないだろうかと、心の中で迷った。
「買い取った指輪から、太陽神様の気配がするとルフィル家の使いの者が来ております」
手の中から、ジェラートが滑り落ちた。
当たりを引いたと思っていた。
ある意味、ここは本当に当たりなのかもしれないと、心の中で涙を零した。

◆◇◆◇◆

やって来た赤毛の神官を見て、イゼアは訝しんだ。
見た事のない法衣を身に纏い、装飾も幾分派手だった。法衣と同じ色合いの大きな帽子と、丸眼鏡が印象的だ。
そして、ラーハに近い神聖な気配がするのだ。
「……まさか、ラーハ様の正神官？」
イゼアが呟くと、皆青ざめた。いきなり正神官が来るとは考えてすらいなかった。
「君は……あれ？」
彼はイゼアを見て首を傾げた。彼が持つラーハの気配がイゼアにも分かるぐらいだから、中途半端なこの印でも、彼にはイゼアがラーハの印を持っているのは分かるだろう。
彼はラーハとは似ても似つかない穏やかな雰囲気の背の高い知的男性だった。一見すると、とても頼り甲斐があるようにも見える。
ただし、両手いっぱいの食べ物を持っていなければの話だ。
彼はじっとイゼアを見つめ、手にした焼蝦串を平らげてから言う。
「ああ、女の子なのか」
そこに悩んでいるとは思わず、イゼアの顔が引きつった。
「そうですが、それが何か……」
「死神官からはアンセムにいると聞いていたし、可愛らしい女の子だって聞いていたから、予

想と違って一瞬驚きました」

可愛くなくて悪かったなと、もしも相手が偉い神官でなければ詰め寄っていたところだ。

「確かアンセムには男装してる有名な魔道士がいると聞きましたが、今は男装が流行ってるんですか？」

穏やかな笑みを見て、イゼアは目を逸らした。

「別に……」

彼はきょとんとイゼアを見下ろし、すぐに話題を変えた。

「ああ、そうだ。初めまして、私はファルシスです。君はイゼア＝ウィーゲムで間違いないね？」

「はい」

イゼアが肯定すると、彼は袋に何も刺さっていない串を入れて、別の串を取り出した。今度は塩焼きした川魚だ。

死神官達がどのようにイゼアの事を太陽神官に話したか、少し気になったが、とても聞きにくい状況だった。

「君がいるって事は……ラーハ様の気配っていうのはやっぱり本物……なのか」

川魚にかじり付きながら、彼は肩を落とした。

「そんなにお腹がすいているなら、食べ終わってからでも」

「大丈夫です。食べてないと落ち着きませんし」
食べていられると落ち着かないのはイゼア達の方だ。
しかしそれでは話が進まないので、仕方なく彼の姿を見ないように話を進めた。
「気配は感じるんですが、盗まれた宝物かどうかという自信がありません。ただ気配がするだけで、今回の事とは何も関係ないただの指輪の可能性もあります」
「そうですね。そういう可能性もまだ残されているんですね」
探しているはずの彼は、なぜかそれが目当ての盗品ではない事を祈るかのように言った。
「現物はどちらですか」
「……こちらですわ」
さすがのアリセレスも不審そうな目をしながら、箱に入った指輪を差し出した。ファルシスは恐る恐る指輪を覗き込み、絶望するかのようなため息をついた。
「残念ながら、間違いなくラーハ様の宝物です」
「え、残念なのですか？」
アリセレスは驚いて聞き返した。
「いえ、私達はこの街が一番可能性が低いと予想していたので。まさかここで売りさばこうとするとは思っていなかったんですよ」
彼は苦笑しながら肩をすくめた。

ちゃんと食べる暇がないほど必死に探していたのだとイゼアは思っていたが、どうやら違うらしい。

彼が抱えているのは、どれもこの街の名物ばかりである。

「せっかくジャンケンに勝ったのに」

「は？」

ほとんど全員の声が揃った。ファルシスは皆の冷たい視線を受けて、慌てて首を横に振った。

「いえ何でもありません」

彼は誤魔化すように、指輪を掲げて見せている。

「それに、見るまで気配を感じませんでした。どうやら予想以上に上手く封じているようです。封印を外してみましょう。そうすれば多少魔力があれば、この指輪が特別であるのが感じ取れるようになります」

ファルシスがそう言って指輪に触れると、ラーハの気配がはっきりと分かるようになった。

「本当に神官だったのか……」

アーソルドが失礼な事を口にしたが、誰も彼を咎める事はなかった。

触れるだけで封印を解くなど、並の人間には不可能だ。彼に実力があるのは間違いない。

これで焼き魚を片手にしていなければ感心していたところだが、彼の行動を見ると、どうしても認めたくなくなる。

「それで、これはどちらで手に入れたのですか？」
「この人が」
イゼアは青ざめながらも黙って聞いていたメリルを指さした。彼女はぎゅっと胸の前で拳を握りしめて、一歩前に進み出た。
「顔見知りの商人が持ち込んだ物です。今どのように仕入れたのか、調べさせています。でもまさか、太陽神様の宝物をこんなところで売買しているなんてっ……」
そう言って、彼女は悔しげに唇を噛んだ。
彼女達はファルシスを呼び出す前に、外で待ち構えていたそれぞれの護衛達に何か命じていた。
「メリル、そんなに落ち込まないで。いつも元気な君にそんな顔をされると、僕まで悲しくなってしまう。君は笑っている顔が一番素敵だよ」
「イーリス……」
イーリスはメリルの肩を抱き、安心させるように微笑んだ。彼はどんな状況でも、女性に対する気遣いを忘れない男だ。
イゼアはいちゃつく兄を無視して、指輪を眺めるファルシスを見上げて言う。
「今からルートを追って見つかるような人達が、ラーハ様の力を隠せるとは到底思えません。別の方法を考えた方が早いと思います」

イゼアは、自分の言葉の内容の意味にうんざりした。
「いやぁ、まいった。どうしましょうねぇ……」
印持ちが近づいても分からない封じられ方をしているなら、調べようがない。
ファルシスは大きくため息をついて、今度は別の袋から取り出した焼き菓子を食べ始めた。
彼が菓子をかみ砕く音だけが響く。
「マナラ……暇か？」
突然、予想外の声がかかった。驚いて振り向くと、そこには具神ゼイレムが立っていた。
間が悪いという言葉の意味を忘れてしまっている彼ですら、異様な雰囲気は感じ取っているように見えた。
「ゼイレム様……また魔動機ですか？」
呆れ顔のマナラに問われてゼイレムは頷いた。
緊迫した空気を読む事は出来ても、そこで遠慮しようという発想は、ラーハに感情を封じられている彼には出来ないようだった。
「あっ、そうだ。道具の事ならゼイレム様に一応聞いてみたらどうだ？　ひょっとしたら場所が分かるかも」
アーソルドの提案で、マナラが頷き指輪を受け取った。
「ゼイレム様、この指輪はラーハ様の神殿にあったものです。これ以外にも街の中にラーハ様

の気配が少しだけ染みついた道具があるかもしれないんですが、どこにあるか分かりません？」

問われて、ゼイレムはわずかに顔を顰めた。

ゼイレムがラーハの道具が他にあるという言葉程度で心を動かすとは思えず、イゼアは訝しんだ。彼が感情をわずかながらに示すのは、道具に関して、マナラに関してだ。

彼は自分の手元を見下ろした。そこには、彼が持ち込んだ魔動機がある。

「ゼイレム様、その魔動機は私が」

イゼアはゼイレムが持っていた魔動機を受け取った。すると彼は落ち着いた様子で、指輪を持つマナラと向き合った。

ゼイレムは魔動機を受け取る気配のないマナラの態度に、少し動揺していたようだ。

「騒がしくてすみませんね。今はちょっと状況がやばいんですよ。で、話を戻しますが、ラーハ様の気配が染みついた他の道具がどこにあるか分かりませんか？」

ゼイレムは視線を泳がせ、すぐに首を横に振った。

「道具の悲鳴は聞こえない。壊されそうになったら分かるかもしれない」

今のゼイレムは、道具の悲鳴や嘆きを、かろうじて聞き取れる程度にまで、力を封じられている。だから道具が悲鳴を上げていなければ、どこにあるか分からないのだ。

「つまり、道具にとって今は悲鳴を上げるほど危機的状況ではないと。まあ、お宝を大切にし

ない奴なんてそうそういないだろうしなぁ」
当てが外れ、マナラは肩を落とした。
「大変なのか？」
「とても大変です」
「……帰る」
「いえ、邪魔というわけでは」
マナラの言葉を最後まで聞く事なく、ゼイレムは消えていた。
手がかりはなく、仕事だけが増えた。
「イゼア、今のはどなただい？」
突然人が現れて消えたため、イーリスは怪訝な顔で尋ねてきたので、イゼアは少し迷ってから素直に答えた。
「……具神ゼイレム様。道具の神様だよ。昔色々とあったらしくて、今はラーハ様に力と感情を封じられてて、自分の信者の所に壊れた道具を持ってきて直してもらってるの」
「とても他人事とは思えないね……」
イーリスは、ゼイレムに強く共感したようだった。ラーハの被害者かつ、力を封じられているという点まで似ているので、同類のように感じてしまうのだ。
「しっかし、どうする？　そこまで完璧に神の気配を封じてたんなら、相手のところには、か

なり腕の立つ術者がいるって事でしょ。もっと人を呼ぶにしても、その間に逃げられるだろうし……」

マナラは指先を顎に当てて言う。

気付かれていないと思っているだろう、今が一番探しやすいはずだ。しかし、それには人手がいる。人手があったとしても、大勢が動くと気付かれる。

「ひょっとしたらもう逃亡してるかもしれないし」

「それだったら、まあこの街は安全になるって事だからいいだろ。一応検問を敷いてるけど、それで見つかればいいんだが……」

アーソルドはため息をついた。

「アーソルド様、精霊使って探せないんですか？」

「精霊避けぐらいしてるだろう。あれは精霊が気になる奴だったら、普通に私室にかけている事も多い。そんな場所をしらみ潰しに探せるか。犯人でなくても抵抗するぞ」

精霊というのはどこにでも入ってこられるため、秘密を盗み見されないようにする術や魔具がある。見られたくないから精霊避けをするのだから、抵抗を受けて当然だった。それをいちいち突破していたら、最初の方で手間取っているうちに逃げられる可能性がある。

「じゃあ、死霊術を使うか？」

突然のアランの提案に、この場が静まり返った。

「死霊術って、お前……」
「死霊術の補助にちょうどいい魔動機を、昨日マナラに直してもらったんだ」
その言葉を聞き、マナラが頭を抱えて後悔し始めた。
「死霊避けは、よっぽど出るような場所でなければ用意しない。それに死霊は太陽神の気配に敏感だ。弱い死霊を大量に使えば、短時間で見つけ出す事も不可能ではない。それに死霊は見える人間の方が少ないし、見える人間は死霊が通りすぎても珍しいとは思わない」
話だけ聞けば、とても良いアイデアのように思えた。
ただし、死霊だ。生きた人間で、死霊が好きなどという変人は、世の中広しと言えども死霊術師ぐらいだ。
そんな死霊を使うと言われ、まあ素晴らしいとはなかなか言えなかった。
「……君は、死霊術師ですか？」
ファルシスは驚いてアランを見つめた。
「そうだ」
「この街には、そんなに死霊がいるのですか？」
「水場には溜まりやすい。強い精霊がいるから危ないのはいないが、死神様の元に行けずにふらふらしているのはたくさんいる。それにお願いして、死神様の元へ案内するのと引き替えに協力をしてもらう。まだ一人では一度も出来た事はない大魔法だが、魔動機をいくつか使えば

成功すると思う」

その説明を聞いて、皆は顔を見合わせた。

死霊術の結果、死霊が増えるどころか、迷える魂が救われるのだ。街が綺麗になる。

「その年でもうそんな大魔法を？　すごいですね」

ファルシスはアランへと微笑みを向けた。

イゼアはさすが神の印を持つ神官だと感心した。普通なら嫌がる死霊術も、彼は自分達の対となる力として快く思っているように見えた。

「早くどうにかして、ゆっくりと観光をしたいです」

「……やっぱり観光してたのか」

「あっ」

アーソルドが白い目を向けて言うと、ファルシスは口元を押さえた。

「いやすみませんねぇ。四百年も神殿で顔見知りだけと暮らしていると、つい独り言が……」

それを聞いて、イゼアは首を傾げた。

「え、お休みの時は何をしてるんですか？」

「休みなんてありませんよ」

ファルシスは微苦笑を浮かべた。

「え、そうなんですか。ターラ様の所の神官は、みんな週休二日だって聞いたから、それはな

くても休みぐらいあるものだと……」
「しゅ、週休二日!?」
ファルシスは目を見開いて、イゼアの肩を掴んだ。
「何ですか、その優良企業みたいな待遇は！」
「え、その、人間の魂は、生きていた頃と違いすぎる場所にずっと留まるのはあまり良くない的な事を。新鮮な食料とか自分達で買い出しに行ってるそうです。お菓子とか、お茶とか」
「そんなっ……食料までっ!?　彼等だけは私達よりも大変だと思っていたのにっ！」
まるで信じていた相手に裏切られたかのように、ファルシスは打ちのめされたような顔をした。
「ファルシス様、そういうの覚悟して印をもらったんじゃなかったんですか？」
「それは太陽神官以外の正神官です。ラーハ様はふらっと全国の太陽神殿に現れては、能力的な意味で相性の良い人間を見つけて、勝手に印を与えるんです」
「えっ!?」
勝手に。
一方的に。
ラーハにとっては、何も説明しないのが当たり前だったのだ。だから当然のようにイゼアに印を与えたのだ。

「とは言っても滅多にないから、今は七人しかいませんがね」
危うくイゼアは八人目になるところだった。
「えっと……普段何をしてるんですか？」
「信者から何かを頼まれるか、ラーハ様のお呼ばれがあるまで待機しています」
「……仕事ないんですか？」
「雨乞いとかは風神様や水神様の管轄だし、太陽が昇らなくなる事なんてありえませんしねぇ。世界の終わりですよ。待つ事が仕事と言ってもいいですね」
彼は軽く笑って言った。
「五十年ぶりの外出で気を良くしていたのに……なにも私が担当している観光地に逃げ込まなくても……。せっかく楽が出来ると……いや、何でもありません」
「……まあ、早く解決して、好きなだけ観光と食事を楽しんでください」
さすがに哀れなので、イゼアはそれだけ言うと、アランを手伝うために魔動機置き場の広間に向かった。

◆◇◆◇◆

アランとアーソルドは地下室にある魔法陣の上に魔動機を運んだ。こういう古い魔道貴族の

屋敷には、当たり前のようにこういったものがある。滅多に使われていないのか、暗くじめじめしていた。

地下にやって来たのは、魔動機の設置をするためにイゼアとマナラ、案内としてアーソルド、そして術者としてアランだけだ。

他の者達は先ほどの部屋で待っている。特に太陽神の呪い持ちであるイーリスや、太陽神官であるファルシスが一緒についてきたら、死霊達は集まってこないそうだ。ただし、イゼアは死神の印も持っているので大丈夫だと言われた。

地下室の冷たい石の床には、魔法陣が彫られている。その中心に、祭壇として花台を置いた。

「祭壇は黒い布を上に掛けてから物を置いてくれ」

言われるがままに、持っていた黒い布をかけた。その台の上に水の入った杯（さかずき）と、魔道書を載せた。

「魔動機はもう動かしてくれ」

「アラン、これはどんな魔動機なんだ？」

「魔力を拡散するための物だ。自力だと屋敷一つ囲むのでも難しいが、これがあれば街一つぐらいどうにかなる。ちゃんとやらないと、肝心の情報を収集出来ないから、難しいんだ」

アーソルドに問われ、アランが楽しげに説明した。

「なるほど。魔力の拡散、つまり遠隔操作がしやすくなるのか。精霊に使っていたのかもしれ

ないな」

「たぶんそうだ。精霊も死霊も、操り方にそれほど違いはない」

「まあ、理屈上はなぁ……」

アーソルドが複雑そうに言った。

死霊も精霊も、肉体がないという共通点がある。それでも納得しかねるのだろう。

イゼアは祭壇の上を整え、マナラは魔動機の動作確認をした。アランは死神の聖印と、儀式用らしい細身のナイフを祭壇の上に追加した。

アランは祭壇の上を確認すると、魔法陣を見回して頷いた。

「配置はこれでいいか」

そう言うと、アランはナイフを手に取り、人差し指に刃を当てた。指を下に向けて杯の上にかざし、血が出やすいように親指で傷口を開く。血は指を伝い、少し伸びた爪の先に溜まり、ぽたりぽたりと滴った。

「よし、これで準備は完成だ」

そう言うと、アランは指先を口に含んだ。それを見たアーソルドは、その手首を掴んで自分の方へと引き寄せ、指先に手をかざす。どうやら治療しているようだ。

「アーソルド、本当に面倒見がいいな」

マナラは少し離れたところから、呆れ半分で仲の良い二人を眺めて呟く。

「ああいうタイプを見ると手を出しちゃうから、利用されがちなんですけどねぇ」
イゼアの事も、ああやって仕方がないとばかりに手を出しているのだ。それがどれだけ迷惑で苦痛であった事か。
「アーソルド、しばらくかかるが、見ているのか？　いるなら気が散るから一言もしゃべらないで欲しいが」
「いなくてもいいなら、僕は上で待っている」
「そうか。上でもあまり騒がないでくれ。害のない死霊達は、野生動物のように臆病だから」
「じゃあ僕はイーリス達のいる部屋で待っている。終わったら来い」
「分かった」
アーソルドを先頭に、アランを残して立ち去ろうとした時、
「イゼア？」
アランに呼ばれ、イゼアは振り返った。
「戻るのか？」
「え？」
「イゼアは死神様の巫女だから、いてくれた方が助かる。一人でやるのは初めてだから、出来るかどうか不安なんだ」
「えっ!?」

アランの黒い瞳にじっと見据えられ、イゼアは戸惑った。彼が術の事で不安を口にするのは初めてで、イゼアは助けを求めてアーソルドを見た。すると彼は顔を引きつらせて目を逸らし、無言で階段を上がっていく。一緒に残ってくれないかと一瞬でも期待したイゼアが馬鹿だった。

「イゼア、よかったらターラ様にもらった鈴を貸してくれないか」

「私持っていないから、部屋に取りに……」

「あ、私の貸してやる」

マナラはイゼアとは目を合わさず、エプロンのポケットから取り出した鈴をそっと祭壇の上に置いた。

「じゃあ、がんばるんだよ」

「ええっ」

イゼアは少し潤んだ目でマナラを見つめた。

「私は霊感もないし、魔力もないから、下手に関わるのは良くないと思うからさ。まあイゼアは大丈夫。お前は強い子だ」

「……」

「じゃ」

マナラは手をひらひらと振りながら、弟子を見捨てて階段を上っていった。上階のドアから伸びる光が細くなり、やがて閉ざされた。地下室には、アランが壁にかけた魔動ランプのみが

煌々と輝いていた。
しんと静まり返った地下室に取り残されたイゼアは、恐る恐る振り返った。アランと目が合うと、彼は笑みを浮かべて手招きをした。
「イゼア、結界の中に入らないと危ないぞ」
イゼアは慌ててアランの横に立ち、そのローブを握った。
「ここでいいの？」
「ああ。魔法陣の内側の円の中は守られるから、そんなに密着しなくてもいいぞ。しばらく無言でそこにいてくれ」
「分かった。目を瞑って、無言で座ってる」
イゼアは膝を抱えて座り、片手でアランのローブの裾を握り直して、顔を膝に伏せた。これで大丈夫だ。
「別に座ったり、目を瞑ったりしなくてもいいぞ」
「ターラ様の所では、ずっと目を瞑っていたから」
「そうか。なら、好きにするといい」
アランはそう言うと魔道書を開き、ぱらぱらとページをめくる。そして低く呪文を唱え始めた。
不気味な呪文を聞いていると、ひんやりとした床の石の間から、何かが出てきているのでは

ないかと想像してしまい、必死に他事を頭に思い浮かべた。

魔法は通常魔法と儀式魔法に分かれる。魔法といえば前者を指し、儀式魔法は少し特殊な魔法だ。アーソルドを呪術の実験台にしている呪術科の生徒達も、これに似た儀式を行っているはずだ。複雑な呪いになればなるほど、複雑な儀式が必要になる。目を瞑っているイゼアには分からないが、特殊な儀式が行われているはずだ。

「ん」

アランがわずかに身動ぎし、呪文以外の声を出した。

「イゼア」

「何？」

「この魔動機はとてもすごいな。本家のよりも強力だ」

「修理したばかりで中身は綺麗だし、魔動機用としては上質の魔石が入ってるからね」

「ああ、そうだな。まったく……」

妙にしみじみとした言い方だった。思わず顔を上げそうになったが、身体が硬直してくれていたので助かった。

今顔を上げたら、一生後悔するだろう。

そうやってイゼアが耐えている時だった。

「きゃぁぁあっ」

遠くから、この地下室にまで届く、絹を裂くような悲鳴が上がった。
「あ……アラン」
「ん？」
「何、この悲鳴」
「お前の兄の女の声……ん、別の悲鳴も混じった」
イゼアは泣きそうになった。顔を上げてはいけない。けっして、顔を上げてはいけないのだ。
「絶え間なく、どこからか誰かの悲鳴が聞こえるな」
「他人事のように……」
「密集していないから、別に害はないのにな」
さすがのアランも、少し気まずげだった。
しばらくすると悲鳴は収まり、イゼアはいつの間にかアランにしがみついていた事に気付いた。
元凶はこの男だが、今縋りつける相手は彼しかいなかった。
しばらくすると、上の階にある、地下室へのドアが乱暴に開かれた。
思わず目を開けて階段のある方を見ると、ちょうどその階段の辺りに、何か影のようなものがいくつも通りすぎた。
一瞬、心臓が止まりそうになったが、アランにしがみつく事で何とか堪えた。

「アラン、今、半透明な黒っぽい何かが、床から大量にわき出て外に出て行ったぞ！」
アーソルドの怒鳴り声と、階段を駆け下りる音がした。
「それは死霊だ」
「言われなくても分かっている！　あんなのが出るなら先に言えっ！」
イゼアは震えながら、階段を下りてきたアーソルドを見上げた。彼はイゼアを見ると、魔法陣の中に入ってきて、手を差し出した。
「イゼア、もうほとんどいないから離れろ！」
「ほとんど!?」
「いや、もういない」
「ほ、本当ですか？」
「本当だ！　ここにいないのなら、もう全部外に出て行った！」
イゼアは恐る恐るアーソルドに手を伸ばすと、強引に手を握られ、立たされた。
「ほら、上に行くぞ。まったく、男にしがみつくなんて、はしたない！」
イゼアはぶすりとして、強く手を握るアーソルドを見上げた。
彼は昔から、怖い事があるとイゼアに触れ、時に盾にしてきた。触れたがるという事は、彼はこう見えても強がっているだけで、実は怯えているのだろう。さすがに自分より弱者を盾にする事はなくなったはずだが、警戒しながら彼を見上げた。

「悲鳴が聞こえたんだから、一番近くにいる人に縋るのは、仕方がないじゃないですか」
「煩い！」
アーソルドは不機嫌を隠しもせずに怒鳴りつけ、アランに視線を移した。
「ああなるとは聞いていない」
「予想していなかった。効きすぎた」
アランは魔動機に目を向けた。剥き出しになった魔石が淡く輝いていたが、徐々に光が弱まっていく。
「魔力が拡散しすぎて、ちょっと感のいい人間になら見えるようになっているかもしれない」
「……は？」
イゼアとアーソルドの声が重なった。
「それは、魔道士には見えるという事か？」
イーリスの友人達は、魔道士ではないが、魔力はそれなりにあった。この屋敷に勤めている使用人は、それなりに魔力がある者ばかりだ。万が一の時は魔力を供給出来るし、魔力があれば勘が鋭く、有事にルフィル家に報告すべき案件かどうか、素早く判断出来る。
だから皆が叫んでいたのは、魔力が高いからという意味であると、アーソルドは願ったようだ。
「ひょっとしたら、よほど鈍感な人間以外には見えるかもしれない」

「街中に広がったんだよな？」
「そうだ」
アーソルドの顔が青ざめた。イゼアの手を、痛いほど握りしめている。
「難しい儀式だから万全を期したが、イゼアの協力はいらなかったかもしれない」
「えええっ!?」
我慢して儀式に付き合ったのに、あの恐怖にまったく意味はなかったのだ。
「どうするんだっ!?」
「これを持ち歩けば、結界外でも死霊の様子は分かる」
アランは先ほど光っていたのとは別の、持参した魔具を見せた。
「様子は分かるって、制御は？」
アーソルドは、恐る恐る尋ねた。
「目標が達成するか、夜になるまではがんばってくれるぞ」
「昼間から、死霊ががんばるのか!?」
「死霊に肉体はないから、目先で灰になる事はないし、生者の生活に顔を出すのが好きだからな。つまり宝物が全て見つかるか、夜になったら成仏するから安心しろ」
「安心出来るか！　まさか、ひょっとしてまさか、まさかあれが街中に!?」
「出ているな。探しているんだから。他に売られているかもしれないし、目標数がはっきりし

ていないから、消えるのは夜になるだろう」
アーソルドは血相を変えてイゼアの手を引いて、強引に引っ張り階段を駆け上がった。

◆◇◆◇◆

「……うわぁ」
慌てて装備を調えて屋敷の外に出ると、各家屋から聞こえる悲鳴に皆は頭を抱えた。
さすがに太陽がさんさんと照り付ける路上には現れていないが、太陽の光が届いていない場所を中心に、死霊達は出現しているらしかった。
ついてきたイーリスと少女達も、街の騒動を見て唖然としている。
焦っていないのはファルシス一人だけだった。
「わ、若様っ、これは何なんですかいっ!?」
通りすがりの街の住民に問われ、アーソルドは言葉に詰まった。とても死霊ですとは言えない。もしも素直に言ってしまえば、サマリドは未曽有の混乱に陥る事になる。
「こ、これはだな。そ、そう、闇の精霊（みたいな物）だ！」
闇の精霊の後、小声で「みたいな物」とつけていた。
確かに似ているには似ている存在だ。似て非なる存在だが、似ていないとは言い切れない。

素人どころか、魔道士でも闇の精霊を見た事がない者は多いので、知っていなければ見分けがつかないはずだ。

闇と光の精霊は、珍しい事で有名だ。闇は暗くて見えないし、光は眩しくて見えない。そんな場所に、保護色で隠れるように存在するから、相手がそこから出てこないと見る事は不可能である。

「や、闇の精霊？　なんでそんなものが」

「こ、この街のどこかに、太陽神の宝物を盗んだくそったれ共がいるんだ。またラーハ様がお怒りだ！」

「な、何だって!?　ここに、また太陽神の怒りが向いてるって事ですか!?」

「そうだ。皆に荷物を抱えてこっそり逃げようとする奴がいたら捕らえるように伝えてくれ！」

それだけ言うと、アーソルドは人々の様子をざっと見てから、走り出した。

「アーソルド様、どこへっ」

イゼアが後ろから声を掛けると、彼は足を止める事なく、首だけ後ろに向けて答えた。

「広場だ！　あそこは風が抜けるからやりやすい！　こうなれば手段は選ばない！」

アーソルドは他人の事を考えず、全力で走っていった。イゼアは足が遅いわけではないが、全力疾走する男に追いつけるほど速くはない。まともに追いかけていったのは、アランだけ

だった。彼もやや離され気味だが、学院で身体を動かす授業を受けている分、皆よりも体力がある。

「いやぁ、若いっていうのは素晴らしいものですね」

小走りでついてくる、全力疾走するつもりすらなさそうなファルシスが手を叩いた。相変わらず食べ物を腕に抱えている。

「ファルシス様は走って追わないのですか？」

イーリスに問われ、ファルシスはにっこりと笑う。

「いやぁ、長く神殿にこもっていると、どうにも体力が……普通の人間だった頃はがんばっていたんですけどねぇ。どうしてこんな事になったのやら……ああ、すみません。いやですねぇ、歳を取ると愚痴っぽくなってねぇ」

ファルシスはため息をついた。見た目は二十代半ばと若々しいのだが、どこか疲れた雰囲気だった。

イゼアはその姿を見て、恐る恐る尋ねた。

「あの……普段、何をして過ごしてるんですか？」

「本当は言わない方がいいかもしれないんですけど……君は他人事じゃないですからねぇ……」

ファルシスはため息をつきながら、先ほどとは別の菓子を手にして言った。

「一番多いのは、昼寝かな？」
「ひ……昼寝？」
「印のおかげで滅多な事では死なない身体になっているから、一月ぐらい起きない人もいますよ。私は食べないと持たないからそこまで出来ないんですが」
イゼアは激しく動揺した。
「……え、四百年、ラーハ様が何かしない限り、ずっと？」
「滅多にありませんが、外部から要請があれば動きますよ。今回の宝物貸し出しのように。しかしこれでまた、依頼の頻度が下がるんでしょうねぇ」
ファルシスは退屈しのぎになる仕事が減る事を嘆くように肩を落とした。
「若い頃はもう少しがんばって正神官らしく振る舞おうとはしてみたんですけどねぇ。無理なんですよねぇ、何もする事ないですから。食事は質素ですし」
話を聞いていると、イゼアは寒気がしてきた。
「死神官みたいに、仕事がある方が生き甲斐があって、よっぽどマシじゃないですか？」
「そうなんですよね。なのに生の象徴であるラーハ様のお膝元で、生きる気力が削がれていくって、どういう事なんでしょうねぇ。ターラ様の所は死んでるくせに、あんなにも生き生きしてるっていうのに、私達は……。ああ、イゼアがもしも決断しなければならなくなった時は、迷わずターラ様の所に行った方がいいですよ。ダラダラしすぎると、人間ってだめですよ。他

所から人が来ると嬉しくなってねぇ。最初の頃は宝物を見て浮かれていたけど、十年もするとどんなに綺麗な物も飽き飽きしますし」

「そうですか……」

「はっきり言って捧げられたから置いてあるだけで、ラーハ様にとっては道ばたの石ころよりは価値があるぐらいの、どうでもいい物なのに、なんで今回に限って直々に動かれるんだか……」

イゼアははたと、自分のせいではないかと考えて、目を逸らしそうになった。

ひょっとしたら、無意識に何かまずい事を口にしていたのかもしれない。神官達が可哀相だとか。

イゼアが神官を思いやっているターラに感動したのは確かだ。ターラも散々説教をしていた。そんな些細な積み重ねが、ラーハに不要なやる気を与えてしまった可能性がある。

段々と、死者の領域に連れて行かれたあの一幕が原因だったのではないかと、不安になってきた。

考えれば考えるほど不安になっていたその時だった。

『皆、僕はアーソルド＝ルフィルだ！　聞いてくれっ！』

思考を遮るように、アーソルドの声が風に乗って届いた。

◆◇◆◇◆

アーソルドは広場を見回した。ここは川中にある一番大きな公園の広場だ。休日にもなると家族連れや恋人達や観光客で賑わうが、今日はいつもとは違い、人々は不安げにざわつき、子供は泣き、女達は男に縋りついてた。おそらく死霊を見て、逃げてきた人々が自然と集まったのだろう。

アーソルドが姿を見せると、彼等は一斉に詰めかけてきた。囲まれる前に噴水の前まで走り、縁に上る。

「説明するから少し待て」

住民達はアーソルドの言葉を聞くと、説明を求めるように、行儀良く距離を置いて二人を囲んだ。物分かりのいい住民ばかりで助かった。

アーソルドは住民達を見回しながら、風の精霊を集めた。

「よし」

そこらに漂っていた風の中級精霊達は、アーソルドに呼ばれて笑っていた。彼等はとにかく気まぐれ屋だが、どうやら今日は協力してくれそうだった。遠くまで声を飛ばしたいので、彼等の積極的な協力が必要だ。

「アラン、どうだ？」

「いくつか見つけた。少量ずつ、バラバラの場所だから、やはり他にも売られているんだ。まとまった宝物があるところはまだ見つかっていない」

しかし見つかるのは時間の問題だろう。

「ここ最近、強い力を持つ何かがいくつか街に入ってきたけど、出ていってはいないらしい。突然現れて消えたのもいたらしいが、それはきっと太陽神本人だから問題ない」

その情報を誰にどうやって聞いているのか気になったが、アーソルドは彼の言葉の意味だけに集中した。

そして目を伏せて考える。

「アーソルド様っ、さっきの変な黒いのは、太陽神に関係あるんですかっ!?」

アランの口から出た『太陽神』という言葉に怯えた住民が、アーソルドに説明を求めて声を上げた。死霊と太陽神。これを過剰に怯えさせないように、良い方向に持って行けるよう説明しなければならない。死霊については先ほど咄嗟に口から出た嘘が有効だ。違う事が分かる人間はいるだろうが、わざわざ違うと吹聴する空気の読めない上に頭の悪い人間は、見分けがつくような優秀な魔道士になどなれないだろう。だから問題は太陽神だ。

アリセレスは現場指揮に向かったので、頼る事は出来ない。

もしもここに父がいたら、きっと誰よりも上手く住民達に説明が出来たはずだ。彼の父は生まれは他所の人間だが、住民達からは信用されている。生まれも育ちもこのサマリドのアーソ

ルドは、父並みに、父以上に信用されているはずだ。
信頼されていなければならない。
だから大丈夫だと自分に言い聞かせて、声を張り上げた。
「大丈夫だっ！」
広場に集まる皆に声を掛ける。それは自分に対する言葉でもあった。
アーソルドは人々に声を届けるため、精霊に頼んだ。
「精霊達、僕の声を街の隅々まで届けて欲しい」
魔力を漲らせ、扱いの難しい風の精霊達に分け与える。すると彼等は喜び、応と答えた。高度な術になるとアランのように魔動機を使わなくてはならなくなるが、一方的に声を届ける程度ならこれで大丈夫だ。
「皆、僕はアーソルド＝ルフィルだ、聞いてくれっ！　今見えている黒っぽいのは恐れなくてもいい。僕の友人が放った、闇の精霊のようなものだ」
声を響かせているので、大声で話す必要はないが、緊張しているのか普段よりも声を張り上げていた。ただし「ような」の部分だけは思わず小さくしてしまった。
人々がほっとする様子を見ながら、心の中で闇の精霊達に謝罪してアーソルドは続ける。
「騒がせてしまって申し訳ない。故あっての事だ。実は先日、太陽神殿に賊が入り、大量の宝物が盗まれた。そしてあの太陽神が宝物を探して当家の屋敷にご降臨された」

人々がざわめく。太陽神という言葉は、この街ではあまり良い意味を持たないので当然だった。

「今、その賊がこの街のどこかにいるらしい。これは街全体に関係する事だ。落ち着いて、よく聞いて欲しい」

さらにざわめいた。アーソルドは自分自身をその言葉で落ち着けようと、胸に手を置いた。

「実はその時、太陽神様から、盗人と盗人を匿う者ごと全て焼き滅ぼすとの御託宣を賜った」

こう言えば、皆さすがに慌てるはずだ。死霊が見えてしまった時点で、密かに探査するという、当初のもくろみは外れてしまったのだ。だったらこうして、皆が協力せざるを得ない風向きを作ればいい。

これは好機でもある。

ウィーゲム家は太陽神に許されている。しかし、印の事を人々に広めるわけにはいかない。だったら、別の方向から許されたと皆に知らしめればいいのだ。

太陽神が直々に動いているこの案件こそ好機だった。

「だからこの街を守るためにも、盗人を捕らえるため、街を封鎖する。賊は既にここでかなりの数の品物を売りさばいている。すぐに焼き滅ぼされる訳ではないから、落ち着いて、怪しい者……荷物を抱えて出ていこうとする者がいれば、皆で確保してくれ！　今荷物を抱えている者は、動かずにいてくれ。とにかく、怪しい者を街から逃がしてはいけない！　主な道は封鎖

しているが、人手が足りそうにもないから、皆で裏道を見張って欲しい。ああ、便乗して窃盗を行う者が出るだろうから、気をつけるように」

このせいで別の犯罪が引き起こされたら意味がない。

「これから、宝物の回収に回るから、買い取ったりと、心当たりのある者は下手に動かずじっとしているように。もし外に出ているなら、宝物の元に帰ってくれ。返金についての事は、後で話し合う！　焼き尽くされたくなければ言う通りにしてくれ。商談などで穴をあけられなくても、従ってくれ。相手には必ずうちと神殿でフォローする！」

もう一度、言い忘れた事がないか考えて、口を開いた。

「とにかく、騒がず、落ち着いて、子供達は大人から離れないように。怪しい者が逃げようとしない限りは、暴力はなしだ！　善良な人々が血を流しては意味がない！　皆で平和的な解決を目指そう！」

それだけ言うと、アーソルドは魔力を収めた。

ふぅと息をつくと、広場にいた男達が集まってきた。

「若様、今の話は本当ですかい？」

「本当だ。今、太陽神の印持ちの正神官様もイゼアと一緒にここに向かっている」

「俺達はどうすればいいんですかい」

「動いてくれるなら、さっき言った宝物と持ち主の回収に向かって欲しい」

「持ち主もですか？」
「宝物の気配が染みついて探査の邪魔になるかもしれないんだ。太陽神様の気配だから、決して悪いものじゃないから、その点は安心してくれ。今場所を割り出してもらっているところだ」
アランは地面に座り込み、いつの間に手に入れたのか地図を広げて、その上にペンダントをかざしていた。先端についているのは水晶のようで、地図の上を滑るように移動させる。
「アーソルド、ここ、どこだ？　ここの高い所にある」
「それで分かるのか？　なら最初からそうすれば……」
「宝物じゃなくて、呼び声の場所を調べているから」
死霊の呼び声がする場所を、特定するためにやっているようだ。ここでアーソルドが動揺して、万が一にも死霊だと住民達が知れば未曽有の混乱を招く。表向きだけでも気にしないふりをするために、死霊について考えるのをやめた。
「なるほどそこはホテルだな。誰か川東のリバーサイドホテルに確認に行ってくれないか」
「あ、そこのホテルは兄貴が働いているから、俺が行きます。今の声、街中に届いてたんですよね？」
「ああ。僕の名を出せば無茶も聞いてくれるだろう」
その間にもアランは探査を続ける。

「ここ。動いているから、誰かが身に付けているんだと思う。」
「宝飾店だな。誰か、頼める者はいないか？」
「ああ、そこならこの前行きました。旦那に指輪を買ってもらったんですよぉ」
「そうか。危ない事はないと思うが、誰か男もついて行ってやってくれ」
「あ、じゃあ俺が。奥さんにはいつも買ってもらってるからねぇ。おお、チビ、お袋さんを俺が守ってくから、お前はうちの屋台を守ってろ。食うなよ、守ってろよ。留守番だ」
と、広場に店を出していたジェラート屋の店員が言う。この時期はよく売れるので、休日には出張販売を行っているのだ。アーソルドも小さな頃に、イゼアとベンチに座ってよく食べたものだ。イゼアはこれが好きで、たまに買ってやると本当に喜んだ。珍しく素直に笑ってくれて、とても可愛かった。その笑顔が今でも忘れられない。
思い出の詰まった生まれ故郷に、ろくでもない物を持ち込んでくれた盗人達を許す事は出来ない。

4章　太陽神に呪われた街

「イゼアちゃん、今の本当っ!?」

アーソルドの演説を聴いて、呆然としていたイゼアに、近所の男の子が声をかけてきた。昔アーソルドと一緒に遊んでいた近所の悪ガキだ。今ではすっかり落ち着いて、格好いい男の子になっていた。

さすがに小さな頃からの付き合いだから、迷わずイゼアの名を呼んでくれた。イーリスは薄汚れた作業着など着ないし、二人一緒にいるからかもしれないが。

「だいたい合ってる。もし怪しい人を見たって人がいたら、ルフィル家の人や役人に伝えて。あと宝物泥棒が潜伏しているかもしれないから、人気のないところで子供や女の人を一人にしないでね。でも日陰だとさっきの黒いのがいるから逆に安全だと思う」

「ああ、闇の精霊だっけ。アーソルド様が学校の友達を連れてきたって聞いたけど、やっぱり同業者となると付き合う相手もレベルが高いんだろうなぁ」

イゼアは思わず目を逸らした。

まさか死霊術師だとは言えない。

「俺、みんなに話して路地裏を見張ってくるよ。こんな状況じゃ遊ぶなんて無理そうだしさ」

「お願い。でも警備の厳重な場所から盗み出したような人達だから、見つけたら無茶しないで、人を呼んでね。魔道士がいるかもしれないの」

「ああ、分かった」

足を止めていたイゼアは、再び走り出した。

それから何度か、近所の人に呼び止められては簡単に説明した。アーソルドの説明を聴いて、特に混乱していないのでほっとした。川東には当主であるアリセレスが向かっているから、彼女が行けば落ち着いてくれるはずだ。

イゼア達が広場に到着すると、アーソルドが人々に囲まれていた。彼は問い質されているのではなく、指示を与えているようだ。

売られた人達から回収する分には危険はないはずだ。そうして街に散らばった気配を集めていけば、厳重に隠されていても見つけやすくなるだろう。

「この様子じゃあ、私達は必要ありませんねぇ」

のんびりとファルシスが言いながら公園の噴水広場を見回し、近くにあるワゴンに目を向けた。

「おや、ジェラートが売っているね。僕、留守番かい？　店の人は？」

「えっと、オレの母さんと行っちゃって、オレが任されてるんだ！」
「それはすごいねぇ。じゃあこれをいただこうか」
「いいよ」
イゼアはその後ろ姿を眺めて、やるせなくなった。
「イーリス様、正神官様って、変わっておいでですね」
「本当にそうだね……」
セリーナの言葉に、イーリスだけでなく、他の二人の少女も頷いた。あれの主に呪われて大変な思いをしているため、皆、複雑そうだった。
イゼアは買い物を始めたファルシスは無視する事にして、噴水近くにいるアーソルドの元へ足を向けた。
「アーソルド様、どうです？」
イゼアが声を掛けると、腰を落としていた彼は立ち上がった。
「大きな反応がする場所には人をやった。これで街中から宝物を排除すれば、アランの死……友人が見つけてくれる」
死霊と口にして、もし誰かに聞こえたらパニックになるのは間違いないため、アーソルドはなんとか呑み込んで言い直した。
「本当にこんなに騒ぎを大きくして、大丈夫でしょうか？」

イゼアは無茶をする人がいないか不安でならなかった。特に若い男は、格好つけて無茶をする。

「大丈夫だ。皆を信じてやれ。ここまできたら、数で何とかするのが一番手っ取り早い」

「……そうですね。あれだけ言えば無茶はしませんよね」

イゼアが呟くと、アランがおもむろに顔を上げて、手招きした。

「アーソルド、橋で反応するぞ」

「は？　橋を移動しているのか？」

「いいや、動かない。ここだ」

アランは地図を指さし、アーソルドは再びアランの隣に膝をついてしゃがみ込んだ。

「一通り調べたから、念のためにもう一度調べたんだ。そうしたら最初のホテル……リバーサイドホテルだかの付近にある橋の辺りで反応があった」

アランは他の場所も調べているが、明らかに橋の辺りで垂らしたペンダントが大きな反応を示した。

「ホテルにあった反応は川から離れつつあるから、さっきの気配と混同しているという事はないと思う」

「橋……川の中か……これは人に頼みにくいな。僕等で見てくるか」

人に頼みにくい。今は夏。幼い頃の思い出。

イゼアは恐ろしい予感に襲われて後退した。
「行くぞ、イゼア」
「わっ、私もですか？」
「当たり前だ。お前等も動いているところを、皆にちゃんと見せないと」
と、彼はイゼアと、後ろについてきたイーリスを見た。
「……やっぱり僕もですか？」
「当たり前だ。イゼアよりも、お前が動くのが肝心なんだ」
「そ、そうですよねぇ……」
イーリスは困ったように腕を組んだ。
「でも、僕は泳げないんですよ」
「え？」
アーソルドは驚いてイーリスを凝視した。
少女達の方は、まるで知っていたとばかりに、訳知り顔で頷いた。
「イゼアは僕よりも泳ぎが得意だぞ」
「そりゃ、あれだけ突き落とされれば。でも僕は一度しか突き落とされた事がないので」
それ以来、イーリスは川には近づかなくなったぐらいだ。
「この街に住んでいて泳げないとは情けない。まあ、川の中を探るのは精霊にやらせるから、

とにかく来い」

彼がここまでイーリスの活躍を街の人々に見せたがるのは、太陽神に許されたと宣言しやすくするためだろう。実際に許されるも何もないが、こうして動いているのを皆に見せておけば、信憑性が増す。

彼はルフィル家として、ウィーゲム家の面倒をしっかりと見てくれるつもりのようだ。

「大丈夫です、イーリスさん。いざとなったらうちの使用人にも手伝わせますわ」

「ありがとう、ハリエット」

「いいえ、イーリスさんのためですもの。太陽神様の事さえなければ、誰も私とイーリスさんを邪魔する者はいなくなりますわ」

「そうだね。僕と友人になるだけで叱られるなんて事が、なくなるかもしれないね」

イーリスが意を決して言うと、ついてきた女達は頬を薔薇色に染めた。

「がんばろうか」

「はい」

上手く三人から嫌われないようにしている兄を見て、イゼアは額を押さえた。

◆ ◇ ◆ ◇ ◆

数ある橋の中でも地元の人間が使う事の多い、比較的新しい橋の上にイゼア達は来ていた。夜になるとあまり使われないため、周囲にある街灯は一つだけで、視界が悪く、かろうじて人がいるかどうかが分かる暗い場所だ。川沿いには桟橋も多く、漁や運搬用に船もあるので、何かをしていても気付かれにくいだろう。

この橋の上から、アーソルドがその川に住み着いている水精霊に尋ねると、ホテルの近くにある観光者向けの桟橋の下に袋が沈んでいると教えてくれた。

中身は金で出来ている物が多いため、浮いてこないから見つかりにくい場所である。精霊達も、川に何か隠す人間は珍しくないため、死体ではないから報告しなかったのだそうだ。

「日陰で水の中となると、ラーハ様の目の届かない場所です。考えましたね。ラーハ様の目の届かない場所……ああ、なんていい響きなのでしょう」

ファルシスは橋の上から桟橋を見つめて呟いた。食べ物が尽きたためか、景色を楽しんでいるようだ。美しく煌めく水面とそこにいる水精霊達は、特に男性を飽きさせないらしい。

精霊に引き上げさせた袋の中身を確認すると、指輪などと違って特徴があり、簡単には売れない物ばかりが入っていた。

「あとは犯人だな」

宝物を調べていたアーソルドが言った。その隣では、イーリスとハリエットがリストを作っている。他の少女達も手伝おうとしたが、手が足りているため、手持ち無沙汰にしていた。

「しかし犯人といっても、宝物を水の中に沈めていたのなら、盗人達にはあまり気配が染みついていないかもしれない。身軽だし、もう出て行っているかも」

アランは腕を組んで先端に水晶のついた首飾りを揺らした。太陽の光を受けて、キラキラと光って綺麗だった。

「あー……イゼアちゃん、ラーハ様は宝物と犯人、どちらを重視すると思いますか？」

唐突にファルシスに問われ、イゼアは考えた。あまり考えたくはなかったが、今は考えなければならない時だ。

「……犯人かも。ラーハ様の焼き尽くす発言は、最初はタラ様と神官の姿を見て、たまには自分も神官達にかまおうって思ったんじゃないかと思うんですよ」

「ああ、なんて小さな親切大きなお世話なんでしょうか」

「でもラーハ様って、目的のために理由を忘れるような方なんですよね。じゃないと、村ごと焼き払おうとはしないと思うんですよ」

宝物を傷つけるつもりはなかったようだが、彼の自信ほど当てにならない物はない。

「……それで、宝物を取り戻すのではなく、犯人捜しが主になっているとイゼアちゃんも思うんですね」

ファルシスもそう思い、確認のために尋ねたのだ。

「話し合う事が出来ればいいんですけど、ラーハ様、あまり話を聞かないし、聞いてくれても

変な解釈して、人間の想像の斜め上の事をするし」
「こんな若い女の子に、ここまで言わせるような事を既に……」
ファルシスは額を押さえてため息をついた。
「一応言っておくけどね、ラーハ様が動かれるのはせいぜい五十年に一度だよ。その半分が月神様関係だけどね。こんなに活発なのは珍しいぐらいなんだ。そろそろ引きこもりの時期に入るはずなんだ」
「……ごめんなさい。この前、ターラ様に懇々と諭されていたので、しばらく落ち着かないと思います。ラーハ様は、意外と素直な方なので」
「……でも斜め上と」
頭が痛くなる話に、イゼアとファルシスは顔を顰めた。
「早く何とかしないと」
「そうですね。しかし、手がかりがないと。宝物を川の中から取り出していたのも、目立たない時間でしょうし」
ファルシスは呟き、目を伏せる。
「目立たない時間……」
イゼアは周囲を見回した。人がどんどん集まってきている。
「誰か、そこの桟橋近くを、変な時間帯にうろうろしていた人知りませんか？」

「あの……」

イゼアが目を向けた先、料理人らしき青年が手を挙げた。

「俺、見たかもしれません。仕込みのために朝早く起きて外に出た時、桟橋の方から水音がして、男が数人いました。俺が見た感じだと三人だったかな。カップルならよくあるんですけど、男ばっかりだったから不審に思って。顔までは見てないんですけど、確か奴等言ってたんですよ」

青年は言葉を切り、東の空を見て続けた。

「なんとか日の出前にすんだ、って」

つまり、日の出直前の時間帯に動き回っていたという事だ。

「沈められたのが下手に悪い物じゃないから、精霊達が騒がなかったのか」

アーソルドは舌打ちした。もしも邪悪なものであれば、精霊達が騒いでアーソルドに助けを求めていたはずだ。

「物としてはこの上なく神聖ですからねぇ。精霊って人間感覚の怪しいってのが理解出来ませんし」

ファルシスはそう言って、どこからか取り出した棒付きの飴を口に含んだ。

ラーハの魔力が移っているほどだ。骨董品や貴金属としての価値よりも、お守りとしての価値の方が高い可能性もある。

精霊の気持ちになって考えると、道に綺麗な花の鉢植えを置いて、街を華やかにしてもらったような感覚なのかもしれない。

「その男達ってのは、ひょっとしたらあいつ等じゃねぇか？　やたらと景気のいい奴等」

「ああ、大きな仕事が成功したって言ってやがったな」

アーソルドは住民の声を聞いて頷いた。

「つまり、指輪などの当たり障りのない物を売り払って、当面の活動資金にして豪遊していたのか。見た目に特徴がなければ、普通は判別出来ないからな」

「こんな物を盗んできたって事は、これを売りさばくルートがあるって事ですよね」

イゼアは宗教儀式にでも使いそうな、黄金の杖を両手で持ち上げて言う。ずっしりと重く金としての価値はあるだろうが、デザイン的に売りにくそうだった。こんな物を売りに来たら、神殿からの盗品だと疑われる。もしも潰して金として売るのなら、太陽神殿から盗む意味もない。

「あ、そうだ。誰か馬車とか荷車とか呼んできてくれないか？　これ重いから、とても手じゃ運べそうにもない」

アーソルドが住民に助けを求めると、メリルが手を挙げた。

「ああ、だったらうちの倉庫がすぐそこにあるから、呼んできましょうか」

メリルが川沿いの大きな倉庫を指して言った。

「……そこって、お前はそこの運搬屋の関係者なのか？」

この国では一番有名な運送屋の倉庫だ。倉庫の脇には運航許可が下りるぎりぎりの大きさの船舶が停泊している。

「そうよ。パパの会社の倉庫よ。うちは船も車もたくさん持ってるわ」

つまり運輸会社の経営者の娘なのだ。

「兄さん……」

「だからいつも珍しい物をお裾分けしてもらうんだよ。このシャツの生地も分けてもらったんだ。風通しが良くて汗もよく吸うしとても涼しいんだ」

暢気な兄を見て、イゼアは何も言う気力がなくなった。

代わりに声を掛けたのは、今まで宝物の検分を手伝っていたハリエットだった。

「あぁら。運び屋さんだから、怪しい物だと気付かなかったのねぇ。ああいった見るからに古くて何かありそうな物は、普通は買い取る前に盗品でないかを調べるのよ」

彼女は、口元を手で隠して、ほほほと小気味良さそうに笑った。その指には、大粒なルビーの指輪がはめられている。

「ハリエットの家は宝飾品店だからね」

見た目通り、ゴージャスな生まれのようだった。

残るセリーナもどこかの令嬢であるのは間違いない。彼女はいかにも厳格な教育を受けて、

大切に育てられているように見えた。
「とにかく、手配してくれるなら手配してくれ」
「ルフィルの若様はせっかちねぇ。ちょっと待っててね」
メリルはスカートの裾を翻して、車を呼びに走っていった。イーリスなどよりもよほど足が速い。
すぐに戻ってくるだろうと、イゼアはファルシスと並んで美しい川を眺めた。大河ではないが、船が通るには十分で、この時期なら橋の上から飛び降りて遊び、叱られる子供がたくさんいた。イゼアは投げ込まれたのだが。
嫌な事を思い出しながら待っていると、川東からざわめきが聞こえた。
つられてそちらを見ると、想像していた荷馬車はおらず、スーツ姿の男達がこちらにやって来た。どことなく、怖い印象を受ける男達だった。
「あれ、セリーナの護衛の人達じゃないか」
「はい。盗品という事なので、調べてもらっていたんです」
兄とセリーナの会話を聞いて、イゼアはもう一度護衛だという男達を見た。
「お嬢、ちょっと」
護衛の一人がセリーナを手招きすると、彼女は小走りで彼の元に走った。そして耳打ちの報告を受け、何度も頷く。

「分かりました。その方達はちゃんと息をしている？」
「もちろん五体満足です」
「そう。今回は神殿が関係しているから、ちゃんと引き渡さないといけないの。だからちゃんと生かしておくのよ」
「もちろんです」
それだけ言うと、セリーナは笑みを浮かべて戻ってきた。
わずかに漏れ聞こえた会話の内容に、イゼア達は絶句し、微笑みを浮かべるたおやかな少女を凝視した。
「イーリス様、犯人が分かりました」
「え、捕まえたの？」
イーリスは驚いてはいたが、引いている様子はなかった。
「いいえ、それはまだです。うちの者が捕らえたのは、盗品を買い取ろうとしていた方達です」
「それは素晴らしい手がかりになるね。どんな人達だったんだい？」
イーリスは普通に朗報を受け取っただけのように顔を輝かせていた。その嬉しそうな彼を見上げて、セリーナは頬を赤らめながら続けた。
「他所から来た方だそうです。危険物を他所の島で売買しようなんて、本当に迷惑な話ですね。後ろにいる方達は始末しておきますので、イーリス様は心置きなく実行犯達を捕らえてくださ

いませ」
「そう。ありがとう。セリーナの護衛の人達は本当に優秀だね」
朗らかな笑顔で会話を進める二人。
イゼアはアーソルドと顔を見合わせ、どうするんだと視線で会話する。
一番大人しそうに見えるセリーナだが、特に後半の方にあまり聞きたくない単語が交じっていた気がした。
「イーリス君、その女性のお父君は、一体何をしている人なんですか？」
誰もが聞けなかった事を、ファルシスが聞いてしまった。
「金融業だっけ？」
「はい」
つまりは金貸し。
強面スーツと金貸しと言えば――。
「あ、アーソルド様。うちの兄はどこのお嬢様をたぶらかしたんでしょうか」
イゼアは怖くなって、アーソルドの袖を引っ張った。彼は顔を強張らせて首を横に振る。
「気にするな。気にしたら負けだ。まだ手を出していないんだから。友達なんだから」
「そ、そうですよね！　友達ですもんね！」
イゼアは何も気付かなかった事にした。

考えたら負けなのだ。危ないのはイゼアではなく、他の少女達である。さすがにハリエットも引いているように見えた。

「イーリス様。泥棒の潜伏先は分かりませんが、特徴と待ち合わせ場所は分かりました。この橋とその待ち合わせ場所を中心に、魔法で調べるなり、聞き込みをすれば足取りを追えるかもしれません」

「本当かい？　それはいい手がかりだね！」

イーリスはセリーナの手を取って大喜びした。

イゼアはその図太さにただただ呆れた。

昔から彼はこういう男だった。相手が誰であれ、それが女性なら、のほほんと受け入れるのだ。

◆　◇　◆　◇　◆

アーソルドは廊下の角に立って、イゼア達を振り返った。

イゼア達がいるのは、ホテルの狭いロビーだ。豪遊している男達が泊まるにしてはランクの低い、ビジネスホテルである。

ホテルのフロントに尋ねたところ、男達は一度事情を聞きに来て、面倒そうだから今日は一

日閉じこもっていると言って部屋に戻ったそうだ。盗品の現物が手元にないから、下手に動くよりもじっとしていた方がいいと判断したのだろう。

彼等がまだ部屋にいるのは、外の窓から確認済みだ。

アーソルドは相手を生け捕りにするため、警棒を携帯していた。剣を腰に差しているイゼアよりも軽装だが、エムラドでは普段から奇襲を受けているので問題ないはずだ。たとえ相手が、同じエムラド出身の魔道士だとしても。

調べた結果、盗人達の中には予想通り魔道士がいた。その魔道士というのが、エムラド出身だと名乗っていたらしい。

「イゼア、そんなに心配するな」

アーソルドは緊張しているらしく、少し顔が強張っていた。魔道士と対決するよりも、住民達の目が気になるのだ。

「え、心配？」

「してないのかっ!?」

心配するなと言ったのに、心配していないと知るとそれはそれで嫌なようだった。魔道貴族に指定される家柄で、問題なく跡取りとして育っているアーソルドを心配するなど無意味だ。

失敗がありえないからこそ、彼は緊張している。それが分かるので、イゼアは肩をすくめて軽い調子で言った。

「だって、エムラドでも上位争いをしているアーソルド様が、ただエムラド出身ってだけの、泥棒なんかに落ちぶれるような魔道士に、どうこうされるはずがないじゃないですか」
「なるほど」
彼は気を取り直したらしく、ふっと笑った。能力はエリートだが、とても単純な男だ。
「イゼア達は、外から見ててくれないか？　僕はアランとファルシス様と行くが、二階だから飛び降りようとするかもしれない」
「え、私もですか!?」
自分も上に行く事になって、ファルシスは驚いて声を上げた。
「ファルシス様、むしろ僕等がファルシス様について行くというのが、本来の流れだと思うのですが」
「そうですね。なにぶん普段は神殿で大人しくしているので、荒事は久しぶりで……」
そう言いながら、彼は法衣の下から鎚矛を取り出し、調子を見るように重そうなそれを片手で軽々と振った。穏やかな見た目に反して、荒事は得意そうだった。
アーソルドはその様子をしばらく眺めてから、今度はイーリスに視線を向けた。
「イーリス、お前も外にいろよ」
「分かっていますよ。可愛い妹を一人で見張りにやるはずがありません。この身を挺してでも守ります」

イーリスは拳を握りしめ、いかにも頼もしく言い放った。
「……お前は身内だろうが、女相手だとブレないな。でも、お前の方が弱いから本当に身を挺するのはやめておけよ。実行するとは思ってないが」
実行するのであれば、イゼアが子供の頃に、苛められているのを知っていて送り出してはいないはずだ。
「マナラ、そいつらが下手に動かないように見張ってろ」
「そいつらって、このお嬢さん方？」
マナラは腰に手を当て、イーリスについてきた少女達を見回した。見張れと言われた彼女達は、不服そうに顔を顰める。
「そうだ。下手に怪我でもさせたらシャレにならんし、こいつらが身を挺してイーリスを守りかねない」
「え、そこまで……？」
マナラは弱いという言葉を呑み込んで、イーリスを見た。
「イーリスの鈍くささを舐めるな。イゼアどころか、お前でも素手で一捻り出来るぞ。見ていてハラハラする」
「……分かった。ちゃんと見ておくよ」
それだけ言うと、アーソルドはファルシスの袖を引いて二階に上がった。

残されたイゼアは兄の手を引いて外に行く。
「みんな、気をつけてね」
「はい、イーリス様も無理のないようがんばってください」
「怪我するんじゃないよ」
「イゼアさん、イーリスさんをお願いしますわ」
彼女達も、イーリスの鈍くささを知っているようだ。軽く言っているようだが、それは不安げにイゼアに視線を向けた。
イゼアはその視線を振り払い、ホテルの外に出た。教えられた部屋の窓をちらりと見上げれば、窓辺には男が立って下を見ていた。
「兄さん、上向いちゃだめだよ。今、下見てる」
そう言って、イゼアは不自然にならないよう前を見てホテルを行きすぎたところで、振り返り、もう一度窓を見たが、人の姿は見えなかった。
「こんな所に立っていていいの？　もう少し戻ったところの方がいいんじゃないかな」
「向こうには一緒についてきた人達がたくさんいるから大丈夫。あの怖い護衛の人とかもいるし」
「怖い？　ああ、セリーナの護衛の人か。迫力がないと護衛は務まらないからね」
兄のずれた台詞に脱力しかけたが、気を取り直して続けた。

「だから向こうは平気。手薄なこっちから逃がさなきゃいいだけだよ。他に逃げ場は空しかないけど、その場合はアーソルド様が追ってくれるから」

天馬でも何でも呼び出して、執念深さを武器にして、地獄の果てまでも追ってくれるはずだ。

イゼアが窓を観察していると、二階から何かが割れる音が響いた。始まったのだ。

その音を聞いて、隠れていた人々と、ホテルのロビーにいたマナラ達が、そろっと出てきてしまった。

イゼアは剣を抜き、マナラはストレッチをして身体をほぐした。

部屋の中では複数の怒声。やがて窓枠に足がかかるのが見えた。

「兄さんはそこにいて」

男が一人飛び降り、両手をついて難なく着地した。外見は普通の中年男に見えた。しかしあれが魔道士だろうという直感があった。

「ちっ」

男は走り寄るイゼアを見ると、素早く立ち上がりながら、瞬時に魔法式を構築する。さすがはエムラド出身者だ。しかし、それでもアーソルドに比べると、魔法式の構築速度は、はるかに遅い。

男は剣を抜いて走ってくるイゼアから、反対側に立ちふさがるマナラに視線を移した。その背後には、サマリドの住民とは別に、セリーナの強面護衛達がついているため、手薄に見える

イゼアがいる方向に的を絞った。
しかしイゼアが魔力を放とうと力を込めると、男は踏み出そうとしていた足を止めた。なまじ魔力が分かるから、イゼアの事を出来る魔道士だと勘違いしたのだ。
その結果、男は着地点からほとんど動いていない。
そして。
「イゼア、危ないっ」
二階から降ってきたアーソルドは、男の頭に蹴りを食らわせた。
「ぐぉっ」
男は前のめりに倒れ、アーソルドは羽根のように軽やかに着地した。
風の精霊が、落下の勢いを殺していたようだ。
「ふん、手加減してやった。有り難く思え」
そう言いながら、アーソルドは気を失った男を、用意していたヒモで縛りつけた。
「イゼア、怪我はないか」
「今のでどう怪我するんですか」
イゼアが眉間にしわを寄せてそう答えると、機嫌良くしていたアーソルドは不服そうに唇を尖らせた。
「念のために聞いたんだ」

「そうですか」
「……他に何か言う事はないのか？」
アーソルドはいかにも褒め称えて欲しそうに胸を張った。その見ているだけで腹が立つ顔をしげしげと眺めながら、イゼアはしばし考えた。
「特にありません。帰りましょう」
「おまっ」
アーソルドは何かを言いかけたが、それを遮るように、突然わっと声が上がり、拍手が鳴った。そこでようやく、アーソルドは人が集まっている事に気付いたのか、驚きながら周囲を見回した。
橋の上で目星をつけていた時よりも、さらに人数が増えている。もしも逃げた場合は殴りかかろうとしていたのか、武器になる物を抱えている人も多くいた。
そんなサマリドの住民達は、イゼアの代わりにアーソルドを褒め称えんとばかりに、拍手をしていた。
「若様、お嬢ちゃん、良かったねぇ！」
「おめでとうございますっ！」
人々が祝福の声をかけた。
アーソルドが脅したため、太陽神の災厄から一致団結して逃れた事に、皆は心の底から喜ん

でいるのだ。

ラーハが何をしでかすか分からないから怖い、という理由で動いていたのだが、アーソルドの演説のせいで、サマリド消滅の危機が迫っているように思われていたのだから、皆が盛り上がるのも当然だった。

「そうだな。先に皆に報告しなければ」

アーソルドは息を吸い、風を操る。

「皆、聞いてくれ。たった今、ホテルに籠城していた盗人達を確保し、宝物を取り戻した！ホテルの従業員も全員傷一つなかった！　街を封鎖して、こいつ等を出られないようにしてくれたサマリドの皆には感謝する！」

アーソルドが宣言すると、街中から歓声が上がった。あっちでもこっちでもお祭りのような大騒ぎで、イゼアは思わず耳を塞いだ。

アーソルドはその歓声が少し収まるのを待ってから、再び口を開いた。

「詳しい事は追って沙汰する。太陽神様の怒りは解けた。これでもう、太陽神に呪われた街などとは言われないだろうっ！」

ちゃっかりと、ありもしなかった怒りが解けた事になってしまい、イゼアは苦笑した。

しかしそれが功を奏したのか、街の至る所からアーソルドの名が高らかに呼ばわれた。

名を連呼されているアーソルドは、照れたように後頭を掻き、ちらちらとイゼアを横目で見

た。

イゼアは仕方がないので、アーソルドが喜びそうな言葉をかけた。

「おめでとうございます、アーソルド様。これならみんな、アーソルド様が家を継ぐ時に、きっと喜んでくれますね」

それが一番の望みであるはずだ。

元々ルフィル家の優秀な跡取りとして期待されていたのだ。アリセレスが女性当主であるため、アーソルドは若くして家を継ぐ事になる。女性当主は珍しい事ではないが、成人した直系の男子がいれば、家督を譲るのが慣例だ。しかし現当主に問題がなく、次期当主があまりに若いと、人々が不安に思う。しかしこれだけ洗脳してしまえば、成人していない今のアーソルドでも受け入れられそうだった。

アーソルドは空を見上げて祝福の声を聞いている。エムラドでは、機会を最大限に生かせる者こそ、本当に優れた人間だと教えられる。

アーソルドはしっかりとこの騒動を利用した。これがテストだったら満点に近いだろう。頭のいい馬鹿というのも多いので、一領民としては嬉しい限りだ。だからアーソルドに気持ち良くいてもらうために褒めたのだ。

しかし彼は突然イゼアをじっと見つめ、小さく咳払いした。

その瞬間、ざわめいていた周囲を囲む住民達が、拍手と祝福とおしゃべりをピタリとやめた。

それは外側で囲む住民達にも伝播して、少なくとも見える範囲で騒いでいる住民はいなくなった。

その様子に戸惑ったのはイゼアだけで、アーソルドは分かっているとばかりに皆を見回しながら頷いた。

そしてどういうわけか、イゼアを正面から睨み付けた。

当然の事しか言わなかったから、まだ不服なのだろうかと不安になった。

「い、イゼア。一つだけ言いたい事がある」

「はぁ……」

またくだらない事だろう。

「いいか、イゼア。僕は……僕は」

アーソルドは言葉に詰まり、目を伏せた。

「僕は、ちゃんと皆に信頼されている」

「ええ、そうですね。良かったですね」

これは悪い事ではない。故郷が穏やかであれば、イゼアも嬉しい。

「エムラドでも、成績は上位だ」

「知ってますよ。すごいですね。おめでとうございます」

仕方がないので、イゼアは彼が満足するまで褒める事にした。

しかしなぜか民衆の中から「ああ、違う、違うって」「なんでこの一族は気付かないんだろうなぁ」などと聞こえてきた。

彼等の言う通り、アーソルドはまだ満足しているような表情ではなかった。

イゼアは今までアーソルドをろくに褒めた事がなかったので、どう言えば彼が本気で満足するか分からなかった。アーソルドが何を求めているのかを、近所の住民達の方が理解しているらしいという事に、少しばかり驚いた。

イゼアには、どう考えても分からない。

「な、何が不満なんですか？」

「ふ、不満などない！」

彼は言い切る。興奮しているためか、顔が赤く、眼が潤んでいる。

彼はやおらイゼアの肩に手を置き、熱い吐息を漏らした。

「イゼア、僕は、お前が……イゼアぁ……あああああっ」

アーソルドは突然人の名を叫びながら指を突きつけた。

しかしそれはイゼアにではなく、その後ろ。イゼアの背後に突如として出現した気配に向けられていた。

「ら、ラーハ様っ」

アーソルドの叫びを聞き、イゼアは振り向いた。

確かにそこには、この騒動の原因である、太陽神ラーハがいた。
イゼアが硬直していると、上から声がかかった。
「ラーハ様、どどど、どうなさったんですかっ」
そう言ってから、ホテルの二階にいたファルシスは、窓枠を蹴って飛び降りた。
「どうとは、お前達ががんばるというから見守っていた。お前達を信じて手を出してはいけないと言われたからな」
イゼア達は絶句した。確かにイゼアはそう言った覚えがあった。
「見守って……って、ひょっとして、犯人の居場所をご存じだったのですかっ!?」
ファルシスの問いに、ラーハは当たり前のように答えた。
「当然だ。目の前で何度も出し入れされれば、気付くに決まっている。その人間達は日光が届かなければ朝ではないと思っていたようだが、わずかに空が白んだ時点で私の影響下にある」
「はぁ……目の前になるんですか」
「少なくとも、印持ちのいる土地ぐらいは、意識を向ければ分かる。お前を通しているのだから、お前にも分かったはずだ」
ファルシスははっとして腕を押さえた。法衣で見えないが、彼は腕に印があるようだ。
「まだ子供のイゼアならともかく、お前がなぜ気付かない？　何年私の側にいる」
腰に手を当てたラーハに問われ、ファルシスは地に膝をついて、拳を叩き付けた。

ラーハは動かなくても人を振り回すようだ。
「ラーハ様、ファルシス様は正殿でずっと昼寝……いえ、神殿内で待機していたんですから、ラーハ様の気配に鈍感でも仕方がありませんよ」
「確かに寝ている間は存在しないに等しいな」
ラーハは寝ているのを知っていたようだ。
今回、話が大きくなったのは、イゼアのせいだ。
彼はイゼアのお願いを素直に聞き入れて、知っていたのに何も口を出さなかった。もしイゼアが何も言っていなかったら、彼はきっとすぐに犯人をファルシスに伝えていただろう。
「こ、行動はしなくていいので、分かりきった事で困っていたら、言葉でアドバイスぐらいしてあげてください。でも、強制したりするのは良くないです。あと、行動する場合は誰かに聞いてみてください。そうしたら、すごく助かると思うんです」
イゼアは今まで学習した事を、再度踏まえてお願いした。しつこいようだが、最低限守って欲しい、大切な事ばかりだ。ここまで言えば完璧（かんぺき）だと思っても、後で覆るからまた増える可能性はあるが、今ここで最良の願いだった。
「要求が多いな。口で言う分にはいいのなら、そうだな……。そういえばファルシスはずっと何か食べていたが、ろくな運動もせずにあまり食べすぎると、いくら私の印を持っていても太るぞ」

「そこまでご存じで……」
「資金を一日で半分使うような無駄遣いもやめた方がいい」
「……そこまで……ご存じで……」
顔を引きつらせるファルシスから離れるように、アーソルドが目を逸らしながら後退した。
彼は太陽神がどうのと演説してしまっているのだ。目を合わせられなくて当然だった。
「人間にとって、人間らしい生活を送るのが大切だ。人間らしさとは、腹八分目、生活に見合う健康的な食事だそうだ。お前は少し贅沢を控えた方がいい」
イゼアは何か言おうと思ったが、彼が常に何か食べているのを見ていたから、何も言えなくなった。もしも許可など出したら、彼は際限なく食べそうな気がした。
「イゼア、先に宝物をお返しした方がいいんじゃないかな」
いつの間にか人々に紛れていたイーリスに声を掛けられ、イゼアは頷いた。
「ラーハ様、宝物、宝物をお返しします！　持ってきて！」
イゼアは輪の外に控えていた、宝物を積んだ荷車を手招いた。運送屋の社員は、皆が見守る前で、怯えながら進み出た。息が荒く、まともに呼吸出来ていない。太陽神の前に進み出るのだから、緊張して当然だ。
男が足を止め、幌付きの荷車から、二人がかりで箱に移されていた宝物を運び出した。
震える二人はさっとメリルの元へ走り、仕方なくイゼアが箱の蓋を外す。中には黄金に輝く

財宝の数々が収められていた。
人々の感嘆の声が上がる。
そこへアランがホテルの従業員と共に引きずってきた、犯人達を添えた。
「宝物はまだ別の場所にもありますが、間違いなく宝物と、犯人達です。ラーハ様、お納めく……」
イゼアは肩を叩かれ、言葉を切った。
「だめ」
イゼアの肩を叩いて首を横に振ったのは、いつもの事ながら、唐突に現れた具神ゼイレムだった。彼は何度も何度も、首を横に振った。
「どうなさったんですか、ゼイレム様」
「嫌がっている」
誰がと聞かずとも、彼が動くのは道具のためである。
つまりはこの宝物達のためだと思って間違いない。
イゼアが言葉に迷っていると、これまた人々に交じって傍観していたマナラが進み出て尋ねた。
「嫌がるって、なんでまた？」
「神殿に戻りたくないと、叫んでいる」

「は、そりゃまた……なんでですか？」

水に沈められていたのに、その扱いの方がまだマシだったというのだろうか。

ゼイレムは首を傾げた。そして小さく頷いた。

「見られないから、嫌がっている」

「は？」

「新しい神官が入っても、すぐに飽きられる。外に出たら、たくさんの人間が飽きずに見てくれた。それが嬉しかった。だから戻って閉じ込められのはもう嫌だと」

ラーハは道具にさえ戻るのが嫌だと言われるほど放置しているのだと知り、イゼアはファルシスを見た。

ラーハにとって神官達は物と大差ないのかもしれない。使う時にのみ使い、使わなければ使わない。道具なら当たり前だが、生きている人間もそのように扱っているように見えた。

少なくとも、イゼアには限りなく似たような扱いのように感じた。

「大切にしてくれる人か、せめて美術館に戻りたいと言っている。……可哀相？」

ゼイレムは首を傾げ、曖昧に言った。この宝物達にとってラーハの神殿にいるのは、感情を封じられているゼイレムに可哀相と言わせるほど、嫌な事なのだ。

「……ゼイレム様でさえ可哀相と」

マナラはちらりとファルシスを見た。



彼等も『可哀相な物』の一部なのだ。

普段があまりに可哀相な環境なので、外に出て豪遊してしまった、と考えるべきだろう。まるで貧乏人が急に大金を手に入れたかのように。

「あの、ラーハ様、ほどほどのお小遣いと、たまに外に出る許可ぐらい与えてあげた方が……。抑圧が大きいと、爆発したら一気に暴飲暴食しますし」

「そうか。ターラに聞いてきたら、ターラの神官が出しすぎだと驚愕していたが」

「ファルシス様、何を飲み食いしたんですか？」

「女のいる店で飲むと高いとターラの神官達に聞いた」

イゼアは沈黙するファルシスを横目で見た。

普通の男性ならいいのだが、彼は仮にも四百年生きる太陽神に印を与えられた正神官だ。世間では神聖な存在として、信仰の対象の一部となっている。

「ラーハ様、私はそのようないかがわしい店には足を踏み入れておりません！　ただ、若い頃には入れなかったラグジュアリーなレストランとホテルを、ここに来る途中でちょっと利用しただけです！」

「女は別の奴だったな。しかしターラに聞いたら、レストランとホテルだけで人間が一年汗水をたらして働いて手に入れられる額だと言っていたぞ」

ファルシス達は金があると後先考えずに遊んでしまうタイプのようだ。

「イゼア、ほどほどの小遣いとはどれぐらいの事だ？」
「えっと……」
イゼアは大人に相応しい金額というのが、ぱっと思いつかなかった。
「私の神殿に宝物はあるが現金はない。だからターラの所のように換金する事になるが、この中の一つでも換金すれば、豪遊出来てしまう金額になる。しかし印も持たない一般の神官にそのような理由で金銭管理をさせたり、あまつさえ少額の小遣いを渡させるというのは、私でもどうかと思う。この感覚は正しいだろうか」
ラーハの口から人間感覚の言葉が出てくるとは思わず、イゼアは戸惑いつつも答えた。
「……一般論と、合致すると思います」
その答えを聞くと、ラーハは満足げに頷いた。
「でも、何も一般の神官達にさせなくても、自分達で管理すればいいような……」
「皆の様子を見る限り、自主性に任せるのは無理だろう。贅沢が出来る環境で贅沢しないのは、お前ぐらいだ」
イゼアは自分の生活を思い返し、子供でも気軽に買えるジェラート一つ買うのが未だに贅沢だと思っている異常に気付いて愕然とした。
「……きっと慣れれば落ち着きますよ。豪遊だって、金銀財宝みたいにそのうち飽きますし」
「人間というのは、欲望に際限などない。ターラの所の連中ならともかく、私の眷属は生を謳

歌するような人間達だ。自分の物ではない財宝を見るのに飽きるのは当然だが、自分で自由に出来る財宝なら別だろう」

イゼアは額を押さえた。ラーハがそこまで自分の神官達を理解しているとは、思ってもみなかったのだ。

「そういう人だって分かってて閉じ込めてたんですか!?　可哀相じゃないですか！」

「ふむ」

ラーハは小さく頷いて、暫しの間考えた。

「そこまで言うならお前が管理してやれ」

「え!?」

イゼアはラーハの顔を見つめた。いつもの真顔で、にこりともしていない。本気だ。

「いやいや、ラーハ様、子供に何を言ってるんですか。第一、普通の人間なんて生きてせいぜい百年ですよ」

彼が本気であるのを察したファルシスは、慌てて口を挟んだ。

「古い家柄だから問題あるまい」

イゼアはようやくラーハの言っている事の意味に気付いた。

呪いの次は、会計係を後裔に押し付けられようとしているのだと。

「いや、さすがに代々は」

「お引き受け致します」

イゼアの声を遮ったのは、聞き慣れた声、イゼアの母の声だった。知らせを受けて、駆けつけてきたようだ。

リリアはアリセレスと並び、覚悟を決めた顔をして、人々をかき分け進み出ると、スカートをつまみ、一礼する。話し合いをするために他所行きのドレスを着ていたので太陽神の前でも見苦しくはないが、優雅な仕草でありながら、どこか鬼気迫るものを感じた。

「母さん、いきなり何言うの!?」

イゼアは声を上げると、リリアは笑みを浮かべた。

「まったく、せっかく素晴らしい提案を受けているのに断るだなんて、不甲斐ない子ね。本当に誰に似たのかしら。イーリスやあなたのお父様みたいになれとは言わないけど、もう少し考えなさい」

いつもなら怒鳴りつけるところを静かに諭され、イゼアはむっとした。

「母さんは、ラーハ様の恐ろしさを知らないんだよ！　ラーハ様の思いつきや善意ほど、信じちゃいけない物はないんだよ！」

被害を受けるのはイゼアだけだと思っていた。しかしこんなしがらみがあれば、これから先、どんな厄災がこの街を襲うか、分かった物ではない。

「それでも、呪われた一族よりはマシでしょう」

「ぐっ……でも呪いはそのうち消えるし……」
「お黙りなさい。いいこと。自分の呪いが解けたからって、そんなに自分勝手な事を言ってはだめよ。お父様も、イーリスもまだ呪いが残っているんだから」
そう言われるとあまり強く出られず、唇を引き結んで俯いた。
「太陽神様、当家が喜んで承ります」
「そうか。よかったなファルシス。これで常識の範囲内での買い食いは出来るぞ」
ファルシスはちらりとリリアを見て、曖昧な笑みを浮かべた。
話の流れから、やる気のないイゼアではなく、ヴィーゲム家として引き受ける事になりそうだ。
リリアは緩いイーリスの実の母親とは思えないほど、厳しそうな雰囲気を醸し出している。彼女は甘えて手心を加えてくれるような、生やさしい女ではない。リリアがぞっこんの父ですら、なかなか成功しないのだから、本当に言葉通り小遣い程度になるのは間違いない。それでも買い食いは出来るはずだから、喜んでいないわけではないだろう。
「問題なさそうだな。他の連中を回収しに行くか」
「お待ちください、ラーハ様」
帰ってくれると言ったのに、止めたのはアリセレスだった。
「イゼアは……イゼアの子は呪いが出るのでしょうか」

ラーハはイゼアに視線を向けた。その太陽のような瞳に焼き尽くされやしないかと思うほど、しっかりと観察された。

「出ないだろう」

彼は胸を張り、自信たっぷりに言った。あれほどまじまじと観察した結果のこの自信が、実は砂上の楼閣にも等しいとは、誰も思うまい。

イゼアとアーソルドがそんな胡散臭い物を見るような目をしていたのだが、その言葉を信じたアリセレスは言った。

「良かったわね、二人とも！」

「そ、そうだな」

アーソルドは素直に浮かれるアリセレスを見て苦笑した。

「では、イゼア、お前の一族で、それがほどよく満足するよう管理しろ」

「管理……って」

イゼアはラーハが指で示した宝物を見た。

「え、これ？」

「数百年先までそれで足りるだろう？」

「す、数百年ではすみませんよっ！　もしもこれを全部現金に換えて銀行に預けたら、利子だけでとてつもない金額になりますよっ！」

もしもオークションに出したいと発表したら、とんでもない騒ぎになるような宝ばかりだ。

「足りるなら問題ないだろう。とにかく飾ってやれ。そうすればゼイレムも満足だろう？」

問われると、ゼイレムは首を傾げた。彼には分からないようだ。

「つまり、美術館にでも飾ればいいのか？　それなら不特定多数に見られれば、盗まれて喜ぶ事もなくなるしな」

とアーソルドが言うと、アリセレスが胸の前で手を合わせた。

「それがいいわね！　それにラーハ様のお許しが出た事を、目に見える形でアピール出来て一石二鳥じゃない！」

アーソルドとアリセレスは、さっそくやる気になっていた。二人は先祖が約束した通り、本当にウィーゲム家の復権を目指しているのだ。

「ゼイレム、また美術館に飾られるのなら、文句はないだろう？」

ゼイレムはラーハの言葉を聞いて、宝物をゆっくりと眺めた後、頷いた。宝物達も喜んでいるようだった。

「これで問題は全て解決したな。いいか、イゼア」

ラーハに問われ、イゼアはエプロンを握りしめた。

「……わ、分かり、ました」

これ以上関わるのは嫌だったが、家族にとってはそれが救いになるらしい。名誉などのため

に見えない不安に怯える子孫が可哀相だったが、呪いよりはマシなのかもしれない。
「なぜ不服そうにしている？　ああ、そうか。お前に対する褒美が何もないな。少し待て」
と言って、ラーハは宝物の山を眺め、
「これだな」
ラーハは手の平に収まる何かを持ち上げた。
「お前は相変わらず洒落っ気はないし、髪もまだ短いから、これをやろう」
そう言って、ラーハはイゼアの腕を掴んだ。
「えっ、いや、その、そういうのは別にっ」
「これはお守りぐらいにはなるだろう」
そう言って、ラーハは無理やりイゼアの腕に金色の腕輪をはめた。金にしては軽いが、イゼアに分かるほどの魔力がこもっていた。この中では地味で、宝飾品としてではなく、魔具としての価値が高い、実用的な宝物のようだ。
「その格好にも合っているから、髪飾りと違って常に身に付けられるな」
つまりそれは、ラーハから賜った宝物を、常に身に付けていなければならなくなってしまったという事だ。
油断して、腕ごと盗まれないように気をつけなければならない。
「そういえば、危険な物もあったんじゃないですか？　まさかこれだったりしませんよね」

「いいや、違う。そうだな、さすがに危険な物は持ち帰るか」
ラーハは山の中から黄金の杯や小さなナイフを持ち上げた。杖ならともかく、それらはとても危険には見えなかった。
道具とは、使い道が分からなければ、本当に意味がない。その使い道を見つけてやるのは、とても難しい。
見られる事に慣れてきたら、そのうち使えと言い出すのではないかと、宝物達を眺めた。魔力があるから、いつか精霊が宿ったり、宿らなくてもゼイレムを呼びつける事ぐらいはしそうな問題児ばかりに見えた。
きっとファルシスの影響だ。ラーハの周りにいる者は、皆問題があるように感じてしまう。
「では日が傾いてきたから、日が落ちる前に他の神官達を回収しにいく。ゼイレム、お前も去れ」
と言いながら、彼はファルシスの首根っこを掴んだ。
ゼイレムは、ラーハに命じられ姿を消した。
「ゼイレムも満足したようだな。では行くぞ」
「ちょ、ラーハ様、まだ事後処理があるので、他の者達だけをっ」
「イゼア達に任せておけば問題ないだろう。お前よりは子供達の方が役に立つ。お前がいてもどうせ食うだけだ」

そう言って、厄災は特にこれ以上の災難を呼び込む事なく、姿を消した。日が沈めば、宝物を見つけられずにまだ探している死霊がいたとしても、残らず浄化される。

サマリドの勝利だった。

そこからがまた大変だった。

街中を巻き込んで大騒ぎしていたため怪我人も出たらしく、ルフィル家の魔道士達が派遣されたり、宝物をどのようにするかを簡単に話し合ったりと、ごたごたした。

預けられた太陽神の宝物を飾る場所が一番大きな問題になった。

美術館内にコーナーを設置しようにも、美術館が老朽化しているので、補修工事が必要になる。だったら新しく建ててしまった方がいいのではという声も出たので、難航するだろう。

サマリド内で飾るのはほとんど確定しているため、アリセレスは忙しくなるらしい。物が物であるため、夫に相談をし、国にも報告しなければならない。

騙されて盗品を買ってしまった人々には、一度全額を返した。太陽神の宝物であると知っても欲しいという者にだけ、後日適正価格で正式に売買する事になった。太陽神の宝物であるという、鑑定書をつけての販売になる。

太陽神殿に返さなくて良くなったのだから、気に入って買い取ってくれた人の手に渡る方が、

道具達にとっても幸せだ。
その代金の一部は太陽神官達のためのお小遣い基金として、セリーナの父親が経営する銀行で運用してもらう事になった。
セリーナの父親は大きな銀行の経営者で、意外とまっとうな金融業を商っていたらしい。
ただし、その祖父が怖い人だとアリセレスは言っていた。
彼等も何をしでかすか分からない太陽神関係に、危ない橋を渡る事はしないはずだ。特に太陽神の逸話はひどい物が多いのだ。
その宝物は、一時的にルフィル家で預かる事になり、メリルが手配した車で運び込まれた。
後日、ハリエットが宝物の鑑定と手入れのための専門家を手配するという約束までした。
この事から分かるように、イーリスの三股問題は、何一つ解決していない。
彼女達は共に行動し、友情を深め合う事も特になく、誰一人身を引く様子はなかった。それをのほほんと受け流す、実の兄の図太さをイゼアはうらやましく思った。
その日はそれだけ決めると解散となり、帰るなりイゼアはベッドに直行した。
闇の精霊という存在を人々に誤解させたままという事だけが引っかかったが、今さらあれは死霊だったとは言いにくい。闇の精霊には悪いが、サマリドの人々が、真実に気付く日が来ない事を祈る事にした。

◆◇◆◇◆

翌朝、疲れていたイゼア達に気を利かせて、使用人が起こしに来なかったため、イゼア達はずいぶんと寝過ごした。マナラに起こされたイゼアは、いつもよりも日が高くて驚いてしまった。こんなに寝坊をしたのは久しぶりだ。

慌てて着替えて作業部屋に行くと、そこでは既に朝食の準備が整っており、アーソルドとアランが待っていた。

魔動機が転がるこの部屋で飲み食いしていると、自分の居場所、日常に戻ってきたような気がして、イゼアは思わずほっとした。アーソルド達がいなければ最高だが、そればかりは仕方がない。

「昨日は、疲れましたね。身体よりも精神的に」

「まったく、とんだ災難だったよ。まだ修理する道具が残っているっていうのに！」

マナラはスープを飲みながら、昨日の騒動に対して文句を零した。

出てきたのが仕事の話で、イゼアは彼女の仕事に対する情熱を、まだ甘く見ていたようだった。

「マナラさん、ほんっとに好きですね」

「私は別に疲れるような事はしていないからね。他所者だから特にする事もなかったし。ヤバ

イ魔具が交じってるって聞いてなきゃ、ここに残っていたぐらいだよ」
「そうですよねぇ」
マナラは魔具を作ったり直したりするのは苦手なようだが、使い手としては専門家並みに詳しい。もしもの時にどうにかしろと言われても、イゼアはマナラのようには出来ない。
「ああいう時はじっとしているに限るね。そしたら出来る奴が勝手にやってくれるからさ」
一番働いていたアーソルドは、肩をすくめてみせた。
「まあ、今回、お前にしてもらう事が何もなくて良かったよ。お前まで働くような状況は、あまり考えたくはないな」
「確かにねぇ」
マナラはくすくすと笑いながら、外を見た。
外は明るく、サマリドの未来を暗示させるかのような、爽やかな朝だ。
「そのうち太陽神の逸話として、本に載るんでしょうねぇ……」
イゼアはため息をついた。サマリドは水の都市なのに、サマリドと言えば太陽神と言われるようになってしまう。
「まあ、いいじゃないか。お前はもう呪われていないと、印の件を抜きで世間に広められたんだ。これでイーリスも心置きなく相手を選べるな。これ以上被害者が出る前に、あいつは身を固めた方がいいんだ。そうだ、世間体的に、先に兄をどうにかしないといけないんだな！」

イゼアは、アーソルドがそこまでイーリスの将来について危険視していたとは思いもしなかった。父の代では、イーリス以上に周囲を巻き込んでいたような話を聞いているため、そうならないようにしたいのだろう。

イゼアは苦笑し、テーブルの片隅に置いてあった魔動機を手にした。

「やっぱりこれが一番落ち着きますね」

「そうだろう。こいつらもあの宝物みたいに、外に出られて喜んでるのかもしれないな。壊れてもちゃんと掃除してもらってたから、ゼイレム様は来なかったみたいだけど」

「物持ちはほんとにいいみたいですよ、この家」

物を大切に使い、歴史と伝統を大切にする家だ。だから先祖の言葉も大切にして、代々ウィーゲム家に構いすぎている。時折悲恋を生み出していたようだが、最終的には歴史と伝統のために諦めていたようだ。それでも両家の間にヒビが入る事はなく、今も続いている。

「今日は遅れを取り戻さないとね」

「そうですね」

イゼアはスープを全て飲み終え、ふと自分たちをじっと見つめている宝石箱の精霊に気付いた。

「どうしたの？　欲しいの？」

精霊も高等になると人間と同じ物を飲食して楽しむようになる。もちろん彼らに食料を摂取

する必要などないが、食事というのは楽しげに見えるらしく、交じりたがるらしい。
「ううん。ご主人様がいた頃を思い出していたの。ご主人様はね、朝は部屋でお食事だったから、ボクはずっと食べている姿を見ていたの」
「そっか。その調子で、中に何が入っているか思い出せるといいね」
「うん」
宝石箱の精霊は笑顔で頷いた。小さなその精霊はとても愛らしく、出来る事なら思い切り抱きしめたい。
「ご主人様に似てるのに、エプロンしてて変なの」
「私はこれがお仕事なの」
「そっか」
イゼアはその姿に心を癒されて、今日も一日がんばろうという気になった。
彼は主に大切にされていたからこそ、顔が似ているというだけでイゼアの前に姿を見せているのだ。楽しげに昔を語る姿を見ていると、どうにかして錆び付いた記憶を戻してやりたくなる。彼が大切にされていた大切な記憶なのだから。
そう考えていると、ドアがノックされた。
「イゼア、いいかな」
イーリスの声だった。

「兄さん？　どうしたの？」
「まだ一度も君がどう働いているか見ていなかったから、見学に来たんだ」
それを聞いて、イゼアは納得した。それにイーリスがイゼアの仕事を見ておけば、リリアも安心するはずだ。
「そういう事なら別にいいけど」
イゼアが答えると、ドアが開いてイーリス達が入ってきた。彼だけではなく、その後ろには三股相手の少女達もいた。
「……みんな揃ってどうしたの？」
「いや、実はおば様に呼ばれていてね。まだ何か話す事があるみたいでさ。ちょっと予定よりも早く揃ったから来たんだけど、おば様はどうやら呼び出されて出かけてしまったみたいなんだ。色々あって大変だねぇ」
アリセレスは間違いなく、三股の事について話すつもりのはずだ。しかしイーリスにはそれが通じていなかった。彼的には、三股をしているつもりなどないのだから。
「さすが兄妹だな」
マナラがイゼアとイーリスを見比べて言う。
イゼアは確かに女性にちやほやされる事はあるが、このような事はしていない。しかしそれを言っても、冗談だと流されて終わりになる気がして、イゼアは頬を膨らませて口を閉ざした。

その時、テーブルの上にいた宝石箱の精霊が立ち上がり、イーリスを指さした。
「ああっ、ご主人様っ！　ご主人様だっ！」
宝石箱の精霊はそれはそれは嬉しそうに、宝石箱の上で飛び跳ねた。
「まあ、なんて可愛らしい」
「何々これ。これも魔動機なの？」
「さすがはルフィル家ですわね。こんな魔動機は初めて拝見致しましたわ」
ついてきた三人の少女達は、精霊を見て目を丸くし、その可愛らしさに魅了された。
「本当にすごいねぇ。イゼア、これどうやって動いているの？」
「兄さん、これは魔動機じゃないよ。その下が魔動機で、この子は精霊だよ。物が大切にされて条件が整うと、精霊が生まれる事があるんだって」
「へぇ。ずいぶんと可愛らしいねぇ。僕にも見えるって事は、力の強い精霊なのかな」
イーリスは精霊に向かって微笑んだ。すると精霊は恥ずかしがりながら、何度もちらちらとイーリスを見上げた。イゼアが彼の主に似ているなら、イーリスがさらに似ていても不思議ではない。
「この子は元々うちの家にいたらしいよ。だからご先祖様に似ている兄さんを見て、喜んでるみたい」
それを聞いて、三人の少女達はさらに身を乗り出した。

「まあ、イーリス様のご先祖様も、イーリス様のようにお美しい男性だったのですね」
「イゼアちゃんも身内って顔してるし、すっごく強い血筋なのかなぁ」
「だとしたら、素晴らしい血筋ですわね」
三人はうっとりとため息をつく。彼女達にとって、この顔はそれほど魅力的な物らしい。
「ははは、なんかうちの一族、呪いのせいなのか、直系だとみんな血が強く出ちゃうらしいよ」
朝から四人は楽しげで、イゼアは頬杖をついて暢気にしている彼らを眺めた。
イーリスは目を輝かせて自分を見つめる宝石箱の精霊の前に立ち、腰を屈めて目を合わせた。
「初めまして、精霊さん」
イーリスは指を差し出した。宝石箱の精霊は一瞬驚きながら、両手でその爪の先を掴んだ。
その可愛らしい握手の仕方に、女達は色めいた。
「ご主人様は、よくこうしてくれたんだよ！」
「そうかい。僕はイーリス。君の名前は何というのかな」
今まで笑っていた宝石箱の精霊は、イーリスの指先に触れながら悩み始めた。
「兄さん、ずっとうちの家系の人と会わなかったから、昔の事は忘れてしまったんだって」
「名前も？　それは可哀相に」
「うーんとね。思い出せそうなの。えーとね、うーんとね」

彼はイーリスを見上げて、うんうんと悩む。
「ひょっとして、君はシャスと呼ばれていなかった？」
「あっ」
イーリスに問われると宝石箱の精霊は声を上げ、突然ぽろぽろと涙を零した。
人間の近くで、人間と接して成長した精霊は、人間のような感情表現をして、時には涙を流す事もあると本に書いてあったのを、イゼアは思い出した。
「ご主人様だ、ご主人様だっ！」
宝石箱の精霊はイーリスの指先に頬を擦りつけた。イーリスは泣きじゃくる精霊の頭を親指でそっと撫でて、春の日差しのように柔らかな微笑みを浮かべた。
その一枚の絵のような光景に、女達はうっとりとして見入っている。
「兄さん、どうして分かったの？」
「ご先祖様の日誌によく出てくる名前なんだ。小さな人とか、可愛らしい人とか、美しい人って書いてあったから、ずっと女性の事かと思っていたんだけど」
イーリスは宝石箱の縁を、指先で優しく撫でた。
「これじゃあ、男の子でも美しい人と、言わざるを得ないね」
美しいと褒められた宝石箱の精霊は、恥ずかしがってイーリスの指に額を擦りつけて顔を隠してしまった。

「お前は男までたらすなよ」
アーソルドが呟いたその言葉に、イゼアも思わず頷いた。
イーリスは不思議と同性から反発される事も少なく、友人が多い。
「先祖の日誌なんて読んでるの？」
食事の手を止めていたマナラは、頬杖をついて尋ねた。
「ええ。昔はどのように仕事をしていたか、知っているだけでもずいぶん違うと思ってね。なかなか面白いご先祖様なんだ」
イーリスは苦笑しながらシャスの頭を撫でる。
「でも君の今のご主人様は、彼だよ」
イーリスはシャスを諭すようにアーソルドを示した。しかしシャスにはぴんと来ないらしい。
「精霊については詳しくないけど、難しい問題のようだね。どう説明したらいいだろうか」
精霊に人間の理屈は通じない。なのに金銭的な価値のある物に宿ってしまったから、彼の心を尊重するのは難しい。
彼は自分の主の関係者以外には姿も見せなかったほどだ。
ただ純粋に、慕っていたのだろう。
だから、彼はきょとんとして、宝石のような瞳でイーリスを見上げている。
その視線を受けてイーリスは小さく笑った。

「ああ、君は本当に綺麗だね」
イーリスはそう言いながら宝石箱に触れていると、近くに置かれた宝石箱の物だと一目で分かる、綺麗な鍵に気がついた。
「これは君の鍵？　開けてみてもいいかい？」
イーリスは鍵を手にして尋ねた。
「いいよ」
断られると思っていたのに、即答だった。
「えっ、いいの!?」
イゼアは驚いて声を上げていた。
「いいよ。だってご主人様はいいって言ってたもん」
イゼアは頬を膨らました。
「どうして私が頼むのじゃだめなの？　名前を知らなかったから？」
「えっと……女の子だからダメなんだよ」
「なんで？　あ、ひょっとして当主じゃないとだめって事？」
「……？」
シャスは不思議そうに首を傾げた。
全てを思い出したわけではないらしい。

「開けてみれば早いんじゃないか？　ひょっとしたらすごい物が入ってるかもしれないぞ」
アーソルドが落ち着きなく身を乗り出して口を挟んだ。
昔から彼は好奇心旺盛な子供だった。近くの遺跡に、財宝を求めて探検に行き野犬に囲まれ、心配してついてきた上級精霊に泣きついたりしたものだ。もちろんイゼアも巻き込まれた。
「じゃあご主人様、蓋を開けてもいいよ」
シャスは宝石箱の隣に立って、蓋を叩いた。
「ご先祖様が残した宝物か。なんだかわくわくするねぇ」
イーリスもアーソルドに負けず劣らず浮かれながら、そっと宝石箱に手を掛けた。
ゆっくりと蓋を持ち上げると、カチャリと小さな音がして、開いた。
中身も美しい何かと、それを彩る意匠を凝らした装飾があるのだろう。
そう思っていたら、中にあったのは赤黒い靄だった。
「な、んだろうこれ」
イーリスは宝石箱から手を離して呟いた。
『ああ……その顔、忘れもしない……』
それは男とも女ともつかない声を発して、渦巻いた。
イーリスはさっと宝石箱から離れて、近くにいたアーソルドを盾にする位置まで下がった。
イゼアはテーブルに立て掛けてあった剣を手に取り、マナラと一緒に慌ててテーブルを迂回し

て、アーソルドの背に隠れる。
「あ、思い出した」
シャスが手を打ち合わせて言った。
「ご主人様は、おじいちゃんになってて、今はこれを処分出来るような魔道士も精霊もいないからって、ボクの中に封印したんだ。強いご主人様が現れるまでは開けてはいけないって」
昔のウィーゲムの当主が、歳を取ったからと封印しか出来なかった何か。
「まさか、邪精霊っ!?」
アーソルドが悲鳴に近い声を上げた。
ウィーゲムが――かつての、絶頂期のウィーゲムが封じる事しか出来なかった邪精霊。つまりこの地域に存在する精霊が束になっても敵わなかった邪精霊である。
邪精霊とは、言葉の通り、人間から見ても、精霊から見ても邪悪な精霊の事だ。
精霊とは自然界に存在する魔力を取り込み、ゆっくりと成長する。だから魔力の強い場所や人間を好むのだ。人間に従うのも、美味しい魔力をくれるからと、単純な理由が根本にはある。
彼等が動物のように殺してまで食べないのは、生き物の魔力は美味しいが、彼らにとっては麻薬のような物で、食べすぎればおかしくなってしまうからだ。
つまりやめられなくなって無差別に殺すようになる。
その状態になった精霊が、邪精霊と呼ばれるのだ。

人間にとっては自分達を食い殺すから邪悪であり、精霊達にとっては気に入った人間を殺そうとしたり、精霊という存在を貶める存在になり果てた同朋だからこそ邪悪なのだ。

イゼアはふと、ラーハがイゼアの泊まっている客室にやってきた時の事を思い出した。何かが引っかかると言っていたが、あれは盗人がこの街にいる事ではなく、これの事だったのではないかと思い至った。

あのラーハが「あまり良くない」と言うほどだ。宝物関係の事で出た言葉と考えるよりも、邪精霊の事だったと考えた方がしっくりする。

本当に危ない者の気配がしたなら、はっきりと忠告してくれればいいのに、肝心な時に役に立たない。

「くそっ」

アーソルドは慌てて蓋を閉めようと手を伸ばしたが、赤黒い炎が立ち上り、その手を阻んだ。それはゆらりゆらりと起きあがり、宝石箱とシャスを包み込んだ。

「シャスっ」

イーリスが声を上げた。しかし炎に呑み込まれたシャスの姿は見えず、声も聞こえなかった。

「あ、アーソルド様、あれ……どうにか出来ますか？」

「かつてのウィーゲムはうちよりも攻性魔法が得意な、火力特化の魔道士だったんだぞ。それが封じる事しか出来なかったようなのを、僕にどうこう出来るはずがないだろう！」

万能型とは聞こえはいいが、特定の術を極めたような魔道士には、その分野で劣るという事だ。

精霊達は邪精霊を見つけると、普段おおらかな水や地の精霊ですら、協力し合って排除する。この精霊の多い土地で、邪精霊が始末されていない理由は簡単だ。

シャスが話したように、始末出来る者がいなかったのだ。

精霊の中にはごく稀に、下級の神よりも力のある者が存在する。もしこれが、そのごく稀な精霊が、滅多に発生しない邪精霊になっていたのだとしたら、扱いに困って封印という手段を取る事もあるかもしれない。

アーソルドはじりじりと後退し、周囲を探る。

宝石箱を置いてあったテーブルの上には魔石が転がっていたはずだが、いくつか姿が消えている。つまり食われた。魔力を回復されたのである。

考えられる内で最悪の事態だ。

そのうち誰かが来るかもしれないが、来ても出来る事はない。餌になってしまうだけだ。

「そ、そうだ、鈴だ！　こんな時のターラ様だ！」

アーソルドは期待に満ちた目をイゼアに向けた。イゼアとマナラは死神ターラに鈴をもらっている。死神を呼び出すという、最強の道具だ。

上級精霊にも、国から保護指定を受ける最上位の魔道士にも始末出来ない精霊なら、ターラ

を呼んでも大袈裟な話ではない。
むしろ、今こそ使うべき、街の危機である。
「あっ……また部屋に置いてきた」
イゼアは初日からずっと机の引き出しの中に隠していた。
アーソルドは、同じ物を持っているはずのマナラに目を向けた。
精霊が人の姿を取りつつある。今は寝起きのため、動きが緩慢だが、空腹のまま動き始めれば、きっと恐ろしい事になる。
山を歩いていたら、冬眠明けの竜に出合った狩人の気持ちに近いものがあるかもしれない。
マナラは慌てた様子でポケットを漁っていたが、突然手を止めて言った。
「あ、地下に置きっぱなしだ」
空気が凍った。
女達は、怯えてイーリスにしがみついた。素人でも、この状況がまずいのを理解している。
「よし、残る手段は三つだね」
「あるのか!?」
アーソルドの問いにマナラは頷いた。
「一つはイゼアの部屋までがんばって走る。欠点は見ての通りだ」
この広間で今使える出入り口は二つ。イゼアの部屋に近い方に、邪精霊がいる作業用のテー

ブルが置かれている。壁は精霊も通り抜けられない、魔法が効きにくい特殊な素材で、破壊するのは難しい。

「ちなみにイーリスを囮にすれば犠牲者は一人で済むけど確実に死ぬだろうね」

少女達はマナラを睨み付けた。

「もう一つは窓から逃げる。まあ、窓なんかえっちらまたいでたら、真っ先に餌食になるだろうし、こいつを逃がしたら街中が犠牲になるかもしれない」

男達だけならともかく、先に逃がさなければならない少女達は、とても機敏に窓を飛び越えられそうにはない。

生き物にとって、火とは触れるだけでも危険な存在だ。

「もう一つは封じ直す事だね。シャス、どうすればいい？」

取り込まれたかと思った宝石箱は、邪精霊が人型になった事で炎が収まり、その範囲から外に出ていた。その中に隠れていたシャスは、マナラに呼びかけられて宝石箱の上に姿を見せた。見た目に反してよほど強い精霊なのか、宝石箱の精霊だから、宝石箱が壊れなければ消滅しないのか、弱っている様子もなく無事だった。

「ご主人様に力を貸してもらったんだよ。ボクは呪いを封じるための箱だから」

彼はたまたま邪精霊を封印出来たのではなく、封じるために作られたようだ。

「ったく、なんでクロリスはそんな箱をこんな綺麗に飾ったんだか。これだから芸術系の技師

は……」

マナラは頭を掻きながら愚痴を零す。

ドクロマークでもつけていてくれれば誰も開けようとは思わなかっただろうに、見た目に拘りがあるから、このような事になった。

「黙れ」

性別の分からない、すれた声が部屋に響いた。

完全に人の形となった邪精霊は、赤黒い衣を身に纏い、滲む輪郭は、時折崩れて炎となる。人の形にはなっているが、完全に人の姿にはなっていない。性別すら曖昧だった。

人と見まがうような姿は、精霊達の力の強さの目安だと言われている。それは普通の精霊達が力を誇示しているからであり、完全な人の姿に力を割く必要はない。人の形は力ある精霊、精霊の理性を安定させる効果があるが、それだけなら形さえ整っていればそれでいい。彼等は自ら性別を決めるが、本来なら男も女も関係ない。

邪精霊は蝋燭の炎のようにゆらゆらと揺れながら、手を前に突き出した。

「黙れ、くそがき」

刹那、濁った炎が四方に走った。

「きゃあっ」

誰かを狙った物ではなかったが、三人の少女達はその禍々しい炎に怯え、悲鳴を上げた。

邪精霊は宝石箱に手を伸ばし、シャスは怯えて姿を消した。
「ちっ」
邪精霊は宝石箱を掴んで燃やそうとしたが、宝石箱は燃えるどころか、傷一つつかず美しい姿そのままに、邪精霊の手の中に鎮座している。
「さすがはクロリスの作品だねぇ。ほれぼれするほど頑丈だ」
「つまり、封じるには十分な性能が本当にあるって事だな」
マナラの言葉を聞いて、アーソルドがシャスを見つめて呟いた。
「そうだね。お前等、消滅させるのは難しいかもしれないけど、シャスを取り戻すぐらい出来るだろ。出来なくても死ぬ気でやれ」
マナラは戦力になるアーソルドとアランに目を向けた。
イーリスには目も向けないのは、走るだけで息を切らしていたのを目撃したからだろう。
「分かった」
アーソルドは頷き、アランが黒いローブの下から折りたたみ式の杖を取り出しながら問う。
「どうする、アーソルド。炎の精霊となると、死霊術は使えないから、僕の攻撃方法はあまりない。あれは竜よりも手強いし、あの時いたセファインもいない」
「まったく、余計な時はいるくせに、肝心な時にいない奴ばかりだな！」
それにはラーハ達も含まれているようだ。

才能と力の相性だけで神官に選ばれたファルシスだけでも残っていたらよかったのだが、連れ帰られてしまった。そしてこのサマリドで最も優れた精霊使いであるアリセレスは、屋敷にはいない。

「お前はまずは守りを。あとはまぁ、なるようにしかならん。騒げば誰かが母さんを呼びに行ってくれるかもしれない。イゼア、お前のその剣貸せ。杖代わりにする」

「は、はい」

イゼアはいつも身に付けている、マナラの剣を彼に渡した。イゼアが持っているよりも、アーソルドの方が役立てる事が出来るはずだ。

アーソルドは剣を構え、攻性魔法の式を一瞬で組み立てる。

「炎の精霊みたいだから、とりあえず水攻めだなっ！」

アーソルドは無詠唱で魔法を放った。普通の壁なら穴を開けてしまうような魔法だが、邪精霊の一歩手前で弾かれてしまった。しかしアーソルドはかまわず続ける。そうしながら呪文を唱えて別の術の準備もしていた。

邪精霊はうっとうしそうに顔を顰め、テーブルの上にあった別の魔石に手を伸ばした。

「ちょ、それはだめっ」

マナラが叫ぶが、もちろん邪精霊は手を止めなかった。攻撃も無視して、魔石を手に取り、口元に運んだ。

「不味い」
「そう思うなら食うな！　今の高かったんだぞ！」
マナラの罵声を聞いて、先ほどよりも幾分か輪郭がはっきりした邪精霊は笑った。
「不味そうだが、この石よりは美味そうだから、足りなければお前も後で喰らってやる」
邪精霊はアーソルド、アラン、イゼア、そしてイーリスに目を向けた。
「魔力はないが、お前はあの男にそっくりだな。後で可愛がりながら喰らってやる。その女どもを、目の前で足からゆっくり燃やしてやろうか」
邪精霊は艶然とした笑みを浮かべ、その言葉を向けられたイーリスは息を呑んだ。
先祖と似ているのは顔だけで、何の力もないイーリスを守るように、少女達は彼の前に立った。
「だめだよ君達。危ないから後ろに」
「いいえ。イーリス様。ここで退いては女が廃ります」
「そうだよ。ちょっと顔が似てるからって八つ当たりしようなんて、小さな奴！」
「まったく。なんて野蛮で汚らしい精霊なのかしら。そんな脅しに屈するなんて思わないでいただきたいわ」
アーソルドは呪文を唱えながら、なぜイーリスがこんなにもてるんだとばかりの目を向けた。
アランが水蛇を召喚し、騒がしい素人の四人を守らせる。

「水場じゃないからあまり力を出せないが、多少は防いでくれる！　死にたくなければそれの後ろにいろ」

そう言ってアランは今度は別の呪文を唱え始めた。

部屋の温度が上がって、汗が噴き出た。水蛇も長くは持たないかもしれない。

「あ、そうだ、製水機！」

イゼアは自分が直した製水機が近くに転がっているのを思い出した。

飲料用の水を作り出す魔動機だ。水があればそれを美味しくする機能もあるが、これは水がない場所でも水を作り出す事が出来る。大した水量ではないが、魔石が作り出す最良の水だ。

「あ、兄さんその足下にある、蛇口のついたストーブみたいなの、動かして！　蛇口回すだけ！　水場がないなら作ればいいから！」

「なるほど！」

イーリスは製水機の蛇口をひねった。

すると澄んだ水が細く流れ落ち、白い鱗の水蛇が嬉しそうに水を浴びて吸収する。そこを中心としてはっきりと分かるほど温度が下がった。

アーソルドは水蛇の作り出す水の気配に身を寄せるように後退しながら、次々と水の矢を放つ。

「ははは、この程度の水で、私の炎を消す事が出来ると思ったか？」

アーソルドの放つ水を受け流しながら、邪精霊は笑い、指先から炎を熾した。赤黒い炎は傍らのテーブルと天井を焼く。しかし対魔素材だからか、一瞬で燃えるような事はなかった。炎もじわじわとこちらに迫ってくるが、邪精霊の背後ほどではない。攻撃している二人の術は、消火の役割ぐらいは果たしているようだ。

イゼアは水蛇から流れる冷気と、邪精霊から発せられる炎の熱気で、目が回りそうだった。しかし、それだけだ。

「あの邪精霊、さっきからちっともこっちに近づいて来ないですね。いくら魔石を吸収したばかりだとしても……」

邪精霊がイゼアを睨みつけてきた。きっとイゼアの言葉が図星だったのだ。

これから皆を食べようとしているのに、砂のようなクズ魔石まで全て喰らって力をつけている。こちらの攻撃がほとんど効いていないのは明らかなのに、奴はまだ言うだけで動いていない。

睨み合っていると、突然マナラがイゼアの腕を取った。そして、昨日もらったばかりの腕輪を外された。

「あっ……」

イゼアはすっかり忘れていたが、これは太陽神自らが選んで、仮にも巫女であるイゼアに下賜された物だ。

マナラはそれを突き出すようにして、迷わず前に進み出た。すると邪精霊はわずかに顔を歪め、後ずさる。

「寄ってこないのは、これが怖いからか」

マナラはわざわざ挑発しながら邪精霊に近づいた。

「こんな物に怯えるんだから、邪精霊ってのは大変だねぇ」

「お、怯えているだとっ？」

邪精霊の姿が揺らいだ。精霊の姿が人型を崩している。それはつまり、理性をなくしかけている事を意味する。たったあれだけの挑発で。

それを見てマナラはエプロンを脱ぎながら笑った。付け入る隙があると睨んだのだ。

「挑発一つで姿を留めておけないなんて、人の姿は精霊の理性だって説は本当なんだねぇ。まぁどうでもいいけどさ。邪精霊なんてモノになっちまうような、誇りもない精霊の事なんて、どうでもいいからねぇ」

そこまで言うと、邪精霊の姿がさらに歪んだ。そして炎を抑えきれずに、人ではなく炎の塊になりかけ、既のところで留まった。

イゼアもエプロンを外して、もしもの時のために前に出る準備をした。イゼアが身に付けている服の性能を信じるなら、精霊の炎だからこそ、多少の事では燃えないはずだ。

「あぁら、お漏らしして情けない。このクソ熱いのに、そんなに熱をまき散らしてどうすんの、

この間抜けが」
「ほざけっ」
マナラの挑発で切れた邪精霊は、身を浮かせて滑るように前に出た。その精霊へと、マナラは腕を前に出した。しかしそこは、接触するにはまだ遠い位置だ。彼女の行動の意図が掴めず困惑した。
「ほらよ」
マナラの腕から、腕輪が投げ放たれていた。
「えええっ」
イゼアは予想していなかったマナラの行動を見て、思わず声を上げた。
挑発して宝石箱を取り戻そうとしているのは分かっていたが、投げるとはまったく思っていなかったのだ。
「ぐあっ」
その予想も出来ない行動に、邪精霊は腕輪を避ける事も出来ずに、胸で受けてシャスを取り落とした。そこにマナラが足を伸ばす。
「このっ、小娘ぇっ！」
邪精霊の肩が崩れ、炎が噴き出てマナラを襲った。マナラは宝石箱を足で引き寄せながら邪精霊の炎をエプロンで防ぐ。イゼアは追い打ちを掛けられるより先に、前に走ってエプロンを

投げつけた。案の定、本体に投げつけても燃え上がる事はなかった。
「くそっ、なんなんだこれはっ」
邪精霊がエプロンに手を掛けようとした。その前にイゼアは、そのエプロン、つまりその向こう側にある邪精霊の胸に向かって思い切り蹴りを入れた。エプロンと安全靴があるからこその荒業だ。
邪精霊は炭のようになっていた机を破壊し、壁近くまで吹き飛んだ。精霊は本来実体などない存在なので、見た目よりも軽いのだ。
イゼアはエプロンを諦めて、慌ててアーソルド達の元へと戻った。全身からどっと汗が噴き出た。
「お前等、無茶しすぎだっ！　火を防ぐは、実体のない崩れかけた精霊を蹴るは、お前等どんなエプロンを身に付けてるんだ!?」
突然の事に呆然としていたアーソルドは、髪を振り回して怒鳴りつけてきた。
「爆発するかもしれないから、高い素材を使ってるらしいんです。でもさすがに焦げ始めましたね」
それを聞いてマナラは、宝石箱を握りしめて苦虫を噛み潰したような顔をした。あのエプロンはとても高いのだ。
「ご主人様っ」

「じゃなくてイゼアの方だよ」
外に出てきたシャスはイーリスに手を伸ばしたが、マナラはイゼアへと宝石箱を投げた。それを危うく顔面で受け取りそうになりながら、両手で受け止める。
何とか宝石箱は取り戻したが、邪精霊を防いでいたらしいお守りをなくしてしまった。その腕輪は、身体を曲げて腹を押さえている、邪精霊の足下に落ちていた。とても拾いにはいけない。
「ところで、どうするんだ、あの腕輪があいつを遠ざけてたんだろう!?」
アーソルドは届きそうもない位置に落ちている腕輪を見ながら、マナラを怒鳴りつけた。
「はっ。あいつが警戒していたのは最初の軽い一撃を逸らしたからってのと、ラーハ様の気配がこびりついているからだよ。なかなかいい魔具だけど、冷静になって見ればあんなに魔石を喰らった邪精霊を防ぐほどの力はないってのは、すぐに感づかれる。そうなって腕輪が役に立たなくなるのを待つよりも、この方がいくらかマシだろう？」
マナラは額から流れ落ちる汗を拭いながら、冷静に答えた。
「だから冷静になれないようにしてやったのさ。さあ、奴は怒って、今まで近づきたくなかった物がなくなった。ますます熱くなるよ」
マナラはわき出る汗を拭うのを諦めて、腰に手を当て邪精霊を見た。
「よくも……よくも謀ってくれたな小娘どもっ」

邪精霊はイーリスではなく、マナラとイゼアに怒りの矛先を向けた。
どす黒い炎が立ち上がり、息を吸うだけで焼けてしまいそうな熱気が渦巻く。
「勝手に勘違いして、勝手に痛がってくれただけだろう。私はただ怖がっているのを指摘しただけ。ありもしない苦痛に気をとられて、子供に蹴られて恥ずかしいと思いなよ」
マナラはくすくすと笑いながら邪精霊をさらに挑発した。
邪精霊はマナラに視線を定めた。言葉の挑発を受けただけで、蹴ったうえに自分を封じていた宝石箱を持つイゼアの事など忘れてしまっている。
怒りに支配される寸前の理性は、人の形をなくすまいとするのに集中し、イゼアを気にしていられないのだ。
マナラがそうやって時間を稼いでいる間に、イゼアはシャスに問う。
「どうすればいいの？」
「たくさん魔力を頂戴」
「魔石の？」
「人間の魔力でいいよ。前はそうやって閉じ込めたの。ボクに、魔力を注ぎ込んで」
イゼアには精霊が食べていい魔力の限界は分からない。しかし、火力特化と言われていたイゼアの先祖の魔力を食べてもこの精霊は可愛らしく大人しいのを見れば、多少の事はどうとでもないのが分かる。

イゼアは両手に強く魔力を込めた。するとさすがに邪精霊はイゼアの方を向こうとした。
「知っているかい、ぼんくら精霊」
邪精霊の視線がマナラに戻る。
理性ではイゼアを、感情ではマナラを殺したい。その両者の間で揺れて、動きが止まっているのだ。
普通の精霊であれば、まずイゼアを始末するだろう。しかし邪精霊は揺れ動いて、動けなくなっていた。
邪精霊が怒りに弱いというのは聞いた事があったが、目の前でその弱さを見せられて初めて、精霊達が邪精霊を嫌がる理由が理解出来た。
理性を愛する精霊達にとっては、耐えがたいほど醜い姿だろう。
イゼアは魔力を注ぎ込んでいるシャスを見下ろした。すると彼はイゼアに両手を伸ばした。
「もっともっと。足りないもっと」
「いや、そうは言ってもね、全力を出すのって慣れてないし、やりすぎると私死んじゃうし、君だってああなっちゃうかも」
シャスに魔力をせがまれて、イゼアは小声で言い訳をした。
「あんな風にならないよ。力を溜めているのは箱だから。ボクはただ箱の中に入れているだけ」

つまり魔力をいくら注ぎ込んでも、シャスに悪い影響を与える事はないのだ。イゼアはさらに手に込める魔力を強めた。

「その机、さっきのエプロン、屋敷、なかなか燃えないだろう。イライラするだろう。金をかければ、人間はお前達をどうとでも料理出来る。愉快だろう？」

「黙れっ」

マナラに罵られ、邪精霊はイゼアに意識を向けたいのに、向けられないでいた。

言葉とは理性のある者にとって、大きな力だ。徐々に崩れているが、それでも理性が残っているから、邪精霊の動きは止まっている。

マナラは言葉を控え、邪精霊の様子を見た。必要以上に声を掛けては逆効果だ。

「遅い」

アーソルドはそっとイゼアの横から手を伸ばし、宝石箱に触れて魔力を注ぎ込んだ。

邪精霊がイゼア達に目を向けようとすると、即座にマナラが声を掛ける。

「お前如き本能に呑まれて戻れなくなった精霊が、どうして恥ずかしげもなく存在していられるのかねぇ」

「煩いっ」

「つまり食欲に負けたんだろ？　人間はそんなに美味しいか？　恥を捨てるほど美味いのか？　戻れなくなると分かっているのに手を出すなど、なんて愚かなんだろうな」

既に中身のない罵倒になっていた。炎は広がり、水は蒸発し、マナラの眼鏡は水蒸気でくもっていた。ちらりちらりとイゼアを見ている事から、彼女も焦っているのが分かる。

「理性が少しでも残っているなら、人の姿を保ったらどうだ？」

「だまっ……」

精霊は苦しげに胸を押さえた。姿が崩れかけたためにマナラは再び言葉を控え、その様子を窺う。しばらくすると、輪郭は幾分か安定したので、マナラは罵倒を再開した。

「どうした、邪精霊。お前は食い散らかすだけの悪食か？」

マナラがそう言った瞬間、戻った輪郭が膨れあがった。

「うぅぁがあああああっ」

邪精霊は叫ぶと、その上半身はとうとう崩れて、炎と化した。

「訳の分からん沸点だな！　この根性なしがっ！　崩れてるんじゃないよ！」

マナラの最後の罵声が飛んだ。

炎が天井を這い、室内の温度は飛躍的に上がった。邪精霊の下半身も黒炎と化し、床を伝って広がった。マナラは炎から逃げるように、水蛇のいる場所まで飛び退いた。水蛇は既に弱り始め、アランが慌てて魔力を分け与えた。

イゼアとアーソルドも水蛇に近い壁際までジリジリと下がりながら魔力を宝石箱に注ぎ込んでいる。

「まだかっ」
「まだまだ。さっき魔力を食べられちゃったから」
アーソルドは舌打ちする。魔力をこのまま流し込むのを優先するか、身を守るのを優先するかで悩んでいるようだ。
イゼアはふと、頭の後ろに熱を感じた。振り返ると、天井を這っていた炎が、まるで生き物のように壁沿いに降りてきていた。
生き物ではないが、この炎全てが人間の魔力を狙う邪精霊なのだ。
「イゼアっ」
アーソルドに肩を抱き寄せられると、首の後ろの熱が消えた。アーソルドは慌てた様子でイゼアの後頭部に触れた。彼の頬が耳のやや上辺りに触れていて、あまりにも近すぎる距離に戸惑い、彼の肩に手をかけた。
「あ……あああっ」
押し返そうとした瞬間、突然アーソルドが大きな悲鳴を上げた。
「ど、どうしたんです？」
イゼアは周囲を見回した。確かに炎に囲まれて、なんとか水蛇の魔力で押し留めているような状態では、あまり良好とは言えない。密着しているのも、その方が安全だからだろう。
「あ、髪が焦げてる」

宝石箱の隅に立って覗き込んだシャスが、イゼアを指さして言った。
イゼアははっとして、自分の後ろ頭に触れた。
切ったばかりの頃に比べるとだいぶ伸びて、あと数ヶ月で女の子に見えるようになるだろうと思っていた。
その髪が、今まで肩に触れれば指に当たるほどには長かった髪が、幾分か寂しくなっていた。
邪精霊はイゼア達を食べようとしているのだから、髪が焦げただけで済んだのはむしろ幸いだ。しかし、感情とは理屈を上回るものだ。
「せっかく伸びてたのにっ！」
「女の髪を焼くなんて、なんて事をしてくれたんだ、あのクソ精霊っ！」
イゼアとアーソルドは、怒りにまかせて邪精霊を睨み付けた。
どこが精霊の本体なのか、既に分からなくなっていた。人の姿をなくした力ある精霊は、時に軟体動物にたとえられるが、これはそれよりもひどい形をしていた。本当に意志のある存在なのか疑わしくなるほど、形がない。
これがシャスの魔力と魔石で醜く肥え太った、堕落して戻れなくなった精霊の末路だ。
「わぁ、髪が燃えてからすごく魔力が出てる」
シャスが嬉しそうに声を上げた。
「さすがはご主人様だね！　もう出来るよ！」

シャスは嬉しそうに宝石箱の上で手を振った。いつの間にかイゼアは彼の主として認められていたようだ。

「魔力が溜まったなら、アレをさっさとどうにかして！」

「うん、いいよ」

イゼアはアーソルドから離れて、宝石箱を前に突き出した。

シャスが宝石箱の上で飛び上がると、蓋が開いた。その開いた蓋の上へと器用に着地して、邪精霊へと手を伸ばした。

「怨嗟よ、呪詛よ、ボクの中に」

明るく、軽く言った。

炎が蠢き、顔をかすりそうになった。それをアーソルドが魔力で追い払い、後ろから抱きしめてきた。アーソルドに触れられた部分から、すっと熱が下がっていく。

「大丈夫かイゼア」

「はい」

この時ばかりはアーソルドに身を任せ、イゼアは出来るだけ箱を顔から離すために前に突き出した。

炎はやがて渦を巻き、竜巻が地上に降りてくる時のように、渦の先端が宝石箱の中に落ちてきた。



怒りで我を忘れた精霊は、既に言葉を発する事すら出来なくなっている。ごうごうと燃えさかるその音は、まるで怨嗟の声のようだった。声なき声。理性なき感情。

次の瞬間、イゼアは箱に触れている部分から魔力を吸われているのに気がついた。

「え、魔力吸ってる？」

「うん。今までのは発動に必要な分。ここからは封印するのに必要な分。ご主人様は倒れてたよ」

それを聞いて、慌てた様子でアーソルドが再び宝石箱に触れた。

「そういう事は先に言え！　倒れるまで魔力を吸われて死なせたら、いい笑い者だろうっ！」

「でも……」

「何の問題があるって言うんだ？」

「ご主人様でもないのに、魔力を食べちゃうのは……」

「さっきも分けただろう！」

「さっきのは箱に使ったんだもん。ご主人様でもない人の魔力を使う精霊は、笑われるんだよ」

初めての精霊らしいと言える発言に、アーソルドはため息をついた。

「またそういう訳の分からん理屈か！　お前の言うご主人様がどうこうという理屈が通っていた事なんてないだろう！　さっきまで顔しか見てなかったくせに！」

それでも不服なのか、シャスは顔を顰めた。
「僕はお前のご主人様の主人だからいいんだ！　主の主である僕の命令を聞け！」
「そっか！」
それで納得し、シャスはアーソルドからも魔力を吸い取り始めた。
すると炎を吸い込む勢いが強くなり、目に見えて炎が減っていくのが分かった。
要は理屈ではなく、シャスの感情の問題なのだ。
精霊達も人間も、ついでに神も、感情があるから強くなり、感情があるから自滅する。
イゼアは背後にアーソルドの吐息を感じながら、魔力を大量消費するという、魔道士なら当たり前の事を、生まれて初めて経験した。

◆◇◆◇◆

「きゃあ、なにこの部屋っ！」
部屋に入るなり、アリセレスは悲鳴を上げた。
自分の屋敷の広間が焼け焦げているのだから当然だろう。この広間はとても頑丈に出来ている。建設当時の最先端の技術の粋が集まっており、今でも通用する立派な建物だ。だから外から見れば大した事がないように見えるが、室内はいくら防火仕様でも、焼け焦げていた。

気を失っているイゼアの肩を抱いて座り込んでいたアーソルドは、母を見上げて答えた。
「邪精霊が暴れたんだ」
「じゃ、邪精霊!?　そんなものがどこから!?」
「この中に封じられてたんだ」
「ええっ!?」
アリセレスはシャスの載った宝石箱を見て仰天する。
「その邪精霊は!?」
「封じ直した」
アリセレスの上級精霊が不意に現れて、彼女の背中にしがみついた。
「聞いた事あるかも」
彼女はルフィル家に代々使役されている精霊だ。アーソルドが小さな頃、無謀な遊びをしていた時に、いつも心配してこっそりとついてきてくれた、姉のような存在だ。サマリドに戻ってきてからは、魔法の訓練も手伝ってくれた。
そうやって子供の面倒を見ては自分好みの精霊使いに育て、大人になれば仕える。それを繰り返しているのだ。
だからこの邪精霊の事を知っていても不思議ではない。
「ウィーゲム家の次期当主が自分の精霊の扱いに失敗して食べられてしまい、ご隠居が封じ

たって話を聞いた事があるわ。原因は女関係のゴタゴタだったような」
「そんな昔からウィーゲムの男はこうだったの？」
「まあ、たまに……？　私は水だから、あまり噂話に興味がなかったからよく知らないの。でも、私ですら覚えているぐらいだから、大きな事件だったんじゃないかしら」
水の精霊は水の流れない場所の事には疎いため、あまり噂話を知らない。今日のように外に連れ出される事の方が稀なのだ。
「よく分からないけど、みんな無事みたいで安心したわ」
アリセレスは一同を見回して笑みを浮かべた。
「ところでイーリス、どうして蛇に巻き付かれているの？」
「さぁ、よく分からないけど、撫でていたら懐かれたんです」
部屋の隅の方で、イーリスは水蛇に巻き付かれていた。水を出してくれた彼に、恩義を感じているのかもしれない。そのイーリスに巻き付いている水蛇の背を、びしょ濡れになった女達が撫でている。
「蛇までも懐柔するなんて、恐ろしいな、ウィーゲムの男は」
アランは自分が呼び出した水蛇を眺めて、しみじみと言った。
「確かに恐ろしいが、あの女共も怖い」
アーソルドは三人の少女達に対して、恐怖すら抱いていた。

イーリスが可愛がっているとはいえ、平然と蛇を撫でているのだ。一人ぐらいは本当に平気な女がいるかもしれないが、三人が三人ともというのはおかしい。

ここで自分達を守ってくれた蛇に対して悲鳴を上げれば、イーリスの印象は悪くなる。それを理解していて、平気なふりをしているのだ。

蛇が苦手なアーソルドには、彼女達の気持ちが理解出来なかった。

「アーソルド、イゼアは気を失っているみたいだけど、大丈夫なの？」

アリセレスに問われ、アーソルドはイゼアの寝顔を見下ろした。アーソルドを前に、こんなに可愛くて無防備な姿をさらしてくれたのは初めてだった。

「ああ、印に変化もないみたいだし、たぶん問題ない」

髪が燃えたし、火傷も負っていたが、残るような大怪我はなかった。

イゼアは魔法を使えないから、魔力の量の割には魔力を一度に放出した事がなかったためか、まだ魔力に余裕がありそうなのに、気を失ってしまったのだ。魔力を消費するというのは、一種の訓練なのだと教師が言っていたが、増やすためではなく、消費する事そのものが本当に訓練だったのだと、彼女を見てようやく理解した。

「マナラさんは何をしているの？」

「魔動機の確認を」

彼女はイゼアが無事なのを確認すると、迷わず魔動機の元へと走った。

幸いにも直した物は全て邪精霊から離れた場所に置いてあったため、被害は免れていた。
魔動機を一つ一つ見て回っていたマナラは、肩に掛かった三つ編みを払ってため息をついた。
「綺麗に乾かせば、ほとんど問題なく動くと思います。けど、この前注文した魔石が食われました。動作確認なら代用出来るんで、修理には問題ないんですが……」
「注文し直せばいいのね」
アリセレスは水浸しの魔動機を見て笑みを浮かべた。
「邪精霊が出てそれだけですんだのなら安い物よ。みんなが無事で良かったわ。せっかくアーソルドとイゼアが、誰からも祝福してもらえるようになったというのに、不幸な事にならなくて、本当に良かった。ああでも、ここで披露宴をする予定だったのに、どうしましょう」
その言葉を聞いて、アーソルドは自分の耳を疑った。しかし母の困り顔を見る限り、空耳ではなかったようだ。
「母さん、披露宴って、何を言ってるんだ。いくら何でも気が早すぎるだろう」
「それもそうね。じゃあ、二人の式の時までには、立派に改装しましょうね」
「いや、その、そうじゃなくて……」
「大丈夫よ。ちゃんとパレードもするわ」
アーソルドは話を聞いてくれない浮かれる母の姿を見て、額を押さえた。
「いや、あの、おば様。せめてイゼア本人に訊いてからにしてあげてくださいっ」

蛇に巻き付かれて動けないでいるイーリスは、その場で妹のために抵抗した。
「あ、そうね。アーソルド、あなたまだプロポーズしていないじゃない！　昨日はラーハ様に邪魔をされてしまったのよね。せめてプロポーズの後にしてくだされればよかったのに」
プロポーズの言葉もかけていない事に気付いてもらえて、アーソルドはほっとした。
「イゼアったら、きっとあれがプロポーズをしようとしていただなんて、気付いてもいなかったわよ。この子には、はっきりと言ってあげないと！」
「わ、分かってる……でも……」
アーソルドはよく眠るイゼアの横顔を見た。時折震える長いまつげ、すっと通った鼻筋、兄よりも丸みのある頬、薄い唇、細く白い喉。さらにその下、シャツに隠れているだろう太陽と死の印。
「今のままじゃだめだ。こいつは何が切っ掛けで死ぬかも分からないのに、僕がこんなに情けないようじゃ……」
はっきりと下がっていろとも言えなかった。任せろとも言えなかった。そうしたら女達は勝手に前に出た。彼女達を守る事を考えていたのに、安全な場所にいて欲しかった彼女達が、アーソルドがやるべき事をやってしまった。
「僕はまだまだ経験不足だった。今思えば、やりようによっては室内でも何とか出来たのに」
アーソルドが人間である以上は、力を伸ばすのにも限界がある。だから必要なのは経験と、

とっさの判断力だ。マナラの思い切りの良さは、座学や教師に守られてのお遊びのような実戦では身に付かない。

今のままでは、イゼアはアーソルドよりもマナラを頼りにしてしまうだろう。彼女はアーソルドにはないものを、確かに持っているのだ。

「僕はもっと、何が起こっても対処出来るように、こいつが僕を頼ってくれるようにならないといけないんだ。イゼアは、ただでさえ色んな物を背負わされているから」

困ったら迷わず頼ってもらいたい。二柱の神の印を持つ彼女と一緒に生きるなら、それだけ頼りがいのある男にならなければいけないのだ。

「まあ、アーソルド……なんて志が高いの！」

アリセレスは息子の決意を聞き、嬉しげに胸の前で手を合わせた。

「分かったわ。二人ともまだ若いもの、焦る必要はないわ。その間に、ちゃんとサマリドを整えておくから、がんばるのよ」

母が理解してくれた事に安堵して、アーソルドはイゼアの肩を強く抱いた。

イゼアが起きている時にはとても出来ない、大胆な行動だ。肩を抱くどころか、手を握る事すら困難だ。

しかし地下では立たせるために手を差し出す事が出来たし、さっきは守るためとはいえ、後ろから抱きしめても嫌がられなかった。イゼアが嫌がらずに触れさせてくれたのを思い出すと、

アーソルドは跳び上がりたいほど嬉しくなった。

がんばらなければならない事はたくさんある。その中でも一番簡単な事が、アーソルドにとって一番難しい。

「母さん、がんばるよ」

本当に、がんばらねばならない。

◆◇◆◇◆

イゼアはため息をついて鏡の中の自分を見た。整えてもらった髪は、髪を切ったばかりの頃のように短くなっていた。跳ねる髪を何とか抑え、作業用のシャツに袖を通す。これのおかげで大した火傷もなかったので、マナラには感謝しなければならない。

パジャマ以外に袖を通したのは、一週間ぶりになる。

邪精霊を封印してから、イゼアは丸三日ほど意識不明だった。皆、最初の頃は楽観視していたらしいが、二日目に入った辺りで医者を呼んだり、鈴を使ってターラを呼んだりと、大変だったそうだ。

結局、慣れない事をしたのが原因だったらしい。それを聞かされた時、イゼアはとても驚いた。魔力を使うという事が、そこまで大変な事だとは今まで考えもしていなかったのだ。

ターラが一週間は魔力を使わせないで安静にしていた方がいいと言ったために、イゼアは目を覚ましてからもベッドで養生するはめになった。

その間はリリアが看病してくれた。アーソルドの事を言われ続けるのではないかと心配していたが、不思議と一切口にしなかった。呪いのせいで嫁のもらい手もない、という理由がなくなったからかもしれない。それがよほど嬉しかったのか、看病している間はずっと上機嫌で、イゼアは久々に母と一緒にいて安らぐ事が出来た。

イゼアが寝ている間にイーリスの誕生日がすぎて、イゼアは結局プレゼントを渡し損ねた。そしてその誕生日当日に、イーリスの特別な女友達が他にも二人いたのが発覚して、また混乱したらしい。

話し合いもしたようだが、決着はつかなかったようだ。ただし美術館の事では話が進んだ。ウィーゲム家が任されたのだから、イーリスを館長にしてはどうだろうと、美術館の館長から提案があったのだ。今の美術館の館長は高齢で、態勢が整う頃には引退するからちょうどいいそうだ。

何より、イーリスが案内したら客が増えそうだから、ぜひにと。

イゼアは最後にもう一度、髪が跳ねていないか確認してから部屋を出た。広間は使用出来なくなったため、濡れた魔動機は外で乾かし、修理は別の部屋でしている。

その部屋へ向かう途中、アーソルドが向こうからやって来た。

「イゼア、大丈夫か？　印が疼いたりしていないか？」
「大丈夫ですよ」
よほどターラに脅されたのか、皆は過剰にイゼアを心配した。特にアーソルドは責任を感じたらしく、一層の精進をイゼアに誓った。邪精霊のせいで、アーソルドの中で築き上げられていた自信が崩れてしまったようだ。
「もう髪の事も倒れた事も気にしなくていいですよ」
「そうじゃなくて……まあいい。今日は無理をするなよ」
そう言うと、アーソルドはじりじりとイゼアに接近し、いきなり手を乱暴に握ってきた。
「ど、どうしたんですか？」
「ば、場所を知らないだろう。それに、途中で倒れたら大変だし……とにかく、黙ってついてこい！」
アーソルドは乱暴に言って、ゆっくりと歩き出した。
おおよその場所は聞いているが、迷うかもしれないので、有り難いには有り難かった。
しかし、その案内してくれるアーソルドの態度が、とても不気味だった。
「あの……どうしたんですか、アーソルド様。いつもなら首根っこを掴むのに。そういえばこの前も手を引っ張ってましたけど」
アランが死霊術を使った時、立たせるために手を差し出したのだ。いつもなら腕を掴んで、

ひどいと髪を掴んで立たせる。
「あれは、ちょっと嫌だと思ったからだっ！　ほ、ほら、ラーハ様に連れ回された時に！」
ラーハの行いは、アーソルドが行動を改めるほどの事だったらしい。
「あの、アーソルド様……汗で手がベタベタして気持ち悪いんですけど」
「し、失礼な奴だなっ！　黙ってろ！」
アリセレスに手を引いてくるように命じられたのだろうかと思いながら、アーソルドのやけに汗ばんだ手を見ながら、黙って歩いた。
部屋に着くと、中ではマナラとアランが食事を取っていた。イゼアも席に着き、給仕がオートミールを用意してくれた。
「今日は久しぶりにベッドの外での食事とお仕事ですね。楽しみです」
イゼアは誰にともなく言って、スプーンを手にした。
今まで絶対安静と、元気なのにベッドの外に出ると叱られたのだ。働ける事が嬉しくてたまらなかった。
「喜んでるところ悪いけど、とりあえず修理は全部終わったよ」
「えっ!?」
マナラに言われて、驚いて声を上げたが、確かに作業の進み具合的に、終わっていてもおかしくないと気付いて、肩を落とした。

「今日は届いた魔石をはめて、それで終わり。で、明日帰る」
「え!?」
声を上げたのはアランだった。
「そんな、帰るのか!? イゼアが帰ったら、アーソルドも帰ってしまう。まだ休みは半分残っている」
つまり実家に帰りたくないのだ。
「え、アーソルド様、帰るんですか?」
「か、帰るぞ。母さんは忙しそうだし、居づらいし」
マザコン気味の彼が、忙しそうな母を手伝わずに帰るというのは、珍しかった。
イゼアが訝しんでいると、マナラがアランに提案した。
「じゃあ、アーソルドと一緒に自由研究でもしたらどう? 課題のためだって言えば、帰らなくてもいいんじゃないの」
「しかし、それはもうイーリスの観察日記をつけている」
「最近見ないと思ったら……キーオが可哀相だからそれを提出するのはやめてやって」
二人の担任であるキーオ＝セファインとは幼馴染みであるマナラは、おかしな観察日記をつけているアランを止めた。人間の観察日記などを提出されたら、セファインは頭を抱えるだろう。

アランの事は、アーソルドがどうにかするはずだ。もしどうにか出来なくても、観察日記は出来ているのだから、どうしても間に合わない時はそれを使えばいい。

「んじゃあ私は魔石を取りに行ってくるよ。イゼアはゆっくり食べて、庭に出て軽く運動でもしてな」

「えっ、待ってください。だったら散歩がてらについて行きますよ」

「い、いや……」

マナラは目を逸らして立ち上がったから、イゼアも慌てて後に続こうとした。

「ご主人様、もう食べた？　朝食終わった？」

突然声を掛けてきたのは、シャスだった。彼は自分では動けないため、顔を合わせるのは久しぶりだった。

「ああ、シャス。そういえばこの子の中身どうなったんですか？　ターラ様を呼んだなら、どうにかしてもらったりしたんですか？」

「そのままだよ」

イゼアは驚いてマナラに目を向けると、彼女は肩をすくめて見せた。

「なんでも、邪精霊の事は精霊に任せてるから、自分が手を出すのはあまり良くないって」

「え、どうしてですか？」

「始末出来ない邪精霊が存在するって事は、弱い精霊しかいない証拠だから良くないって」

「うちの土地の精霊弱いんですか？」
イゼアはずっと強い精霊の多い土地だと思っていたため、驚いて聞き返した。
「まさか。ただ、一番強い精霊が邪精霊になっちゃったみたいでさぁ。自然淘汰されるべきだから、封印出来ているなら、がんばって精霊を育てて、自分達で対処するべきだって」
「なるほど……」
「その役目はアーソルドになるだろうから、箱は懐かれているイゼアが管理していなさいって」
「えっ……」
シャスは宝石箱に座り、嬉しそうに笑っていた。
「シャス、絶対に出しちゃだめだよ。出していいよって言われても、勝てそうにもない人はだめだからね」
「大丈夫だよ。鍵を増やしてもらったんだ。資質がない人には、開けられなくなったの」
イゼアは驚いてシャスを見つめた。彼はイゼアをじっと見つめ返し、へらりと笑う。目に見える鍵はないが、以前とは魔力が少し変わっているような気がした。それが鍵なのかもしれない。
「へぇ、つまりこれを開けられたらうちのご先祖様を超えたって事になるんだ」
「そう。ご主人様、ご主人様はいつお子を産むの？」

シャスは瞳を輝かせて尋ねてきた。
「……さぁ。相手もいないし」
「ご主人様は、ご主人様のご主人様といつ結婚するの？」
ご主人様のご主人様。
しばらく悩んで、ようやくそれがアーソルドの事だと気付いた。
「結婚なんてしないよ。なんでそんな事言うの？　まさか私の母が？　それともおば様が？」
「お外に出た時ね、みんなが言ってたよ。せっかくラーハ様に祝福していただいたから、早く二人に結婚して欲しいって」
イゼアはマナラを見た。すると彼女はさっと目を逸らした。
次にアランに目を向けると、彼は突然壁に話しかけ始めた。
その次にアーソルドに目を向けると、彼は顔を真っ赤にして、首を横に振った。
「居づらいって、まさか、まさかそういう意味ですか!?」
「ぼ、僕だって、結婚なんてまだ早いって、誤解を解こうとしたんだ！　でももうサマリド中に……っ」
「そんな言い方したんですか!?」
「わ、悪いかっ!?」
イゼアはテーブルに両手をついた。

（ど、どうしようどうしようどうしようどうしよう）

街の皆から見れば、イゼアとアーソルドの結婚というのは『とても良い事』になる理屈は理解出来た。呪われた街から、祝福を受けた街になるチャンスだ。

美術館と、両家の婚姻。

その二つが揃えば、誰も疑う事は出来なくなる。

理解出来るからこそ――。

「イゼアっ」

部屋のドアが開き、上機嫌なアリセレスが入ってきた。

「母さん、どうしたんだ？」

「イゼアがもう働こうとしてるって聞いて、慌てて来たのよ。せっかくドレスの準備をしようと思ったのに」

「え、なんでだ？」

目を丸くして問うアーソルドに、アリセレスは楽しげに答えた。

「素敵なドレスを作るために、今から準備をしなくちゃ。イゼアはどんな生地が好きかしら？」

使用人達が、生地やレースなどを持って入室した。その生地は、どう見てもウエディングドレスに使いそうな純白だった。

アリセレスは、少女のように浮かれて、運び込まれるそれらを見ていた。
「いや、その……」
「イゼアはどのラインのドレスが好きかしら？」
と、見せられたのはウエディングドレスのデザイン集だった。
「……こ、これは」
イゼアの血の気が引いていく。
「ああ、形だけよ。これは気にしないでね。イゼアも大人になるから、今の内にちゃんと生地を用意しないと。仕立てるのは成長が止まるまではしないわ」
これは絶対にウエディングドレスの準備だ。
背中を冷たい汗が流れ落ちた。
「か、母さん！」
「イゼアにはこういうラインが似合うと思うの。でも、本人の好みもあるし」
「いや、その、だからっ！　そういうのはっ！」
アーソルドがうろたえながら大きく首を横に振った。
しかしアリセレスは、動揺している息子の言葉を聞き入れず、一人でドレスを選んでいる。
イゼアは額に手を当てた。リリアが何も言わなかったのは、この後戻りしにくい雰囲気を知っていたからなのだ。

頭が痛くなってきて、ため息を一つついた。
「おばさま、私、頭が痛いので……」
「まあ大変！　安静にしていなくちゃ！　さっ、部屋に戻りましょう」
「は、はい」
イゼアは覚悟を決めた。
何としてでも明日のうちにアンセムに帰り、アーソルドが別の誰かと結婚するまでは故郷に戻らない。
そう強く覚悟を決めながら、ベッドの中で涙した。

あとがき

こんにちは、かいとーこです。

二ヶ月連続刊行第二弾、『魔道都の修理屋　甘いささやきはキケンです！』をお手に取っていただきありがとうございます。

研究日誌は一ページしかなく、文字数を気にして書いていたあとがきですが、今回は四ページもあるので、その分もダラダラと語ります。

まさか技術職主人公なんて華のないニッチな話で、続編を出せるとは思っていなかったので、このあとがきを書いているのも不思議な気分です。神様やお貴族様が出るとは言っても中身は……。

これもすべて、可愛らしい表紙を書いてくださった鳴海先生と、可愛らしく装幀してくださったデザイナーさんと、ぎりぎりまでサブタイトルを一緒に考えていただいた編集さんのおかげです。

修理屋を出してから、『歯車＝格好いい』が『歯車＝お花のように可愛い』ものへ

と認識が変わりました。

魔道都の続編が決まったのは、三月と四月に発売する原稿を抱え、それぞれ大詰めの作業をするぞ、という時期でした。

五月に発売と言われて、その時点で二ヶ月連続刊行することになっていた当時は、自分の聞き間違えかなと思ったんですが、悲しい事に私の耳は正常でした。

意外と出来ちゃうものですね。一日たった十ページ書けばいいんですから、楽勝でしたよ。

書いていた当時の記憶がほとんどないんですが。

今回は里帰り編です。イケメンの呪いです。ラーハ様が見てます。

プロットの段階のイーリスは、普通に打算的なイケメン兄ちゃんでした。

いつの間にかイケメンの呪いが生まれ、イケメンを拗らせて、鈍感の呪いにもかかっていました。きっとあの一族にかかった何かの呪いでしょう。

ファルシスもプロットの段階では、普通にちょっと不憫で格好いいお兄さんでした。出てきた時、なぜかああなっていました。きっと旅行前で、食べ物の事ばかり考えていたからでしょうか。

まだ埋まらないので、宝石箱について。
最初、宝石箱は金庫の予定でした。さすがに金庫はないだろうと思い、宝石箱にしました。
金庫の方が制作者のイロモノぶりが際立ったのですが、持ち歩けないから不便すぎたので。この制作者が、先月発売した研究日誌のメインキャラ達です。
なので、宝石箱の精霊の容姿は、ルフィル家ではなく、制作に関わった研究日誌のキャラに似ているという、どうでもいい設定があります。

ページがまだまだあるので宣伝です。
先月、『魔道士の研究日誌　精霊はハチミツがお好き?』を発売しています。
魔道都の中でも触れている、技術者の技術が一番高かった時代の話です。
家事能力ゼロの汚屋敷(おやしき)メーカー、痴漢は燃やせという亡き父の教えを真に受けている美少女研究者リゼット＝クロリスと、その研究に興味を持った男達の話です。
イゼアとは正反対の、ふりふりふわふわな、ちょっぴりマッドな変人です。

さらにその前の月には、アルファポリスさんから、『詐騎士（さぎし）』3巻を発売しています。

騎士をやめさせられて、普通の令嬢をしながら王子様をお手伝いしているのに、勝手にドS王子様の印象改善計画を推し進めたり、マフィアに喧嘩売ったり、大きなぬいぐるみのようなウサギ獣族を殺伐ともふもふしています。

こちらは単行本なので、一般の書籍か、携帯小説コーナーの辺りに置かれています。

白夜城　http://byaku.skr.jp/

冒頭シーン直前を書いた番外編が、サイトの番外編置き場にあります。

興味があれば、ぜひご覧ください。

ここまでお付き合いして下さり、ありがとうございます。

また皆様のお目にかかれる日が来ますように。

一迅社文庫アイリス

魔道都の修理屋
甘いささやきはキケンです！

2012年6月1日　初版発行

著　者■かいとーこ

発行者■杉野庸介

発行所■株式会社一迅社
〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
電話03-5312-7432（編集）
電話03-5312-6150（営業）

印刷所・製本■大日本印刷株式会社

ＤＴＰ■株式会社三協美術

装　幀■今村奈緒美

落丁・乱丁本は株式会社一迅社販売課までお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
本書のコピー、スキャン、デジタル化などの無断複製は、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書を代行業者などの第三者に依頼してスキャンやデジタル化をすることは、個人や家庭内の利用に限るものであっても著作権法上認められておりません。

ISBN978-4-7580-4332-8
©かいとーこ／一迅社2012　Printed in JAPAN

●この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには関係ありません。

この本を読んでのご意見
ご感想などをお寄せください。

おたよりの宛て先

〒160-0022
東京都新宿区新宿2-5-10
成信ビル8F
株式会社一迅社　ノベル編集部
かいとーこ 先生・鳴海ゆき 先生

一迅社文庫アイリス

New-Generation アイリス少女小説大賞

作品募集のお知らせ

一迅社文庫アイリスは、10代中心の少女に向けたエンターテイメント作品を募集します。
ファンタジー、時代風小説、ミステリー、SF、百合など、
皆様からの新しい感性と意欲に溢れた作品をお待ちしています！

応募要項

応募資格 年齢・性別・プロアマ不問。作品は未発表のものに限ります。

表彰・賞金

金賞 賞金100万円+受賞作刊行

銀賞 賞金20万円+受賞作刊行

銅賞 賞金5万円+担当編集付き

選考 プロの作家と一迅社文庫編集部が作品を審査します。

応募規定

- A4用紙タテ組の42字×34行の書式で、70枚以上115枚以内
  （400字詰原稿用紙換算で、250枚以上400枚以内）。
- 応募の際には原稿用紙のほか、必ず ①作品タイトル ②作品ジャンル（ファンタジー、百合など）
  ③作品テーマ ④郵便番号・住所 ⑤氏名 ⑥ペンネーム ⑦電話番号 ⑧年齢 ⑨職業（学年）
  ⑩作歴（投稿歴・受賞歴） ⑪メールアドレス（所持している方に限り） ⑫あらすじ（800文字程度）を
  明記した別紙を同封してください。

※あらすじは、登場人物や作品の内容がネタバレも含めて最後までわかるように書いてください。
※作品タイトル、氏名、ペンネームには、必ずふりがなを付けてください。

権利他 金賞・銀賞作品は一迅社より刊行します。
その作品の出版権・上映権・上演権・映像権などの諸権利はすべて一迅社に帰属し、出版に際しては
当社規定の印税、または原稿使用料をお支払いします。

New-Generationアイリス少女小説大賞締め切り

2012年8月31日（当日消印有効）

※すでに「第4回一迅社文庫大賞アイリス部門」にご応募頂いた作品は、今回リニューアルされた「New-Generation アイリス少女小説大賞」へ自動的に移行いたします。

原稿送付先 〒160-0022 東京都新宿区新宿2-5-10 成信ビル8F
株式会社一迅社　ノベル編集部「New-Generationアイリス少女小説大賞」係

※応募原稿は返却致しません。必要な方は、コピーを取ってからご応募ください　※他社との二重応募は不可とします。
※選考に関するお問い合わせ・ご質問には一切応じかねます。　※受賞作品については、小社発行物・媒体にて発表いたします。
※応募の際に頂いた名前や住所などの個人情報は、この募集に関する用途以外では使用致しません。

◆ 本大賞について、詳細などは随時小社サイトや文庫新刊にて告知していきます。◆

9784758043328

ISBN978-4-7580-4332-8
C0193 ¥590E

1920193005905

定価：本体590円＋税
発行　一迅社
一迅社文庫アイリス



太陽神に呪われ、魔法が使えない一族に生まれた少女イゼア。彼女は、魔力で動く機械を修理する魔動機修理師に弟子入りしていた。ある日イゼアは、自分に執着する魔道貴族で、幼馴染みのアーソルドから出張修理を依頼されてしまう。以前、愛人契約を迫られて彼から逃げ出したため、断ろうとするイゼア。けれど、結局修理のためにアーソルドと一緒に帰郷することに。しかも、彼の家に滞在することになって――!?　待望の第２弾登場！

魔道都の修理屋　甘いささやきはキケンです!